

が方へ持参せよ、則武藏坊辨慶殿御判居わりし證文を引きかへ、軍終らば一倍増で御返濟と、百姓どもを騙せしが、辨慶様のお目にかより、其上で御用に立つと、追付け爰へ皆來をる、爰が氣の毒、何とぞ急に辨慶を拵へずば成るまい、指詰め頼むは頭役、法印辨慶に成つてたも「ハレやくたいもない、辨慶は兵、愚僧はよわ者、七尺ゆたかの太の法師と、五尺に足らぬちつくり法印、似ても似付ぬお赦しなされ」「イヤこれ、足を爪立つれば、四寸や五寸は瞞めらるゝ、其上をまだ繼足して、高足駄で背はくろめる、辨慶が身の所作は、仁王の形でして居りやよい。あれく向ふへ百姓ども、隙取つては氣の毒」と、いやがる法印無理やりに、連れて一間へ入りける。百姓どもはどやくくと、吠藁番引つかたけ、「何と太郎兵、彼お山ぶは是かいの」「オオ聞及ぶ辻法印、爰ちやくくと内に入り、「お方様、是の内に辨慶様がお待ちかね、百姓共、お馬の飼料持つて來たと、御家來衆にいうて下され」「成程々々、辨慶様もお待ちかね、どりや其通り申上けん」と立つて行く。景季は法印を辨慶に拵へ立て、一間を立出で、「ヤア百姓共、約束違へず大儀々々。先程も云ひ聞かす通り、源氏の大將判官殿の、御用に立つは汝等が身の大慶、軍終らば一倍増しにて返さるゝ、御判頂戴するは有りがたいか」「ハア有りがたうはござれども、只證文より手形より、辨慶様にお目見え致し、お直の詞下さるゝが、御判よ

りも慥な」「そりや百姓等が願ひに任せ、只今是へ」と反古張の、明り障子さつと開き、立出づる辻法印、往生すくめの辨慶出立、肩から裾まで束髪斗の一枚肩、白上に紺染の太夜著、女房がいつちよら帯、引きしごいて蜻蛉結び、瘦せたる頬に鍋炭塗り、處まだらの武藏坊、長刀がはりの金剛杖、竹簀子を踏み轟かす木履の繼足、凄じう見られんと、踏んばたかつたる其有様、さらに強うは見えざりける。源太は態と兩手をつき、「大物の百姓共お目見え」と披露して、「こりやくと汝等、只今下にお居りなさる、其處らあたりへ地響せう、心得て驚くな」ハアハアはつと恐れ敬ひ、ためつすがめつ、見られて術なき辻法印、見せ物に出た心地なり。百姓共口々に、「何と聞及うだより手先なども青白け、ひがいですな生れ付、お背はきよいと高けれど、からだに似合はぬおつわりが小さい、振賣の飯蛸で、天窓に實のない辨慶様、あれでも兵様かいの」と、目引き袖引きつぶやけば、「扱は旦那の顔の窠れで、誠の辨慶様でないと思ふか、都から段々打續く戰場のお勞、殊に此間はお風を召しておしつらひ、氣むづかしさに態と物もおつしやれぬ。ア、御病氣でなくば、旦那の力が見せたいな。アレ見よ、あの右の肘に百人力、左の肘に百人力、夫程力持つ者が、辨慶様で有るまいか、あはれやれ米一粒借すまいと、いうて見よ、お腹が立つと惣身の力がぶつくと涌出し、千人でも萬人でも、風に木の葉鬼に

煎餅、めりく、ひしやり粉微塵」と、強い揃へを言ひ立つれば、山伏も頭に乗つて、強う見せんと拳を握り肘を張り、力めば額に黒汗流れ、腕白な手習子が、晝上り見る如くなり。百姓共は頭を下け、「其様にお強い事を聞く上は、なう皆の衆、何と思はしやる」「ハテ辨慶様に極つた、とても事の念晴しに、今のを問うて見さつしやれ」「オ、夫々、私共が在所の物知り咄に、辨慶様は書寫にござつて、御紋は輪棒と聞きましたが、見れば御紋は束熨斗、どうした事」と問ひかけられ、源太もほうと行詰り、「イヤ何、物ぢやはい、僅な兵糧米をそち達に無心おつしやる風體、世に連れてりんほうの御紋も、びんばふに變つた」と、眞顔になつて取りかくれば、「ア、お笑止や、何ほ力が強うても、錢銀には楯づかれぬ、内證聞いておいとしい」と、藁舂吠米俵、めんく、に持つて出で、「おらは白米一斗五升、大豆八升、麥稗小豆、濡手で粟の摺み取り、源太は硯引寄せ、手取早く證文認め、書判しつかとすゑの世に至りても、大物の浦に留まりし、武藏坊辨慶が、借證文とは是とかや。源太は名宛に引合せ、一札渡せば受取つて、「畢竟是には及ばねども、面々の念の爲、軍終らば一倍増を、お忘れなされて下さるな、お暇申す」と打連れ立ち、川中で剥がれた尼が崎、大物さして立歸る。女房は走出で、「さつてもひあいな欺し様、中程からほぐれが来て、わしやあぶく、思うて居た」「一向に此の法印は、始終夢

中で遣り付けた」と、夜著を脱捨て汗押し拭ひ、「ア、仕おほせたと思つたれば、どつかりと氣草臥」「オ、道理々々、首尾能くいたもそちが蔭、源太は此雜穀物、金の代りに向ふへ束ね、身の廻りを受戻し、片時も廓へ急ぎたし」「實に御尤さりながら、持ちもならはぬ肩仕事、凡是でも一石餘り、お一人ではいかぬ、時の用には法印も、片端を仕らん。若しも是にて不足ならば、辨慶が脱殻の、夜著も次手に曲けませう」と、藁舂吠指荷ひ、一足いては肩をかへ、二足いては息をつぎ、香島の里に馬は有れど、君を思へば徒歩はだし、人は戀ともしらけのよねに、憂身を窺すぞ世なりけり。爰も名高き難波津に、戀の舟著數々の、多かる中に取分けて、酒汲みかはす神崎の、里の色宿千年屋は、客に絶間もなかりける。殊に今宵は晴のお客と、書院座敷のはき掃除、亭主が袴、中居が揃への紅も、園生に植ゑて隠れなき、大名客御入と、表の方賑はしく、人目を忍ぶ旅乗物、御供廻りもかるく、と、地に鼻付けて主が答拜、御出を待つやこがれしと、追蹤輕薄切聲の、切戸口より直に昇込む奥座敷、梅が枝様へ人走らせ、ソレお菓子たばこ盆、釜を沸らす音羽山、馳走ふりとぞ見えにける。雪や霰や花ちる嵐、かはい男に偽なくば、本の心で淡路島、千鳥も今は此里へ、身をば賣られてやり梅の、名も梅が枝の突出には、名木並ぶ方もなく、ちとせが許に入來り、亭主立出で、「エ、遅いく、梅が枝様、

けふのお客は東國のさるお大名、初對面から身請の相談、箱入の駿河小判、づつしりとしたお捌、サアく、奥へ」と云ひければ、「東國とおしやんす其客の年ばい、廿ばかりででつくりと、色の黒い髭男かえ」「氣もない事く」「夫で心が落付いた、わたしも爰に待合せ、逢はねばならぬ人が有る」「おつと合點、そこは我等が請込み、禿衆で座敷をくろめん、お前の御用は被深間の源太様に」あひの襖を引立てよこそ入りにける。「此姉様はなぜ遅い、杉を迎にやつたるに、早う來はなされいで、心急かれやア、しんき」と、待つに程なく姉お筆、千鳥に逢ふが嬉しさに、足もいそぐ遣手が案内、梅が枝見るより、「なう待ちかねた姉様、さつきに道で逢ひし時、言ひたい事の數々も、人目を遠慮」「オ、そりや姉も同じ事、何からかよら言はうやら、よう健で居てたもつた」「お前も御無事で嬉しい。久々便りも聞きませぬが、爺様もおまめに在る、やつぱり桂の里にお住みなされてござるかえ、御持病は發らぬか」と、問ひかけられてお筆は涙、「まだとよ様の事知らずか」「知らぬかとは氣遣ひ、どうぞいな」「アノとよ様はお果てなされたはいなう」「エ、」はつとばかりに梅が枝は、しばし涙に暮れけるが、「ア、思へばわしは不孝者、とよ様は息才な、健でござると思ふから、我身の戀に跡先忘れ、末に面倒見届けうと、約束せしお人が不慮に勘當受け給ふ、男の爲に此勤、身の徒に

親の事、思はなんだ罰があたつて、命日忌日がいづちややら、知らずに暮した不孝の罪、姉様こらへて、とよ様のお位牌へ、詫言をして下さんせ」と、はつと叫べば、「オ、悔は道理、其上にまた悲しきは、お煩ひでも有る事か、刃にかより果て給ふ、其様子は自らが木曾殿に宮仕へ、假初ならぬ御主人の御臺若君諸共、父の方に圍まひしが、桂の里にも居る事叶はず、都を出でて大津の泊、追手の者が寐込へ切り込み、暗がり紛れうろたへて、相宿の順禮の子と若君を取違へた、其鹿相が御運の強さ、先の子は殺され若君は恙なく、慥な人に渡せしが、悲しいは母御様、其場でお果て、隼人様も敢なき最期、親の敵が討ちたさに、そなたの行力しるべの人に、聞いて尋ねし此神崎、廻り逢うたは兄弟の縁の深さ、女でこそ有らうすども、兄弟が心を合せ本望遂けう、姉が力に成つてたも、頼むは妹ばかりぞ」と、語るも聞くも涙なる。「なう姉様、悲しい中にも敵を討つが梅が枝がとよ様への言譯、其マア敵は誰でござんすえ」「アア聲が高い、壁に耳、諸萬人の入込む色里、敵に洩れては一大事」と、咄しの半へ亭主かけ出で、「サア梅が枝早うく、お前の背丈金積んで身請の相談、座敷は金で眩い、そこを不動になさるゝはどうした心底、せひにお供」と手を取れば、「ア、まう其處へ行くと云ふに、聞分けない。コレ姉様、今は何も咄されぬ、後に必ず來て下さんせ」「成程々々、今咄した事、是非に

今宵は延されず、其用意して待つて居や」後にくと約束固め、お筆は旅宿へ立歸る。「サア太夫様のお出の様子、お座敷へ注進」と、きほひかよつて走り行く。「シヤほんに何ぢやの、此梅が枝が心も知らず、身請々々と取持顔、厭らしい。夫はさうと源太様、暮方からお越しなされと、香島まで文やつたに、なぜ遅い事ぢやまで、早う逢ひたや顔見たや」逢へばどうしてかうしてと、たばこ引寄せ薫らす、胸の思ひは日に千度、夜ごとくに通ひくる、梶原源太景季、心を盡せし身の廻り、大盡小袖長羽織、炮烙頭巾紫の、色に引かるゝ揚屋町、千年が奥を窺へば、「おれを待つのか疊算、ちやうど好い首尾幸」と、すつと通れば梅が枝は、巨燧にとんと身を背け、明煙比べん淺間山と、そらさぬ顔で吹く煙管。「コレ歌どころぢやない來たはいの、何が機嫌に入らぬやら、めつきりと持たせぶり、大名客の襟に付き、御勿體でえすか、我等が様な浪人の、微びた衿には好かれまい」と、ずんど立つを、「待たしやんせ、座敷ばかりを勤める筈で、けふ爰へ賞はれたは、文で知らせて合點ぢやないかえ。色も戀も打ち越して、心底盡の二人が中、口舌どころぢやござんすまい。お前と一體かう成つたは、並大抵の事かいな。わしもいふ事たんと有る」と、袖から袖へ手を入れて、しつと引寄せ引きしめて、「遅う來ながら其いぶり、憎い男」と目に脆き、涙ぞ戀の習はしなり。「まうよい、泣きやんな疑晴れた。扱そ

なたに云ふ事有り、今夜七つの出汐に父を初め、弟の平次景高、一の谷へ出陣、某も好い時節、軍勢に紛れ下るに付き、そなたに預けた産衣の鎧、請取りに來たはいの」と、聞くにはつと當惑の、色目見て取る景季、「いや〜氣づかひ仕やるな、長う別れる事でもなし、ぜひ今度は行かねばならず、お事も豫て知る通り、もと某は頼朝卿の烏帽子子、夫を功に勘當の詫せぬかと、父の思はく世の人口、此度平家と戦はど、分捕高名譽を顯はし、今の難儀を昔語、悦んたも梅が枝」と、何心なく語るにぞ、思ひ設けし事ながら、俄にはつと胸痛み、「其鎧の事聞くと心の苦しみ」「シテ其鎧が何とした」「わたしが方には疾うから無い」「ヤア〜」と源太も聞くより狂氣の如く、身を揉みあせり、「様子が有らう、子細を語れ」と氣をいらてば、「ソレ其様に浮世の事に疎いのが大名の懐子、浪人の中苦勞させまいと、此の神崎へ身を賣り、突出しの其日より、お前を客の名宛にして、皆わたしが身揚、たとへ世に在る人でも、里の金には詰るも習ひ、まして勤の身なれば、金の生る木は有るまいし、生える土は持つまいし、お主の勘當赦りるまでと、いつもの揚屋に呑込ませ、積り〜し揚代三百兩の金の代りに、其鎧は遣つたはいな」「扱は其金が無ければ、鎧は源太が手に入らぬか、ハア」はつとばかりに當惑し、暫し詞も無かりしが、「元此鎧は頼朝卿に拜領、家にも身にも換へざるを、仕爲したり残念

や、今は悔みて返らず」と、胸押 寛け刀を取れば、梅が枝あわて押し止め、「こりやまあどう
 狼狽へてぢや、死ななくても大事な」。「イヤ、今夜の出陣を外れ、一生埋木と成り、のたれ
 死せんより、只今切腹、そこ放せ」。「サア、其鎧さへ手に入れば、お前の望は叶うでないか。
 ンテ其金はどうして調へると御不審も立たう、そこがお前と談合づく、奥の客に身を任せ騙ら
 しなければ、二百兩や三百兩の金は自由」。「扱はおれ故身を汚すか」。「夫の難儀にや換へられぬ」。「不
 便の者の心やな、たとへ死んでも忘れぬ」と、涙ぐめば、「ア、女房に何の禮、お前が爰にござ
 つては、客をたらずに心が措かれる」。「オ、尤々、後に來うぞや首尾よう仕や、が氣を揉んで持
 病の痞、借錢の代りに癩おこらしてたもんな」と、別れてこそは歸りけれ。跡見送りて梅が枝は、
 暫し涙にくれけるが、「必ず氣遣なさるよな、エ、わたしが心當の有るといつたは皆嘘、お前の
 命が助けたいばかりぢやはいな。何の好もない奥の客が、三百兩の金くれうぞ。今宵中に調へ
 ねば鎧も戻らず、源太様の望も叶はず、金ならたつた三百兩で、かはい男を殺すか、ア、金が
 欲しいなア」。「一八十六で文付けられて、二九の十八でつい其心、四五の二十なら一期に一度、
 わしや帶解かぬ」。「エ、なんぢやの、人の心もしらず、面白さうに唄ひくつさる。あの歌を聞く
 に付けても、源太様に馴染め館を立退き、君傾城に成りさがつても、一度客に帶とかず、一日

なりと夫婦に成らうと、思ひ思はれた女房をふり捨て、此度の軍に譽を取り、勘當が赦された
 と思召す、男の心はぶんな物ぢや。何かに付けて女程、思ひ切りのない物はない、男故なら
 勤するも厭はねど、またどの様な悲しいめを見ようも知れぬ、夫も金故、何をいうても三百兩
 の金が欲しい」。「唄わしや帶解かぬ、二十なら四五の、四五の二十なら一期に一度、わしや帶と
 かぬ。かへらぬ昔戀ひ忍ぶ」。「ほんに夫よ、あの客殺して身請の金盗まう、イヤ、若し
 仕損じ殺されては、とよ様の敵も討たれず、ア、どうせうな、最早日本國に梅が技が祈る神も
 佛も無いか、ハア、オ、夫よ、夫故には石と成つたる女も有り、我は賤しき流の身なれど、一
 念は誰に劣らん」。「巖となれる手水鉢、水結び上げ口すよぎ、伏拜みく、人に知らせじ聞かせ
 じと、柄杓追取り、傳へ聞く無間の鐘を撞けば、有得自在心の儘、是より小夜の中山へ、遙の
 道は隔れど、思ひ詰めたる我念力、此手水鉢を鐘となぞらへ、石にもせよ金にもせよ、心ざす
 所は無間の鐘、此世は蛭に責められ、未來永々無間墮獄の業を受くとも、だんないく、大事な
 い。海川に廢れる金、一つ處へ寄せ給へ、無間の鐘」と觀念す、面色忽ち紅梅の、花はちり
 ぢり心も髪も逆立ち上り、柄杓持つ手も身も震はれ、既に打たとふり上ぐる、二階の障子の
 内よりも、「其金爰に」と三百兩、ばらりくと投出す、深山おろしに山吹の、花吹きちらす如

くにて、爰に三兩かしこに五兩、「是は夢か現かや、何方か知らぬが此御恩、死んでも忘れぬ忘れぬ」と、嬉しいやら怖いやら、拾ひ集むる心もそどろ、袖引ちぎり三百兩、包むに餘る悦び涙、鎧代りの此金と、押戴きく、勇み勇んで走り行く。梶原源太景季、首尾か不首尾の二筋を、只一筋に揚屋町、奥はさわぎの最中、禿がな出でよかしたと、奥の吉左右聞くまでは、暫し待つ間も千年屋の、首尾を窺ふ姉お筆、今宵の中兄弟一所に敵討たんと思ひ込み、小袂りよしく鉢巻しめ、梅が枝に逢ふまでと、飛石傳ひ細路次の、間の切戸に身を潜め、今や出づると待居たる。走り躓き梅が枝は、産衣の鎧を持たせ、息を切つてかけ戻り、かしこにどつかと鎧櫃、下せばとつかは立歸る、景季見るより飛立つばかり、「ヤレ出かしたいかい働、源太が武運に盡きざるも、弓矢神の御加護」と押戴き、「出陣の刻限、七つには間も有るまじ、是より直に出陣、めでたう歸り對面せう、無事で勤めや、さらばや」と、立つを引き止め、「奥の客の情にて金を調べ、鎧を取ると暇をもそこく、せめて暫しが中なりと、わしにたんのうさせたがよい。殊に又お前の耳へ入れねばならぬ事が有る、マア下に居て聞いて下んせ。けふ久しぶりで姉様にお目にかより、話を聞けばと様は大津にて、切られてお果てなされたといな、其敵討相談に姉様も見える筈」と、聞いて源太もはつと驚き、「シテく其敵の名は何とく」「オ、其敵

の假名實名、妾が言うて聞かさう」と、めつきり切戸引つばづし、つツと入る姉お筆、「なうよい所へ姉様、幸あなたとお近付」「妹黙りや、近付にならないでも、名はよう聞いたそなたの夫、サアく梅が枝、源太殿に隙取つた」「エ、」「えよとはどうぢや、親隼人殿を討つたる敵の子には添はれまい」「そんなりやと様討つたのは」「ハテ知れた事梶原平三」「アノ景時様かえ。ハア」はつとばかりに詞も無し。「其又父景時殿を親の敵といふ、慥な證據言へ聞かう」「オ、有るともく、木曾殿の御臺若君御供申し、大津の宿にて梶原が討たせしは、兄弟の者が父鎌田隼人清次殿、イヤ驚くまい源太殿、知らぬ顔はしらくしい、後暗いさもしい。サアく妹縁切つた」と、いへど答もないじやくり、「扱は互の戀にからまれ、親を夫に見かへるのか」「イエさうではなければども、因果な縁を結び初め、今さら何と成る物」と、かつばと伏して泣きくる。景季もつツ立ち上り、「父を敵と狙ふ汝等、其方から望まいでも、此方から隙くれた、出くはしたを幸、此場で返り討にすべきを見遁すは今までの誼、女の業には討たれぬ敵と觀念し、尼法師にも様をかへ、親隼人が跡弔へ」と、詞尖に云放せば、お筆はくわつと急ぎ上げ、「身不肖なれども鎌田が娘、腰拔と思つてか、但女童の刀で景時は切れまいがの。サア切れぬか切れるか、鹽梅見せう源太殿、イヤ相手にならぬはおくれたか」と、詰寄りく打ち鳴らす鑄音、七つ

の鐘の胸さきに、響き渡れば南無三寶、早出陣の刻限と、鎧提け立上るを、「どこへく、我々が付け狙ふを、此方に知られた上からは、輒うは討たれまじ。景時の代に不足なれども、親子は一體敵の片破、一寸も動さぬ」と、詰寄れば梅が枝も、一人は姊一人は夫、あなたこなたを思ひやり、うろくくと立つたる所に、いづくよりともしら羽の矢、狙の壺はお筆が胸板、はつしと中ればかつばと伏す。「なう悲しや」と、あわて立寄る梅が枝が、腰の番を二の矢に射られ、はつとばかり驚きながら、兄弟互に顔見合せ、「姉様に過ないか」「そなたに怪我無かつたか」是はと驚き取上げ見れば、矢の根も無き二本の箆、何者の所爲ぞと、奥を見入つて立つたる所に、「其射人爰に」と、一間の障子さつと開き、滋藤の弓携へ、しづくくと立出づるは、梶原平三景時が妻の延壽、源太見るより、「ヤア母人、面目もなき御對面」と、疊にひれ伏し蹲る。母は我子に目もかけず、しとやかに座に著き、「珍らしい千鳥、以前は自が召使の姪、今は名も變つて梅が枝といふ流の身、そなたには此母が、段々禮を言はねばならず、そも鎌倉を立退いてより傾城に身を沈め、源太を育む志を聞くより、嫁に勤はさせられず、はるくくと難波に上り、そなたを身請せん爲、此揚屋へ來て様子を聞けば、折しも源太は勘當の詫の綱にもと、一の谷へ出陣、思ひも寄らず産衣の鎧を揚錢の代に取られ、既に我子も腹を切るべき難儀と成るを身に

引受け、世の雑談に云ひふらせし、無間の鐘を撞いてなりとも、源太が望を叶へたいと、我身を捨て、勞る心底、母は障子のあちらにて、残からず聞いて居たはいの。我子に心を盡す梅が枝、何と無間に沈められう、蛭の地獄へ落されう、最前金を三百兩遣つたるも此延壽、勘當の子に貢ぐ金、母が面は合されず、顔も名も包みしが、心は残らず打明す」と、語りもあへず泣き居たる。「扱は奥のお客といふも、奥様お前で有つたか」と、驚く妹を突退け、お筆は傍へつと寄り、「夫程恩有る梅が枝に、何で矢を射さしやつた。察する所こなた衆親子が云合せ、返り討にする所存で、射止めたと思はしやろが、箆ばかりで射られしは、兄弟が運の強さ、コレ天道様が明なによつて、非道の劍は身に立たぬ、何と非道で有るまいか」「イヤ非道にもせよ、道にもせよ、現在夫の景時殿を、付狙ふ二人をば、即座に射留しは自が手柄、夫への忠節、武士の妻に成つた役、箆を抜いて箆ばかり射かけしは、梅が枝への恩がへし、延壽が心底見られよ」と、胸押しくつろけ二本の箆、突立てんとする所を、源太かけ寄り、「何故の御自害」と、御手に縋り押し止む。「何故とはそちが可愛さ、景時殿が大切さ、なうお筆兄弟の衆、妾が夫子を思ふに付け、親を討たれ無念に有らう、口惜しからう、親のかはりに景季を討たうとは尤、さりながら、鎌田殿を討つたるは、意趣切闇打の業でもなく、木曾の落人山吹親子を連れて退いたは、鎌田

にもせよ、誰にもせよ、見付次第に討取つたるは、鎌倉殿への忠節、番場忠太が手にかけしは、景時殿へ又忠節、草葉の蔭の隼人殿、よも恨とも思はずまじ。爰をよう聞分け、延壽が自害で敵討を濟め、一刻も早う源太を出陣さして下され。今度の軍に手柄をして、宇治川の恥辱を雪がねば、最早一生景季は、勘當の身で朽果つる、夫が可愛い不便にござる、武士の夫に連添へば、義によつて命を捨つる、夫はまだも惜しからう、子故には此體、一分だめしにためされても、命はちつとも惜しうない、サア留めずとも死なしてくれ」と、氣を揉み身を揉み聲を上げ、「子は簡程にも思ふまい」と、かつばと伏して泣居たる。景季は一心不亂、母の慈悲心肝に沁み、我故御心を苦しむる、不孝の罪は子に報い、此身は武運に盡き果てん」と、悔むを聞いて梅が枝、「わたしが心も推量して下さりませ、敵を討たでは不孝と成り、討てば夫婦の縁切るよ、所詮此身を姉と夫へ引分け、死なうと思ひ定めし」と、歎けばお筆も涙ぐみ、「今のお詞を聞くにつけ、父の古主は鎌倉殿、夫に背く木曾殿の御臺若君、わらはが縁にて圍まひ、夫故に討たれ給ふは古主の罰、不忠させしも自故、殊に番場が所爲と有れば、親子御共に敵でない、道を立て誠を盡す延壽様に、過させてよい物か。此上の願ひには、今までの通り此妹、御不便頼む源太様」「オ、聞分けてさへ下さるれば、梅が枝は嫁、嬉しやく、是で夫も安穩、源太が望も叶ふとい

ふは、一筋ならず二筋の此箭、夫を狙ふ兄弟を、此矢で射とめ命を助け、夫婦中よう添遂けて、梶原の家を再び興す此矢なれば、疎かには成りがたし。先祖鎌倉の權五郎景政より、家の紋は三つ大の字に定まれども、今よりは二筋の此箭、梶原が家の定紋、譽を世上に顯はせ」と、義を立て通す詞の張弓、梶原が矢筈の紋、此時よりと知られけり。源太は悦び、「早お暇給はらん」と、つツ立ち上れば、「オ、夫々、片時も早う出陣の、用意々々」と、皆立寄つて鎧櫃、武運も開くる産衣の、鎧直垂小手脚當、上帯引きしめ梅が枝が、結ぶ妹背の忍びの緒、兜打物夫に、簾かき負ひ出立ちたる、骨柄のよしく見えにける。名残惜しげに梅が枝も、「延壽様のお詞で、夫婦のかためはたつた今、假へ此身は別るよとも、我名は夫の影身に添ひ、出陣の御供」と、筒に生けたる紅梅を、一枝花折り簾に挿せば、元來若武者に、相合ふ若木の梅が枝が、互に無事と目で知らせ、頷く度に散る梅の、匂ひは袖に残りける。「速武者ぶり類なや」と、母は悦び両手を上げ、「今度の軍に、花も源太も我先がけんくと勝色見せて、父の勘氣を赦されい。冥加盡きなば討死せよ、生きて歸るは不孝ぞ」と、涙ながら教訓の、慈愛の詞忝く「我も平家と戦はん、花簾こそ好き敵と、多勢が中に取込めなば、太刀真向にかざしの花の、ちりちりばつと追ひちらし、向ふ者を拜打、又廻りあはど車切、蜘蛛加久繩十文字、鶴翼飛行の秘

術を盡し、譽を取り、其時母のお笑ひ顔、見せうぞいさおれ早お暇」と、勇み勇んでたつか弓、矢筈の紋と景季が、文武は古今に芳ばしく、花有り實有る武士と、語り傳へて其名をば、箆の梅と末の代に、譽を永く留めけり。

第五

源平互に攻戦ふ、生田の大手を打破らんと、梶原平三景時、次男平次景高、無二無三に切つて入り、敵あまた切散らし、太刀の火めきを冷さんと、攻口少し引退き、一息ついで立つたる所に、後陣の方より番場の忠太、逸散にかけ來り、「搦手の大將義經、平家の本陣須磨の城を攻めんと有つて、鐵拐が嶺、鶴越、一の谷の逆落し、手ばしき謀、知らせ申す」と言はせも果てず、父景時、「ホ、よく知らせたり、軍に素敏き義經に、高名させては一分立たず。今一度敵陣へ切つて入り、此大手を打破り、義經に鼻開かせん、氣を弛ますな者共やつ」と、下知の半へ梶原が、物見のさいさく敵陣より駈戻り、「只今平家の城中を窺ふ所に、梶原遣らぬ遁さぬと戦の眞最中、御父子の外に梶原と名乗る者の候ふや、不審なり」と注進す。平次景高眉を顰め、「敵にもせよ味方にもせよ、梶原が名字を名乗るは、我々親子の外には無い筈、鬼神も恐るゝ梶原の

苗字を盗み、敵を威さん爲なるべし。何にもせよ憎い仕方、景高實否を糺さん」と、駈け行くを暫しと止め、「梶原と名乗るは外ならず、兄の源太と覺ゆるなり、宇治川の恥を雪がん爲、やさしくも先駈せしな。よし誰にもせよ、其頭に乗つて此城郭を打破らん、續けや續け」と逸散に、城中さしていく田の森、梶原源太景季、平家の多勢と打合ひ戦ひ、今を盛の梅の大木、小楯に取つて控ゆれば、平家の軍兵菊池の一黨、「遁さじ、やらじ」と追取巻く。「ヤア物々しや、我には合はぬ敵なれど、菊池と聞けば名に愛でて、花に縁有る草と木の、生田の梅も箆の梅も、散りかよつて面白や。八騎を相手に早咲の、梅も源太もさきがけに、勝色爰に未開紅、飛鳥の飛梅秘術を盡し、けふの軍の好文木」と、切つて廻れば、白梅變じて紅梅の、血汐流れて、敵も痿まぬやり梅に、甲も打落されて、大わらはの姿と成つて、引くな引かじと春風に、花を散して 三重戦ひける。景季は事ともせず、百術千慮の手を碎き、袈裟切堅割腰車、切り伏せく、鑿、恐れて寄付く敵もなし。汀の方より四五十騎、眞砂を蹴立て駈け來る。すはや敵よと太刀取直し、近付くをよくく見れば、父の平三景時なり。源太は見るより大地に伏し、恐れ入つたる風情なり。遺義強き景時も、久しぶりの我子の顔、見る目の中に涙を浮め、「やおれ景季、汝が所存も母延壽が物語にて聞きたるが、武士の身に取つては、忠孝の二つ、何れに疎は

なけれども、最重きは君命、そこを辨へざるは武士の若氣、勘當したるも汝が心を勵す爲の母の慈悲、合點がいたか景季、今こそ父が實の子」と、手を取つて引立て、物の具の塵打拂へば、「扱は源太が御勘當御赦免とや」「云ふにや及ぶ。汝が今日此城中に踏みとどまり、平家の多勢を切靡け、菊池が一黨討取つたるは、宇治川の先陣に勝つたる高名、此勢に乗つて、落行く平家を討ちとどめん、いざ來い源太。跡に續けや者共」と、親子主従勇みに勇み、汀をさして追うて行く。梶原が二度の駈とは、今此時と知られたる。搦手の大將軍九郎判官義經公、一の谷の大敵を、逆落しの一戦に攻破り、平家の一門或は討たれ、或は四國に落行けば、鎧の袖に勝色見せ、軍の勞を晴さんと、花に屯の名大將、下知に靡かぬ草もなし。かゝる所へ畠山次郎重忠、樋口の次郎を高手に禁め、御前間近く引居ゆれば、跡に續いて梅が枝兄弟、權四郎若君をかき抱き、「道々も申上ぐる通り、樋口殿をお助けある様にお取なし、秩父様のお情」と、鎧の袖に取付き縋るを目もやらず、御前に向ひ、「仰に隨ひ、樋口が罪科、法皇の歡聞に達し候へば、主の爲に讐を報せんと謀る忠臣の心、強ち罪科とも云ひがたし。さりながら、勇者の法に任せ、ともかうも義經が心の儘に計らふべしとの院宣故、重て召具し候」と、申上ぐれば、「さればこそ、恐れながら法皇の歡慮、我が思ふ所恰も符合を合せたる如し。今彼を罪科せば、此

後主君の爲に仇を報せんと思ふ忠臣の道絶え果て、弓矢の道を失ふ道理、樋口が命は助くべし。早繩とけ」と宣へば、「イヤなう義經殿、言はれぬ弓矢の道を云ひ立て、我を助け、豫て中好からぬと聞く梶原などが讒言に遭ひ、鎌倉殿と中違うて、後悔ばし給ふな、よつく分別せられよ」と、死を顧みぬ志、義經打笑はせ給ひ、「天下の政に小鮮をにるが如し、梶原づれが讒言を聞入れ、義經と中違ふ鎌倉殿ならば、夫こそ日本弓矢の破滅、助けよと言はぬばかりの法皇の院宣、殊更義仲内甲に残されし、謀叛ならぬ最期の一通明らかなれば、汝にかゝる科はなし、彌命助くるぞ。殊に汝が子ならぬ子の榎松、十五歳に成るまで、權四郎とやらん、随分勞り守育てよ、鎌倉表は此義經が勳功に換へても、宜しく事を計らふべし」と、初め番ひし秩父の詞、未前に察する名將の、恩義に繩も打とけて、お筆兄弟樋口が悦び、權四郎有りがた涙、若君抱きいそぐと、福島さして立歸る。梶原平三景時親子三人、番場忠太を引具し、後馳せにかけ付け、「扱こそ樋口が縛とかれしな、勇士は勇士の計らひにせよとの院宣、私に繩を解かれしは、鎌倉殿を踏付くる仕方、但しは我身を勇者と高ぶつての仕業か、大將顔を振舞ての所爲ならば、此景時も侍大將、なぜ談合は召されぬ。忠太寄つて樋口次郎に繩掛けよ」と、言はせも立てず義經公、大きに面色變らせ給ひ、「樋口を助け誤ならば、義經が腹切るまでのこ

と、一度ならず二度ならず、過言の振廻赦されず」と、太刀に御手をかけ給へば、景時も膝立直し、「御邊が首に景時が太刀は立たぬ物か、サア抜かれよ、相手にならん」と詰め寄せれば、秩父は君を押し圍ふ、父は源太が押隔て、「秩父殿、御前のお取なし」「言ふにや及ぶ、大事を前に置きながら、争は善悪共に皆非なり。景時を引立てられよ」「承はる」と無二無三、連れて御前を立ちにける。此體を見て平治景高、「エ、生温い兄の采配、親父の代りに相手に成る、サア義經殿」と詰寄る所を、樋口透かさず飛びかより、景高が袷かき掴み、引つ擔いでどうど投付くれば、是はと立寄る番場忠太、首筋掴んで動さず、「コレく兄弟、父隼人を討つたるは此奴と聞く、親の敵今討て」と、力に任せ打付くれば、兄弟嬉しさ飛立つばかり、「親の敵覺えたか、覺えたか」と、起しも立てすす々に、「切つたか、出かしたく、此奴はおれがさいなまん」と、洞骨踏へて首ふつつと捻切り、「鎌倉殿の寵臣梶原が悴を我手につけ、生害遂ぐる上からは、我を助け賜ひし義經の御身に後難も無く、誰々に難儀もかよらず、返すく血を分けぬ悴が事、義經公重忠の御憐愍願ひ奉る」と、云ふより早く太刀取直し、我と我首えいくと搔き落す、忠義の最後ぞ潔き。各勇士の心を感じ、諸卒を従へ御凱陣、平家の大敵悉く、八島の外へ切躰け、めでたき春に咲榮え、勝色見する簾の梅、源氏は益さかろの松、榮は千年の若緑、竹の齡

は萬々歳、神と君との道直に治る御代こそめでたけれ。

ひらがな盛衰記終

嫁君は源家の類葉蝶花形名歌島臺

序詞

婚禮は禮の本なり、二性の好を合せ、上を以て宗廟に事へ、下を以て後世を繼ぐ、敬慎重正の教へ宜なるかな。男女別有り夫婦有る、かためは雌雄の蝶花形、相生祝ふ島臺や、變らぬ例久方の、天津御位一百八代、御陽成院の知ろし召す、御代こそ殊に豊なる。時維れ天正十四年五月下旬、宣命の旨を傳へ、紫宸殿に伺公の公卿は、前の中納言經行朝臣、右大辨兼忠公、左右に笏取り坐し給へば、階下には當時武家の棟梁、眞柴大領の臣、加藤虎之助正清、つゞいて周防の國主大内島の冠者が臣、出海左衛門宗貞、其外百司百僚衛固の士、威儀を守つて並びる。經行卿仰せ出さるとは、「今天下漸くに治り、太平を樂しむ御代なるに、眞柴久吉大内義廣、互に威勢を諍うて、合戦を企つる由、叡聞に達し、宸襟更に穩ならず、これによつて眞柴が重寶、日月の旗、大内に傳はる勘合の印、互に取替へ兩家共、以來は疎意なき心を示し、和議を調へ、朝廷を永く守護致せよとある勅命なり」と述べらる。正清謹しんで、「コハ有難き御勅詔、民

の歎きを思し召され、無事を計らふ御仁徳、出海が所存は存せず、此正清においては主人久吉に申すまでもなく、和睦の儀委細畏り奉る」と、申上ぐれば出海左衛門、「仰を背き寶をば、渡さぬと申せば違勅の科、其方とても得心の上は、此方に別心あらんや、同じく承知仕る」と頭を下ぐれば、右大辨嘲笑ひ、「ハ、ハ、ハ、其方どもが妻は、小坂部兵部が姉妹の娘、互に縁者の中とて早却の勅答、云合せが見えすいて、此右大辨は呑込まぬ。和睦を計るは寶の取替、寶物は知らぬ事、誠の寶は眞柴家には無い善の事」「コハ兼忠卿の詞とも覺えず、先代より傳はる日月の御旗、眞柴の家に無いなどは、何を證據に、何を以て」「ヤア知るまいと思ふか、春永亡失せし跡、柴田が所持せし日月の御旗、比良が嶽の落城より、勝家が後家小谷、春忠が悴三法師、春姫共に行くへ知れず、必定其手へ渡りし旗、どうして有らう筈がない」と、傍若無人に云ひほぐせば、經行卿座を進み、「寶の詮議は無益の沙汰、受取は大内が役目、此方には構はぬ事」と、詞の理詰に右大辨、口を閉ぢたる其所へ、豊後の守護職大友三郎、家來に目馴れぬ兵器を引かせ、庭上遙に手をつけば、右大辨詞をかけ、「いかに三郎、持參の兵器は何物」と尋ねれば、「それこそ大内の家にて、専ら用ゆる大筒と申す物、去年以來堺を論じて毎度の合戦、それに居る出海なども某に切立てられ、狼狽へ廻つて逃げしなに、此大筒を取落

せしを、久吉公へ獻上の爲、はるく持參仕る」と、顔眞赤いに嘘の皮。右大辨は片頬に笑み、「ハテ扱聞きしに違ふ大内が臆病、いかに逃けるが好ぢやとて、此仰山な大筒を、打捨て置くとは餘りの沙汰」と、嘲哂すれば左衛門聞きかね、「大内の武勇に攻付けられ、久吉公へ助力を頼む大腰拔、それに何ぞや兵器を打捨て、逃げし扱とは奇怪千萬、その大筒は引金挫け、再び用に立たざる故、取更へるも面倒と、退陣の節捨置きしを、拾ひ取つての手柄顔、片はらいたし」と嘲笑へば、「ヤア負けをしみの減らず口、引金は損ねたか、但しは置いて逃げたのか、改め見ん」と立ちかよれば、實出海が詞の如く、引かね損ねし大筒に、放した嘘の常違ひ、しよけり入つてぞ控へる。經行卿笏取直し、「兩家の重寶取りかゆるは、則ち大内の領國宮島の千疊敷、下向の勅使は絹笠三位、其旨心得、左衛門も早く歸國、正清も急いで出立有るべし」と、仰にはつと立上り、かの大筒を家來に引かせ、「此大筒は大内の兵器、他家に置きなば奪はれしと、嘲る者や有りぬらん。此正清が下向の砌、是を土産」と穩に、納むる胸の智仁勇、出海大友兩人も、此場をたつか弓取の、心和らぐ大内山、風ものどけき三軍。

貳册目

輕業見せ物力持、芝居の太鼓打交せて、音はどんくどさくさと、押合ひへし合ふ宮島の、群集は實も人の市、暑さ彌増すばかりなり。参り下向が立留り、「何と今年の市はきつい賑ひでは無いかいの」「オ、其筈の事、此宮島を取つてござる大内様と久吉様と、既に軍に成る所を、禁中様の挨拶で、何もかも丸う納り、勅使様が見える故、随分賑かにせいと、殿様からのお觸ちやはいの」「オ、夫で讀めた。そしてマア雛助や新七も下つてゐるけな、次手に一切見ようかい」「イヤく、おりや芝居より評判の、水豹にせう」と巾著の、底を探つて足早に、思ひくりに走り行く。扱も此頃鳴響く、鐵砲組の男作、先は頭の種が島、つゞいて火蓋二つ玉、めつたに人を投頭巾、下駄も姿も一樣に、思ひ合うたる悪者作り、大道に突つばばかり、「コレ頭、大友殿に頼まれた勇次郎や大隅に、逢ひたい物でござんすの」「オ、それ、此二つ玉も道々眼張つて居れど、とんと現れぬぞや」「サアよいて、どうで爰へ出てくる二人、相人は高が町人、おれが爲る程の事も無い、うせたらわいら二人して」「オ、合點でござんす、頭は先へ」「そんならおれは千疊敷へ行く程に、後からこい」と三人が、心は一つ二道へ、引き別れてぞ歩み行く。闇の

夜の、梅にはあらで風薫る、位も松の洒落姿、名も大隅が住み馴れし、廓放れて氣も廣う、千疊敷への揚屋入、抜八文字の傘の内、さす手引く手に氣を付くる、遣手禿に打交る、客は大内へ出入の町人、岩國屋勇次郎、若殿育の浮かれ好、牽頭末社に誘はれ、來かゝる跡より二人の悪者、「コレ待つて下んせ、待つて貰は」と、のさばり出れば立止り、「オ、好かん侍と云はんしたは誰ぢやと思へば、火蓋様二つ玉様、何ぞ用かえ」「イヤ太夫主、こなんに用はない。用の有るは此勇次郎、外の事でもない、アノ大隅太夫がおいらが仲間へ貰ひたい」「オ、火蓋のいふ通り、さる人に頼まれた此せりふ、厭と言はんすりや腕盡。サア返事はどうぢや」と、きめ付けられて勇次郎、「あの様にいうてぢやが、何と云うてよからうやら、なう太夫」「アイ大事ござんせぬ、譬へ勇次郎様がアイと言はんしても、わたしが否でござんす。お前方が男盡で頼まれたせりふなら、わたしも勤の意氣地、命に換へても否でござんすぞえ」「エ、忌々しい引裂かれめ、さう吐かしや一層やけ、われには構はぬ、相人は勇次郎、男づくで貰ふのぢや」と、二人は身構へ立掛る、後に始終立聞侍、二人を取つて投付くれば、起き上つて頼燈め、「テモえらい目に大隅め、覺えて居れ」と逆歸る。太夫は思はず見合す顔、「ヤアお前は太夫様」「イヤサ何にも云ふまい。爰は途中、狼藉者の難儀を見かけ、救ひに出たは武士の情」「そんなら是まで

應へもせぬ、つれない私に恨も無う」「オ、サつれない仇を恩で返すは、色に迷はぬ身どもが潔白、邪魔の無い中、勇次郎とやらを連れ、千疊敷へ早く行けさ」「エ、嬉しうござんす。さう言ふお心とはつゆ知らず、日頃のお詫は又重ねて、あなたもちやつとお禮を」と、太夫が詞に勇次郎、「どなたかは存せねども、先程よりの御懇情、忝し」と手をつかゆれば、「何のくゞ禮には及ばぬ。一刻も早うくゞ」に、牽頭末社はいきり出し、「是からわつさり酒にして、此滅入を取戻さう。サアくゞお出」と先に立ち、滅多無性にそより立て、さどめき連れて行く跡へ、あたりを窺ひ以前の二人、差寄つて、「大友様、仰の通りに今の仕打」「オ、二人共大儀々々、斯う情を見せ置いて、大隅めを取入る魂膽、又其外に密事の評定、大藏も待ちをれば、千疊敷で申合さん」「然らば我等も御供」と、皆打つれて歩み行く。當國下向の御勅使、絹笠三位光高卿、衛固の青侍前後を圍ひ、並松原にさしかよれば、それと見るより木村和田藏、乗物間近く手をつかへ、「御勅使の御迎ひとして、加藤正清が家來木村和田藏、是まで參上仕る」と、申上ぐれば光高卿、御乗物を開かせ給ひ、「其方は正清が家來よな、出迎ひ大儀。此度勅命を以て眞柴大内が争戦を止め、則ち今日千疊敷にて、互の寶を取りかはす約諾、正清も下向の砌、日月の御旗持參致せしで有らうな」「ハア」「然らば正清へ光高が土産をくれん」と乗物の、硯引寄せ短冊に、書認むる

一首の和歌、和田藏謹しんで押戴き、「しるしなき、音をも啼くかな鶯の、今年のみ散る花ならなくに。コリヤ是れ古今集躬愼が歌、古歌を以てしるしなき心をしらす賜は、ムウ、スリヤ大内家の寶は此歌の言葉の如く、しるしなく紛失せしとの御内意でござるかな」「ホ、ウ適明察、勘合の印は大内が家臣陶全姜 反逆の砌より、紛失のよし慥に聞置く、其心を以て正清に、取計らうてよからんと傳へよ」「ハ、ア重々の御懇情、主人正清も豫々此儀合點行かずと存せし故、大内が館へ忍びを入置き候」と、申上ぐれば光高卿、「智勇を兼ねし正清が、抜目なき働、さこそ有るべし。委細は猶も面謁に」と、乗物立てさせ光高卿、千疊敷へ急がるれば、お暇願ひ和田藏は、旅館をさして立歸る。「オット爰らで此のきよが、私の形の前垂に、此爛鍋での繪口合、あかいの町の大銚子」一回「コリヤ又しこいえらしこい」「次は差詰此の春野、此土蓋をば爰に置き、此取肴で思付、とさん何ぢやと薑で」一回「コリヤ又しこいえらしこい。次は差詰太夫様、智慧貸そかく」「智慧借らぬく、わたしがそこらで代りましよ。此團扇をば爰に置き、又扇をば斯う捨てよ、福は團扇、扇は外はどうぢやいな」一回「コリヤ又えらいえらしこい。さて此次は權八さん」「ヤアおれが、胸悪い、くゞ」「エ、穢な、八百屋店ぢやないかえ」「イヤ斯うした所を繪面にて、ならすに似て、へどを吐くとはどうである」「コリヤ又悪いえら穢な。

扱此次は誰ぢやいな。智慧かそかく。「ア、コリヤ、其様な愚癡合はよしにして、酒に爲
いく」と、又呑みかける勇次郎、「イヤモウ旦那の其の丈夫には、如何な權八も大避易、常の
酒でも有る事か、泡盛とは、聲でござります」。「エ、埒のあかぬ奴、此酒はおいらが常ぢや。サ
ア注け」と、差出す盃、太ア、コレ申し、其様に酔うても大事なのかえ。けふは此千疊
敷を揚屋にして、殿様の御名代、出海様を饗す役目、それにまあ其様に。「ハテ太夫、大事な
はいなう。アノ左衛門様の堅藏に合うてらたら勞瘵病、兎角浮世は色と酒。唄これな源太様、此
頃、聞けば軍が有るさうな、件の鎧はどう成さる、だんない、大事ない、鎧も兜もいらば
こそ、さをくく、竿竹ぢや」騒ぐ折しも次の間より、「勅使のお入」と警蹕の、聲聞ゆれ
ば權八は、見えをして、「お勅使様にはいざ先是へ」勇「ヤイ、あれは本まのお勅使ぢやはや
い」「エ、おりや又芝居事ぢやと思つて居ました。そんなら私らは何所ぞへ散りませうかいな」
勇「オ、それ、太夫を連れて奥の間へ、早うく」に大隅も、皆も一間へ立つて行く。跡こなた
より出海左衛門宗貞、禮服改め出迎へば、程なく入來る絹笠三位、衣冠の姿氣高くも、儲け
の御座に著き給へば、跡に目馴れぬ地下育、譯はしら齒の振袖娘、怖づく出でて畏る。左衛
門女に目を著けて、「見れば賤しきなり形、高貴の前とも憚らず、お次に控へし其女は、いか

なる者」と尋ねれば、「ホ、不審は尤、此女は都者なるが、嚴嶋詣の道にて連の女にはぐれ
し由、いふも分らぬ癩病、見るに忍びず不便さに、歸洛の砌連歸り、親なる者に渡さんと、是
まで召連れ來りし」と、仰に出海頭を下け、「ハ、アコハ有難き御仁心、感するに餘り有り。
シテ大内家へ仰下さる勅詔の趣承りたし」と、演説すれば正笏有り、「抑眞柴大内は國家の柱石、
虎狼の心を挾まば、民の憂少からず、是によつて兩家共、互に寶を取りかはし、和議を調へ禁
庭を守護せよと有る帝の宣命、それに付き心得ぬは加藤正清、先達て紛失せし、日月の御旗
を」「ア、イヤ何と御意なさる、スリヤ彌御旗は」「サア夙くに紛失。春永滅後、行方知れざる
御旗をば、有ると云貫く眞柴主従、迂闊に寶は渡されまじ」「ハ、ア某も正清を、合點行かすと
存ぜし故、寶の實否を探らん爲、とくより旅館へ忍びを以て」「ホウ拔目なき汝が働、遣は大
内の執權、さこそく。寶取りかゆるは申の上刻、先づそれまでは奥殿にて、休息せん」と御
立有れば、出海左衛門勇次郎に打向ひ、「光高卿の御目かけられし此女、御出館まで間も有れ
ば、此浦の名所古跡、誘引有れ」と氣を付けて、勅使に引添ひしづくくと、奥殿さして入りに
ける。跡には附ほなまめきし、顔に見とれて勇次郎、思はず傍へ差寄つて、「癩には惜しい品
形、田舎に京も及びない、手入らずの初蕾、我等口切致したい。コレどうぢやく」と手を取

れど、身は口なしの色始、何のいらへも無いのが返事。「ム、そちら向くは否か、頭振るは應かいの。とんと分らぬ壬生狂言、獨修羅くら燃さうより、つい一筆」と傍なる、料紙取つて差出せば、恥し顔に散る紅葉、鹿の巻筆喰ひしめし、心の丈をかくとだに、繪に知れかしの判じ物、手に取上げて、「こりや何ぢや。羽根と手鞠に鬼の面を書いたのは、來年の事言や鬼が笑ふといふでも有るまい、エ、聞えたく。嬉しいけれど怖いといふ心ぢやの、ハテ初心な」と引寄せて、抱きしむればしめ返す、袖と袖との振合せ、これぞ他生の縁づたひ、出合頭に大隅が、それと見るより斷寄つて、「今に始めぬ悪性も、殿御は常といひもせう、物さへ言はれぬ癩の身で、あた徒な。お前を爰に置くからぢや、サアござんせ」と手を取つて、行くを遣らじと隔つる娘、「邪魔さんすな」とやら腹立、悋氣嫉妬にひつしよ無う、振放されて思はずも、「ナウこれ待つて」と縄り付く、聲に驚き、「オ、笑止、物は言はぬの癩ぢやのと、男を寐取る拵へ事」「イエ、さうした事ぢやない。是には深い譯有れど、白地には言はれぬ時宜、大事の殿御に惚れたかと、嚙憎からう大隅殿。諸譯とやら手管とやら、しらぬ田舎の藪椿、松の位に及びない、戀路としれど姫ごぜの、切ない心思ひやり、たつた一度の逢瀬をば、赦して給へ」とかきくどく、娘心ぞわりなけれ。折から出づる姫ども、「お勅使様の召しまする、お娘御様マアあれ

へ、早うお出」に是非なくも、連れて入る跡式臺より、「加藤正清參上」と、知らせの聲に大隅は、小蔭へ忍ぶ間もなく、英名千里を走るが如き、虎之助正清、風切る肩衣故實を正し、優々と打通り、「それに居るは義廣の手廻りの者なるか」「イヤ私めはお出入の町人、岩國屋勇次郎と申す者でござります」「ム、立入り致さば存じつらん、今日この千疊敷において、眞柴大内の寶を取りかへ、兩家和睦をなすべしとの勅命 據なく、主君久吉の名代として、爰に來る加藤正清、武名に聞きおち出向はざる、臆病至極の冠者義廣、但しは大内が國風なるや、失禮なり」と不興の體、「アイヤ憚りながら加藤様のお詞とも存じませぬ。何ほ武勇烈しいあなた様でも、不知案内の敵の國、謀を以て討つ時は、いかな勇者も欺すに手なし。又寶と寶が雙方へ納らぬ其中はまだ敵々、下々で申せば喧嘩の相人、中直りない先は、式作法には及ぶまいかと存じまする」「ム、某に向ひ、左程の事はんず者覺えない。ハテ町人には惜しい男、器量を見込み用事有り。ヤア、者ども、持參の兵器はや是へ」はつと答へて家來ども、えいや聲して昇き出づる、南蠻流の國崩し、目通りにさし置けば、「ナニ勇次郎とやら、大内が工夫の此大筒、數千の敵を打ちひしぐ火術の徳有るにもせよ、人力の及ばざる久吉公に敵せんとは、いつかな叶はぬ。有つて無用の軍器なれど、和睦のしるし我手土産、取次致してくれまいか」「加藤様の

御意と申し、お屋敷へ係つた御用」「しかと承知な。満足」と、件の大筒左右の手に、苦も無くぐつとさし上げて、磐石砕けと投付くるを、得たりと請けたる金剛力、さしもの正清横手を打ち、「重さ數斤の其大筒、色も變ぜず請留めし、稀代の勇力驚き入る」「イヤモ是がほんの怪我のはずみ、お目に留つて迷惑千萬。ドレ此様子御前へ」と、詞少に立つて行く。「ヤア大内島の冠者義廣先づ待たれよ」と呼びかくれば、「アイヤ私は生れの町人、思ひがけない名を云うて、へ、お弄りなされて下さりますな」「ホ、賤しき商人と姿を變ゆるも、危きに近寄らざる、君子の教を用ゆる名將」「イヤモいかやうに御意なされても、町人の岩國屋と申すに相違はござりませぬ」「ム、名を隠す事は易く、徳を隠す事は難し。ハテ町人よな」「ハイ、是を御縁にお出入を」「申付くる折も有らう」「御縁もござらば重ねて對面。おさらば」「さらば」と詞數、云はねど底意探合ふ、武士町人の汐境、隔てあうたる奥書院、心残して打通る。其間を待ちかねかけ出る大隅、「わしやお怪我が有らうかと、あぶく、思つて居たはいな」「イヤモ怪我の代りに氣悪い相人、ほつこりと退屈。是からわつさり廓酒、サアおぢや太夫」と打ちつれて、行く先向ふを閉切る大藏、「貰ひかよつた其の大隅、一言事ほざくとしめ上ぐる」と、搦みかよるを身をかはし、「太夫が代りに請取れ」と、以前の太筒取るより早く、どうと投げれば透さぬ

強力、「さ知つたり」と請留むれど、重さに釣られてたぢく、尻居にとつさり、見やりもせず、手を引き合せて二人連、廓をさして出でて行く。「ヤアにつくい二才め遁さじ」と、駈出す後へ、「ヤレ大藏早まるな」と、聲かけ出づる大友三郎、「彼奴こそ正しく大内義廣、容易には討取りがたく、自滅させんず我計略。是こそ大内が家に傳はる勘合の印」「スリヤ先達つ其の寶を」「シイ、高いく」と兩人が、密めく奥は樂器の調べ、笙の音色も牙を渡る、廊下傳ひに光高卿、「路次にて喋し合せし如く、其印だに差上げなば、望に任せ眞柴大内征伐の院宜なるぞ、有りがたく頂戴せよ」「ハア、有りがたしく。此上は久吉でも大内でも、宣旨を所持する某に、背かば朝敵、此上ながら禁廷宜しく光高卿」と、印を渡せば装束の、袖に納むる勅使の底意、善か悪かはしる書院、響く時計も酉の刻、「ヤア大藏、汝は早く溜手へ廻り、勅使の乗船用意せよ」「畏つた」と駈けり行く。折から騒ぐ奥座敷、追取刀に出海左衛門、苦り切つたる正清も、勅使の御座と見るよりも、思はず左右に平伏す。光高柔和の御氣色にて、「コハけしからざる二人が顔色、仔細いかに」と有りければ、謹しんで手をつかへ、「兩家の重器を取換へよと、勅命に従はざる久吉が我儘。サア正清、勅使も是に御入りなるぞ。今一言云ふて見よ」「オオ其方の寶も出さず、月日の旗を請取らんと、表裏を以て人を欺くへれ股武士と、言うたが何

と「ヤア表裏とは舌長し、旗を出さずば何時までも、いつかな寶は渡さぬ左衛門」「そりや此方も同然さ。勘合の印落手の上、望みの旗は渡しくれう。併し其印は先達て、陶が反逆露顯の砌、紛失したで有らうがな」「オ、小田春永没落より、行方知れざる月日の旗、久吉是を所持せしとは、偽で有らうがな」「イヤ此方に所持してゐる」「イヤサ勘合の印は大内の重器、紛失せし覺はない」「しかと有るかよ」「おんでもない事」「見るぞよ」「見せう」と雙方が、忍びの鯉口切刃の争ひ、「ヤア勅使の御前も憚らぬ水掛論、此上は兩方の、寶と寶を突出して、取換へめされ」と大友が、うはべに作るお爲顔、「よきに」とばかり光高の、仰にはつと二人の勇士「ヤアヤア者ども、囚人引け」と呼ばれば、承つて兩方より、忍びと見えし黒裝束、めい／＼主人が傍近く、引つすゑてこそ控ゐる。「サア宗貞、此曲者覺えあらん。月日の旗を奪はんと、我旅宿へ忍び込みし大内が家來、旗の代に請取るか」「オ、此曲者も義廣公の旅宿へ忍び、勘合の印を奪はんとせし眞柴が家來、助け返すを有らうがたいと、旗を渡すかさもなくば、西國武士の手並を見せう」「オ、是非渡さずば、數萬騎の軍勢を以て義廣が、首も寶も請取る正清」「ホ、面白し。取るか遣るかは軍の勝劣、相聲變じて敵同士。一家の因も兩家の和睦も、俱に破斷の敵と敵、軍神への血祭り」と、忍と忍を兩人が、抜く間も稻妻閃めく刀、首は彼處へ落ちてけ

り。斯くと聞くより家中の諸士、「正清歸すな、討取れ」と、矢襖つくつて取巻けば、「ヤレ待て方々、只一人の敵を恐れ、討取りしと沙汰有つては、大内の武勇鈍きに似たり、皆引かれよ」と大度の詞、智勇に其の名出海は、實に大國の執權なり。正清につこと打笑ひ、「數度の軍場に鍛うたる、加藤が五體は鐵石同然、なまくら刃金の矢先は立たぬ」「ホ、其廣言を左衛門が、留めるは戰場手練の鎗先」「勝負は互の天運次第」と、並みゐる諸士に目もやらず、出行く勇將見送る義者、別れてこそは立歸る。引違へて庭先へ、駈け來る家來が忙たどしく、「勅使下向の折も折、又もや絹笠三位なりと、只今是へ」と知らする中、早昇きすゆる乗物の、内より出づる其の勿體、堂上ながら丸裸、立ちはだかつて正筋し、「我こそ絹笠三位光高、路次の狼藉、何者がかよる仕業を、武士ども哀めよ」とばかりにて、ふるひ聲なる勅使の趣、耳にもかかず以前の勅使、「眞柴大内が再度の確執、歸洛の上にて奏聞せん」と、座を立ち給へば、「ヤア勅使と成つて入込む曲者、そこ動くな」と詰寄る宗貞、寄らば切らんと眼を配る、頭上にふしぎや數多の白鳩、群をなすこそ怪しけれ。左衛門きつと見、「扱こそく、宇佐八幡の示現によつて、當家に授かる白鳩裂、勘合の印の袋となす、世俗に是を大内裂と、隠れなだかき希代の重器、今目前に顯はす奇瑞、氏神守護有る大内の寶、盜取つて所持する曲者、腕を廻せ」と詰

めかくれば、破れかぶれと三郎が、寶を渡せと組付くを、脇壺ちやうど眞の當、早足に蹴上ぐる疊の下、ひらりと飛込む手練の曲者、四方を圍んで召捕れと、番手を定むる數多の捕人、花壇築山廣庭を、驅り立てくかり立つる。早日も西に入りうみや、船路擁護の嚴島、前は海水漫々として、實日の本に三つの景、眺に飽かぬ風情なり。神すどしめの神樂歌、きねが鼓や吹きすさぶ、笛の響もしんくと、音も澄み渡る夕暮時、浪間を潜り舌先より、現れ出づる勅使の曲者、寶を口に引つくはへ、蓬の白髪四方へ亂し、さも物凄き老女の姿、心を配りあたりを眺め、「年來望みし勘合の印、是さへ有れば軍勢催促は心の儘、其上加藤出海ともに、互に疑念を抱くやう、反間を用ひたれば、眞柴大内が軍は治定、其慮を討たば大望成就。エ、忝や嬉しや」と、悦ぶ後に窺ふ捕人、「曲者やらぬ」と突出す長柄、心得たりと身をかはし、前後を拂うて渡り合ひ、多勢を屈せぬ手練の老女、秘術を盡し挑みあふ、激しき太刀風に切立てられ、「こりや叶はぬ」と大勢は、一度にばつと逃けちつたり。猶も心を配る内、さまよひ出づる以前の娘、「コレ姫君、狼狽へる所でない。浦手へ廻れば合圖の笠船、サア早う」とせつかれても、心はそぞろ氣はうろく、「サア教への所へ行かうと思つても、跡へ心が引かされて、エエつととまう、どうぞも一度さつきのお方に」「エ、何をくどく。生捕られては家の恥、早う

早う」に是非なくも、躓けつ轉びつ落ちて行く。續いて歩む後より、「曲者捕つた」と取付く捕人、海へばつさり切込んで、跡しら浪と失せにけり。始終の様子廻廊の、蔭に聞き居る怪しの宮奴、老女が跡を打ながめ、「今のは慥に、ムウ」と、胸に納むる折こそ有れ、何處よりかはばらばらと、諸侯のめんく立出でて、「久吉公の御迎ひ」と、供奉嚴重に、備はる智仁いうくと、寛仁大度の御粧ひ、前後左右は綺羅星の、輝く威勢高富氏、旅館をさして三重歸らるよ。

三冊目

唄せうならく、喧嘩をせうなら弱い奴がよいはさ。ぞめく小唄も嘘八百、鐵砲組の悪者ども、火蓋の三に二つ玉、大道一ぱい肩肘を、張込はすいがみ頬、直に渡らね錦帶橋、賣賣店に腰打ちかけ、「すつほん屋、夕べのは水臭うて喰はれなんだ」「オ、火蓋がいふ通り、水臭ういけなんだ。今度は随分すり込み、二膳持つて來られい」「ハイ水くさうて悪くば、いつそこ煎にせう」と釜の下、炭が無いやら煮えかぬる。火吹竹やら杓子やら、取違へたるあわて者、二人は御機嫌、「味さうな、早う」と近飢ゑ、出来るや否や取食ひ、「是で算用しられい」と、投出したるはした錢、亭主は取上げ不承々々、「此間のも一所にして壹貫八百、是では七百八

「十足りませぬ」「オ、足らずば、何ほ有らうと皆借り」と、あつい火蓋が頬の皮、見附けたそぶりこなたの煮賣屋、寄らず障らすあゆみ寄り、すれ違つたる身隠梅、煮賣屋聲かけ、「これこれ」「おれが事か」「こなさんの事でござんす」「何でありや」「大儀ながら、あの錦帯橋の橋詰へ出て下はれい」「サア橋詰へ来たが何でありや」「イヤ外の事でもない。跡の月の晦日の晩に、遣らうと云はんした蛸の代、サア今貫はうかい」「エ、何を吐かずぞい、借つた物をついに拂うた事はない。おこせとぬかしや此通り」と、頭びつしやり只喰はれ、算用合はぬそろばん橋、出入はこぢけた煮賣屋ども、「こりやたまらぬ」と逃けて行く。「コリヤ二つ玉、皆遁けをつた間に、何にも角も喰うてこまさうかい」「オ、知れた事、こりや天からのお當てがひ、うまいうまい」と二人ども、そこら探して鍋の蓋、取なりしやんと振袖の、袂に餘る色盛り、裾もほらほら歩み来る、お圓を見るより跡先から、「コレ姉さん、何處へ行かんす、送るかえ」「オ、此二つ玉も連になろかえ」と、釣りかけて見る戀の羅。「オ、滅相な、私はつい其處な氏神様へ」「オット其氏神込んでゐる、大かた色事の願である。神様を頼まいでも、得心してゐるおれはどうぢやえ」「コレアノ火蓋が厭ならおれになと、私心が届いたら、すぐにお前を連れたいぬ。返事はどう」と両方から、無理に引つぱる其所へ、來かゝる清介走り寄り、二人を取

つて突き退くれば、「ヤア清介かよい所へ」と、悦ぶおゑんは地獄にて、佛に逢ひし心なり。「コリヤ二才め、何で邪魔擴ぐ」「イヤ邪魔は致しませぬが、この娘御をどう成されます」「ハテどうというたら惚れたに因つて、ナア二つ玉」「オ、二人して本得心にたんのうさすのぢや」「ハテ夫は滅相といふもの、惚れたと思うたら、あつちからも惚れる様にするが色事でござります」「ム、成程さうでは有らうがナウ火蓋、おいらはついど女の方から」「サアそこが秘密魂膽、何でも惚れささうと思へば、女の好へ持つて行くが色事の穴、此娘御はきつい身振や踊が」「火」「オット皆まで言ふな込んでゐるは。コリヤ二つ玉、娘の好くは雷子や巴江の、明板子出島はさて色所、容は立派に氣はさつば、腰ざし紋羽に中よしの、洒落た顔してよしなさい、夕べも來よとて騙はたの」踊に性根有頂天、二人も此場をだまはたの、透を窺ひ逃けて行く。踊りしまうて其處らを見て、「コリヤとうくおれを騙はたの、憎いやつ」と、咥く折から懷手、のつさのつさと出で来る、種が島大藏、大道に立ちほだかり、「最前より此所へ、大友殿は見えなんだか」と、尋ぬる向ふへ大友三郎、家來引連れ歩みくる。夫と見るより大藏は、土に手をつき敬へば、三郎はあたりを見廻し、「先達て申し付けた、其方が家に傳はる火薬の祕書、いよく明日」「ハテ御念に及ばぬ。勘當しられても子に違ひのない私、片意地いうても親は女の事、つい

取つて参りますが、褒美には違ひなう大名に「オ、サ望みさへ叶へば、二ヶ國が三ヶ國でもく
れるはさ」オットウまいは。何と火蓋も二ツ玉もあれ聞いたか「火イヤまういつそえらぢや。
時にこなんが大名に成らんすと、男作の拵へがむつかしい。マア下駄は蒔繪に頭巾は縫と行か
ずば成るまい」三オ、それ火蓋のいふ通り、禪は虎の皮がよからうかい。ノウ頭「イヤ申し
三郎様、萬事は明日此方より」然らば手筈の違はぬ様、上の關の野はづれに、家來を待たせ
返事を相待つ、必ず首尾よく。大藏さらば「種おさらば」と、欲惡二つ兩方へ、引別れてぞ急
ぎ行く。歸る道筋氣もせきやう、おゑんが跡に清助が、息急き歩む向ふの方、のさばり出づる
二人の惡者、見るよりおゑん清助も、俱に驚くばかりなり。「ヤイニ才め、ようやりあがつた
な。大方この道と思うた故、頭にちやら食はして跡へ戻つたは、さつきの禮を」と兩方より、
一度に掛るを身をかはし、左右へどつさり投げられても、直に取付く我武者者、おゑんが氣轉
煮賣屋の、茶釜を取つて火蓋が頭、手桶をざんぶり二つ玉、うろ付く二人その隙に、おゑんが
手を取り清助は、跡をも見ずして三重遁け歸る。

四冊目

其比は絶えて無かりし鐵砲鍛冶、井上何某が後家娘、夫の譲り受繼いで、世渡る業も上の關、
店は諸方の注文に、砥いだり磨く鐵砲に、手も放されぬ忙しさ。汗をたらく下職角兵衛、「ア
アしんどやく、煙草もせずと大方にやり付けたぞ」オ、おいらも腰がめりく、いふ、イヤモ
なんほめりついても、お圓様の顔さへ見ると、とんとしんどい事はない。夫にあの子の名をお
ゑんとはきつい間違ひ、いつでも顔見るとおへるのにナア「ア、又惡口ばかり、噂さんが
聞いてぢやぞえ」と、顔は赤らむ紅葉ばの、うつらふ色ぞ見まほしき。暖簾押上げ母おきは、
「イヤコレ皆の衆、けふの仕業は急ぎ物、まう出来あがりましたかの」ハイく、磨きは出来ま
してござります」それなら仕立はいつもの通り、裏の細工場「ハイく、そんなら左様」と銘
銘に、鐵砲抱かへ立つて行く。おゑんは母が傍に寄り、「此間から軍が起ると、此の周防の國は
大騒動、夫につけても便少ない女の身の上、かてと加へた事ながら、斯ういふ折を幸に、勘當
なされた兄様を」ア、又兄が事かいなう。親の譲りの職を嫌ひ、鐵砲組の、イヤ種が島のと、
異名を付けての男達、あれが人間の所作かいなう。思ひ出すも面目ない、此後は兄が事、ぶつ
つり言うてもたもるなや。ほんに夫はさうと、此の清助は御城下までいきやつたが、連は戻り
と母娘、見やる表へ立歸る、此家の下人清助とて、色もくつきり白島に、女の惚れる當世男、

清助は畏り、「ハイ今日の注文は此通りでござります」と、さし出す書付手にとる母、娘は夫と嬉しさも、飛立つ心を目で知らず、母の手前ぞしんきなる。「秋月の屋敷が貳百挺、菊地が三百挺、こりや鐵砲ばかりぢやの」「ハイ其外に種が島甘挺、是も同じ屋敷の御注文。イヤ申し夫はさうと、上方勢が國境まで攻入つたと、九州の地はきつい騒動でござります」「イヤもう何ほ騒動しても、氣遣ひのない此の離島、あつちは軍、こつちは金設けの盛、あまりの遠しさにほとりと草臥れた、どりや此透に一寝入。そなたも休みや」と母親が、立つは娘の勝手口、暖簾の内へ入りにけり。おゑんは跡を打詠め、「テモママきつい粹な鼻さん、二人を残して置かしやんしたは、譯有る中を知つての事か、いつそ様子を打明けて」「ア、コレ申し、それ言うたらわたしはおめあし」「何のママ母様に限つて、そんな心は無いはいの。私には聲を取ると云はんした事も有り、其様に言やるのは、わがみは厭かや」「ハテめつさうな、何で私が」「いやでは無いかえ、オ、嬉し。そんなら斯う」と手を取つて、戀におほこは媚めきて、抱き合うたる其折から、勘當の息子種が島大藏、大小いかつに差しこはらし、仲間の悪者供に連れ、案内も無くすつと入る。内には悔り飛びのく二人。「ア、コリヤく、逃ける事はない、兄は粹ぢやく。そして母ぢや内にか」「アイ鼻様は奥にぢやが、兄さんおまへの其の形はえ」「是か、えいゆ

すりで有らうがな、けふよりはお侍のちやく、夫に付いて母ぢやに急用、逢ひに來たのぢや。母ぢや人く」と、家内に響く乙調聲、もれ聞えてや母は立出で、「ついに見た事もないお侍、何の御用」と外さぬ顔。「エ、また片意地かい。けふ來たは無心ではない、コレそつちの爲には大豊年、其譯はまあ斯うぢや、きのふ大友様へ抱へられ、れつきとしたお侍、仲間の火蓋や二つ玉もあの通りで。家來共」「ナイくく」と畏る。「何とえらいか、斯う出世するに付いては、母ぢやや妹を、喰ふや喰はずの職人では置かれまいと、終にない慈悲の心が起つて來た故、こつちから了簡付けて、勘當赦されに來てやつたのぢや。ナアさうでないか」「さうともく。破れ世帯を取置いて、後室様よ奥様と、言はれて出世をなさるといふもの。ナア火ぶたよ」「オ、テヤ。勘當請けた母親の面倒を見てやるとは、近年の大孝行、綿屋其處退けでござります」「母ぢや人聞いてか、あの通りぢや。有りがたいか、本得心か、エ、嬉しさうな顔付ぢや」と、口から出次第取りじめも、成らず者とは知られけり。母はあわてよ高笑ひ、「ホ、ア、おとましや、此のお侍は氣違ひさうな、笑止な事」と顔背け、相人にならねば娘のおゑん、「夫は餘りお氣強い、侍に成つたと有るからは、是までの心でも有るまい、どうぞ是から」「アアコレそりや何を云やる。親の譲りの職を嫌ひ、外を家とする不孝者、勘當したれば他人と他

人、すべて武士は武士の道、町人は町人と、其業に疎い者は人間の廢り物、天も覆はず、地も是を載せずとやらん、今でも職人に成る心なら、勘當赦すまい物でもない。道に背いた侍、顔見るも淺まし穢らはし」と、誠を攻めし母親の、異見を聞くに清助が、我身に徹へ骨に沁み、不孝を悔む忍び泣。大藏は大あくび、「エ、そんなしゆんだ事聞きには來ぬはい。勘當赦さねばそつちの損、コレけふ爰へ來たは、火藥の祕書が欲しいばかり、サア出して貰はう、出して下あれい」「イヤそんな物は持つては居ぬぞ」「エ、隠さんすな、親父から傳はつた地雷の法、知りぬいてる此大藏、主人大友の懇望、首尾よういたら大名に成る代物、出世の種ぢや、出したく。出さねばいつそ手短に、家捜しする」と、二人に目くばせ身構へし、奥を目がけて駈入る氣相、驚く二人騒がぬおきは、「コレ職人衆、さつきに云付けて置いた通り、早うく」といふ聲に、裏よりてん手に下職共、鐵砲引提け走り出で、筒先揃へて取巻いたり。女と思ひ侮つて、奥へと有ればお好みの鐵砲組、念を入れての二つ玉「火ア、コレめつさうな。いかに商賣柄ぢやとて、斯う澤山に鐵砲を、もて扱うてよい物か。ナア火蓋よ、二つ玉よ」「ム、誰ぞ逝くまいといふにござれ、おいらもとうから逝きたうて、尻がもぢく、氣ももぢく」「ホ、、、重ねてから足切込むと何時でも此通り。コレ皆の衆、後へ戻れば面倒な、どうで往ぬ道野はづ

れまで、送つてやつて下されい」職「ハイ、左様ならわたしらは、直にお暇申します」「オオ大儀でござつた。あしたの仕事も急ぎ物、随分早うに」「ハイ、畏りました。サア息子殿歩ましやれ」大「エ、けつたいな行はれ」「サア、くく」と付け廻され、我身にあたる鐵砲組、むしやくしや腹の立場さへ、つぶやきてこそ出でて行く。跡はひとつそと大水の、出でし譬や濁り江の、水によるべのつぎほさへ、挨拶すまぬ二人が心、見て取る母は思案を極め、「コレ二人共こよへおぢや。清助、そなたはあのおゑんと不義イヤサ云交して居やらうかの」「エ、」「ハテ呵るではない、譯有る中を幸に、聲に成つて貰ひたい」婿「エ、スリヤ不義のお呵りもなう」圓「ハテ女夫にして下さんすかえ」「オ、互に好きあふ若いどし、得心有れば夫婦の盃、押付業も清助を、由ある武士の胤と見た故、縁を結んだ其上で頼みたい事、コレ頼まれて下され」と、様子有りけな詞のはし、退引ならず言ひかけられ、「コレハ、御推量の上は包むに及ばず、成程わたくし武士の果、様子によつて頼まれませうが、シテ其子細は」「嬉しうござる忝い、兄は元より妹にも、是まで包みし氏系圖、夫は井上新左衛門とて、大内島の冠者の家臣、南蠻の傳を以て、始めて鐵砲を作り主人へ献上、隣國の大友より鐵砲を頻りの懇望、與へざるを憤り、不意に押寄せ夫の最期、其後爰にかくれ住み、子供を養

育時節を待ち、夫の仇を報はんと思へども、兄は不所存者、一人はかよわき女の事、頼みといふは敵の血筋大友三郎、上方勢の先驅して、古主大内と戦ふ最中、こなたを古主へ味方させ、大友を討ち夫の恨、晴させて貰ひたさ、聲に望むもこの入譯、得心して下さるか」「アイヤ其儀は」「不得心か」「サア夫は」「サアくくく」の詞詰、返答何とせいすけが、望有る身の當惑に、暫し詞も無き折から、表に數多の供廻、前後を圍ふ銀乗物、門口に昇居ゆれば、近習の侍手をつかへ、「井上氏の貴宅は是かな、案内申す」と音なふ聲、とめ木の音もしとやかに、云はねど夫と高家の奥方、乗物出づる 襦姿、思はず見やる清助が、「ヤア姉上か」と、云はんとせしが、身を顧みて控ゆる體、見向きもやらすしづくと、母が手を取り上座に直し、押下れば此方はもぢく。「イヤ申し見ぐるしき埴生へ、何御用かはしらねども、慇懃なおあしらひ、サ、ひらに是へ」と立上る。「ア、イヤ左様におつしやる者でなし、私事は加藤虎之助正清が奥、葉末と申す者、又あれにゐる清助事は、自が眞實の弟、其儀に付き密々にお頼み申す子細有つて、はるくは是まで参りし」と聞いて悔り、「エ、そんならあなたは久吉方、正清様の奥様か」と、親子が驚き戀聲の、素姓も嘘と鞫るよばかり、娘は遺あどなくも、「テモ結構な姉御様、ようこそお出」と茶を汲むやら、槌ではかの追従に、二人が戀は見えにけ

り。「是はマアく、思ひがけない清助が身の上、其又姉御がお頼とはな」「アイヤ餘の儀でもなく弟が身の上、親の不興にしぼしの國遠、其の後行方を尋ねしに、此家に奉公いたす由、聞く早速参りしは、弟を連れ歸り、親の勘當赦させたく、何卒只今お暇を」と、云ひならべたる詞の先折、「申し葉末様とやら、其事ならば成りませぬ。と申す譯はアノ清助、下人では無い娘が聲がね、夫に隙は遣られませぬ」「ムウさうおつしやれば角が立つ、たとへ弟が契約せうが、此姉が不得心、約束變改女房を、去つて戻るも男のかうけ」「エ、」「ア、コレ娘御、心強いと思やらうが、連歸らねば埋木と、朽果つる弟が不便さ」「イヤそりやあなたの勝手ばつかり、たとへ娘が縁は切れても、清助は年の中、證文の有る其中は、極めの奉公勤めさす。大名の御威光でも、國の掟は背かれまい。何とく」と理の當然、返す詞もなよ竹の、葉末は夫と心得て、家來を招き、用意は何か白臺を、おきはが前にとり直させ、「些少なから此の金子は、清助が奉公の、年を償ふ三百兩」「イヤ尙以て成りませぬ、職人と侮つて、金銀をもつての押付業、お大名には似合はぬさもしい仕方、相手になる隙がない、とつとよ持つてお歸り」と、突出す白臺山吹色、落花狼藉あらけなく、納戸の内へ入る跡は、どう納るかしら臺を、取直さずる姉が氣に、いづれと分けて身にかよる、血筋の難儀とやかくと、思ひつどけて立上り、見

廻すこなたの種が鳥、取上げて打眺め、「稀なる武器の最上なれども、内に魂なき時は、火薬のしるしも能なき鐵砲、ム、元の武士に立歸るか、此家で朽果てるか、的はそなたの心の火蓋、切つて歸るか歸らぬか、工夫をしや」と弟へ、姉が心の口薬、残して奥へ入る跡は、恩と義理との二つ玉、はたと我身に行當る、思案の體におゑんは摺寄り、「ナウおまへは姉御様の詞に付き、往ぬる心でござんすかえ。コレイナア俯いてばかり居て、物いはしやんせぬは女夫に成るはいやかいな。アほんに思へば恥しい、此家へ見えた其日より、目元の張のきつとして、立居物ごし爪はづれ、由ある人と思ひそめ、二世も三世も變らじと、契りし事も皆いたづら、あの奥様が姉御なら、あなたは知れた御大名、惚れたといふも勿體ない。譬へていは高根の花、賤しい此身と諦めても、思ひ切られぬ戀路の因果、おまへに別れ片時も、生きてはるぬ」と取付いて、恨も道の一筋な、娘心ぞいぢらしき。清助は默然と、暫し詞も無かりしが、「オ、是まで段々そなたの深切、禮は詞に盡されず、さりながら此の入譯、とつくりと聞いてたも。姉にもせよ、女の推舉に勘當を赦されては、某が武士道立たず、又留れば親への不孝、闇に迷ふ此身の上、然るに幸久吉公、當國出馬の先陣に加はり、高名手柄をあらはして、元の武士に返りし上、表向に助太刀して、大友を討取れば、母の頼みも立つ道理、夫を功

に勘當の、詫せんものと思へども、今落ちぶれし素肌武者、武器も無ければ叶はぬ望、武運に盡きし身の覺悟、武士にもあらず町人の、死恥とも成らぬやう、今姉上が賜はりし、此種が鳥が我身のとどめ。オ、とはいふ物の由緒有る、武士の悴がやみくと、夫死するが口惜しい、おゑんさらば」と立上る、裾にすがつて、「コレくくく、武具調へる金が有る」「何と」「サア姉御様が母様へ、申上げたら調へども、夫ではおまへの心が立つまい、外にわたしが心當、コレ早まつて下さんすな」と、當なき詞も身に換へて、夫思ひの眞實は、不便にも又いぢらしよ。「ム、ウ武具調へる金は百兩、誠とは思はねども、暫しの猶豫はそなたへ禮、暮六つまでに合點か」「アイ、命にかへても拵へます。とはいへ日脚も七つ過、一時たらぬ其内に、もしも出來ずば暮六つの、鐘を合圖に鐵砲腹、コレ短氣を出して下さんすなえ」「此筒音が互の別れ」さらばとばかり見かはす目に、雨か涕の種が鳥、火繩も濕るやれ障子、開けて一間へ入りにける。跡におゑんはうつとりと、胸は幾瀬の物思ひ、「暮六つまでに請合うたが、百兩と云ふ金が、どうして出來るあだてもなし、一寸遁れもお前の命が延したさ、嘘もやつぱりいとさ故、命で金を買へるなら、縦へ此身をすたくくに、刻まれても金が欲しい。夫の命が助けたい。アレくアレ、段々日脚も傾く空、こりやまあどうせうく」と、立つたり居たり狂氣の如く、泣入り

絶入りたるりける。「オ、其金おれが借してやる」と、ぬつと出て来る納戸口、「ヤアおまへは兄さん」「コリヤ聲が高い。裏口より忍び込み、様子を聞けば手詰の難儀、金借してやる其の代り、火薬の祕書を盗んでこい」「エ、」「エ、とはいらぬか」「サア夫は」「いやか」「サア」「サア、サアく、どうぢや」と難題も、いやと云はれぬ暮六つ前、「ムウなるほど盗んで上げませうが、其詞に違ひは無いかえ」「ハテ知れた事、人の見ぬ内早うく」「アイくく、慥に有所は鎮守の内、勿體ない事ながら、夫の命にやかへられぬ。オ、さうぢやく」と帶引きしめ、夫思ひの一心に、神も赦して給はれと、かよわき足を踏みしめく歩み寄り、念なう錠前捻ぢちぎり、扇明くればこは如何に、祕書にはあらで火薬の丸がせ、兄は見るより、「ムウコリヤ炮烙火の仕掛玉、是が有つても祕書がなければごくには立たぬ。どうでも祕書は母ぢやくめが懐、いつそ奥へ」と駈行くを、止むるおゑん、「エ、邪魔ひろがすとそこ放せ」と、争ふ折しも撞出す暮六つ、「ヤアくく、あの鐘は暮六つ、夫の生死」と、見やる一間に煙立ち、どうと響きし鐵砲に、おゑんは思はず倒れ伏し、わつとばかりに伏沈み、正體なみだばかりなり。思ひ定めて起上り、「アノ鐵砲は夫の最期、私も俱に」といふより早く、兄が指添取る間なく、咽にがはと突き立つれば、兄は驚き、「コリヤおゑんよ、早まつた事してくれたな」と、悔めばおゑんは

顔ふり上げ、「イ、エイナ、わたしが自害は覺悟の前、可愛い夫を先立てよ、何の生きて居られうぞ。わたしが死ぬれば子と言うては、お前一人の事なれば、その惡道な心を入れかへ、是からどうぞ噂さんへ、孝行頼み上げます」と、言ふも苦しき息づかひ、兄は涙の聲を上げ、「オオコリヤ妹よ、おれはとうから善人に成つて居るはいやい。最前祕書を奪はんと、忍びて聞けば大友は、父の敵としらすして、一旦主人と頼めども、恩を請けねば義理もなし。今日よりは亡父が名を継ぎ、井上新左衛門と改め、舊主に仕ゆる我が本心、母に語つて望の祕書、申請けんと思へども、一應では渡されまじと、心に思はぬ偽りも、主人へ盡す忠義ぞ」と、悪にも強き種が島、大善心の勇士なり。「オ、出かした、其の心を聞いたる母が悦び」と、いふに驚き立ちかより、納戸の障子押開けば、手下の火蓋を突留めて、其身も手負の母おきは、「コレコレ大藏、最前の悪者共、裏口より忍び込み、此の如く手をおはせ、祕書を奪取立退きし」と、聞くよりも氣は動轉、「それ取られては一大事、いでほつ付いて取返さん」と、急にせいて駈出せば、此方の一間に聲高く、「ヤアく、大内二代の忠臣、種が島を改名せし井上新左衛門元晴に、小坂部和三郎見参せん」と呼はりて、立出づる清助が、姿貌も引きかへて、甲冑に身を固め、鐵砲引提げ欣然と、葉末諸共居らば、新左衛門不審顔、「切腹と思ひの外汝が其

形、スリヤ最前の鐵砲は「ホ、夫こそは汝が母に手を負はせ、祕書を奪取り逃行く曲者、討留めたりし鐵砲を、我最新ぞと思ひつめ、不便のおるんが有様」と、見やれば葉末も涙にくれ、「いとこの人の身の果や」と悔れば手負は息をつぎ、「御最新と思ひ詰め、早まつたわたしが自害、あなたが此世にござるなら、冥途の道を歩み兼、迷ふはいな」と聲をあけ、歎けば母は這寄つて、「オ、道理ぢやく、是が迷はでなろかいなう。死んだと思ふ其人は、此世に残つてゐるもの、何と冥途へ行かれうぞ。エ、思へば此母が浅手が結句恨めしい」「イ、エせめては母様の、お命恙ないのが嬉しい」「何のなう、死ぬる程なる深手なら、迷はぬやうに諸共に、三途の川を手を引いて、渡らうものを可愛や」と、老の悔みの數々に、親子が涙紅の、血汐あやなすばかりなり。哀れをよそに新左衛門、涙拂うて突つ立ち上り、「ヤア久吉方の小坂部信郷、眼前敵を置きながら、此儘にては歸られまい。いざ來い勝負」と犇めけば、小「ホ、いふにや及ぶ、縁は内證敵と敵、某が手練の程受けて見よ」と、いふより早くはつしと打てば、しつかと受留め手練の井上、小坂部重ねて、「夫こそは火藥の祕書、某が手に入れど、汝へ返すは母への義理、領掌有れ」と、聞くより早く祕書の一巻押開き、讀んでは領く心の會得、「ホ、、、豫て望みし地雷の法、炮烙火の仕掛まで、委細に記せし此一巻、我手に入れば一時の大功」悦

び勇むその所へ、あまたの軍卒かけ來り、「ヤア大藏の卑怯者、相圖を違へ主人を背き、大内へ味方の返り忠、遁さぬ遣らぬ」とおつとり巻く。新左衛門うち笑ひ、「ハ、、、返り忠とは案外なり、古主に仕へる新左衛門、手柄始め軍の手始め、命寝腐る大友勢、火藥の試み幸」と、以前の丸がせ取出し、かそこへ投ぐれば忽ちに、大地は一面炮烙火、あつと叫んで軍兵ども、皆一同に倒れ伏す。「ハ、ア氣味よし、心地よし、始て知つたる火藥の妙、地雷を以て久吉に、泡吹かせんは手裏に在り。汝が首も其時に、取つて得さす」と軍の廣言、「オ、汝が首は此の小坂部、勝負は互に戰場」と、表を立つる勇者と勇者、娘は今を斷末魔、いたはる母親葉末、此家を出づる歸國の道、冥途の旅と戰場と、三つに別ると三惡道、心々に三軍出でて行く。

五冊目

岩國に、地名も高き小瀬川筋、天地に響く鯨波、兩陣初度の戦ひも、軍破れて大内勢、思ひく、に落集り、「ヤレ兵内無事に有つたか、恠右仰介怪我はないか。ヤレくけふの軍は何と思ふ、國始つて圖の無い負けやう、エ、口惜しい事ではないか」「オ、サ小瀬川を隔て、先手の奴等を打ちすくめ、十分味方の勝で有つたに、何として斯う成つたぞい」「ア、我達は知らないな、

頃日噂の兒島元兵衛、上の瀬を渡し、横鎗に辟易しての此のさまさ。年にも似合はぬ手ひどい智慧な奴では無いか」「イヤ智慧ばかりでない、その鎗先のえらさ、此後兒島と見るならば、必ず用心したがよい」「ナイ埒明かぬ事いふな、御家老仁木武者之介様、長々浪人してござつたれど、御歸參が叶つて、アレ見よ、向ふの陣所にござれば、兒島でも大島でも、出合うたら一摘みだ。併し負嫌ひの仁木様、此儘では往なれまい、勝軍に抜けかけてして、追ひくる奴らを一人でも、首を取らずば國の恥」「尤、ぬかるな早急け」と、喧嘩過ぎての防州勢、小瀬山さして引つかへす。仁木が家來岩田左太夫、六十餘りの老人引連れ、陣外遙に歩み出で、あたり見廻し小聲に成り、「拙者は是にて御別れ申す、密事の様子は存ぜねども、彌主人が頼みの一儀を」「ハテお氣つかひなされますな、御領分に住む私、殊にあの大切に存する御方のいはしやる事、何の如才がござりませう」「然らば御苦勞」「おさらば」と、立別れんとする所へ、以前の軍兵どいやどや、土民と見えし角前髪、高手に縛め引立つるを、左太夫見るより詞をかけ、「ヤア軍兵ども、若輩者に繩かけしは、仔細有つてか何事」と、尋ねに皆々出かし顔、「此どえらい軍場の、跡にうろつく前髪め、何でも敵の廻し者に極つた、それゆゑ斯くの仕合」と、口口いへば件の繩付、「申ししく只今も申す通り、うろんな者ぢやござりませぬ。此國の西島、門

戸兵衛といふ方へ尋ねて參るに違ひはない。どうぞお赦し下され」と、おろくしたる云譯を、傍からつくづく聞取る親仁、「コレ若い人、其西島の門戸兵衛へは、どういふ由縁で何の用、其譯を言うたがよい」「ハイ、何を隠さう私は、元次と申して、其の門戸兵衛、實の悴でござります。六つの年備前の國へ養子に往て、其後音信不通なれど、此度内を追出され、便らう方は實親を、尋ねて參る道筋で、かゝる繩目の難儀するも、不孝盡した親の罰、御めんく」と泣く涙、落ちあふ縁の門戸兵衛、「ヤア、そんならそちが我子の元次か、門戸兵衛はおれぢやはやい。ドレ顔見せい」と、取付いて、「オ、稚顔、さうぢやく、マ、何より無事で嬉しい」と、繩目にかゝる血脈とて、互の涙睦じし。左太夫手を打ち、「扱は貴殿の子息よな、ソレ繩とけ」と下知すれば、無駄骨折つた軍兵ども、手持あしくも緩める繩目、門戸兵衛手をつかへ、「御聞きの通り悴に相違ない上は、どうぞお赦し下さります」と、「何が扱疑念はない、連立つて歸られよ。併し又途中の氣づかひ、村境まで軍兵共、送つて參れ」に總々が、「取違へた言分には、道賑やかに囃して行かう。ヤアけふの軍に負腹立て、何でも手柄としめ付けた、繩さへ違つた左まへ、右の通りの詫言に、送つて濟すが鎧武者、ヨイ、ヨイ、ヨイ、ヨイ、よい折からに親と子が、名乗り合うたる小瀬川の、水の流や人の身の、縁に連立ち三重歸りける。

六冊目

周防長門の浦境、名におほ島の西東、爰は西島西方の、南無阿彌陀佛せぶらかす、在所質氣の門戸兵衛、有り難やとも家名せり。佛事仕まうて平僧の、かき込み茶漬端近に、大胡座してぐわッさぐわさ、給仕人は娘のお倉、「在所料理でお口には合ふまいけれど、よう上つて下さりませ」「ムニヤ〜〜」獵師の内と楽しんだに、いけもせぬ精進物で、やう〜茶漬七八杯、仕まひの付かぬ腹鹽梅、コレモウ膳取つて下され」と、箸投捨てれば、主は庭に縋ひかけた、繩もしつかり達者作り、「ム、何と云はしやる、扱はこなたは精進嫌ひか」「オ、テヤ、寺にゐる時は、一向一心が据わる故、けんによもない顔して居れど、何に寄らず喰ひたい物は、遁さぬ所できかん坊、ハ、ハ、ハ、併し、コレ親父殿、腥物が一つも無うて、今夜の事はどうさつしやる」「ム、今夜の事とは何の事」「ハテ物覺の悪い、咄して置いた聲の事ぢや」「夫忘れてよい物か、精進日で海山とも商賣は休んだが、其の心當はして置いた」「オットよし〜、斯ういふ内へ聲入するも、何やらこなたに頼みたいと、望んでくる上々聲、ア、心當と言はしやるので、どうやら咽がこそばう成つた。晩まで待たず其聲を、今から往んで連れてくる。何も

手廻し親父殿、料理拵へして置かしやれ、コレ濱焼は古いぞや、たつぷり芥子で刺身がよかる。吸物ならば西島の鱈汁が名物ぢや」と、獨呑込みぬらくら坊主、出て行く隙を待ちかねて、「申し爺さん、聲を入ると云はしやんすは、誰が聲でござんすえ」「オ、知れた事、我が聲ぢや。尤由有る浪人として、去々年の冬から、こちの内へ来た五郎作、縁でがな聲に取つて、我と女夫にして置いたが、又跡月國元へ、ちよつと返して下されと、出て往たなりに置去同然、是では濟まぬと思ふ内、お坊の世話でこちの聲に、望んで来る上方者、相談しめて何か無しに、けふ連れて来る筈ぢや」と、聞いてはつとは思ひながら、「アノとよさんのわつけも無い、何ほう音信ないとても、漸三月立つや立たず、どうまあ男が持たれる物か、止めにして下さんせ」「イヤ段々と寄る年に、我ばかりでは便がない」「サイナア其便りには夕べから戻つてゐる弟の元次、旅勞で休まして置いたれど、いやといふわたしが無理か、起して来て相談せう」と立上るを、「是は扱、弟めは幼少から侍に成りたがる故、備前の郷士へ所望せられて遣つた忤、しくじつて戻つて来て、三つに付いた癖は百まで、便りに成るやら成るまいやら」「アレまだやつぱり聞分ない、モウ云出して下さんすな」と、つんと背ける門の口、内の様子はきかん坊、墨の衣も取つてのけ、横すぢかひに麻袴、「来たぞや〜〜、花聲を連れて来たが、顔見せぬ内

持參の敷金、えらぢやはいなうく。サアく皆の衆、すつと内へ頼みます、えらぢやく大
 事ぢや」と、わめく間に、人歩が持込む千兩箱、間狭き庭にみちのくの、黄金花咲く寶の山、
 門戸兵衛ぎよつとし、「是は又どめつさうに持込んだは、此箱は皆金か」「知れた事、えらぢや
 はいなうく、十箱で丁ど壹萬兩、愚僧も歩一の千兩をせしめたら、還俗して花やる心、マア
 あたまは跡へ廻し、麻上下の仲人役、是かほんまの三國一、聳に取濟した顔で、親父隨分奢ら
 しやれ」と、いきり切つたる坊主天窓、もたへのない年寄質氣、「コレお坊、深切ぶりは忝い
 が、御本山へ上げるやうに、金出しながら悦んで、こんな内へ来る聳なら、コリヤモ何でもろく
 な奴ぢや有るまい。マアとつくりと糺した上」と尻へ手の、廻り氣はもつけの幸、「ム、とよ
 さんさうぢやはいな、盗人が海賊か、跡の捌けがむづかしい、きりく持つて往なしやんせ」
 と、何がな往なしたがる女房、「エ、譯もない、此金に尻宮は、禁中様でも來す事ならぬ。聳が
 わせて名を聞いたら、恠りして目を廻さぬ様、氣付の用意もして置かしやれ。ソレくそこへ
 聳殿ぢや」と、立つたり居たり出つ入りつ、譯しろ妙の濱傳ひ、先手の行列ふり込めさ、其勢
 ひは泰山の、わきはさみ箱輝く金紋、きり鎮めたる天が下、持筒持弓引馬も、萬里に羽うつ大
 鳥毛、風もなぎなた、枝を鳴らさぬ松の木の下蔭より、今は大樹の徳高き、乗物出づる大領久

吉、名乗らぬ先に氣を吞まれ、親子は鞆れ詞なし。近習小姓は戸外に残し、通り給へばきかん
 坊、「何と肝がひしやけるか、聳といふは久吉様、冥加に叶うた嫁舅、氣遣ひなしに歩一の外、
 働き代の御再興、志早うく」と慾頼坊主、「だまらしやれ、御大身の久吉様が、獵師の聳に
 成りたいとは、外に様子の有りそな事、吞込まぬ縁組は、こつちから變改します。娘も得心せ
 ぬからは、連立つて往なしやれ」と、けんもほろよに雉子と鷹、恐れ氣もなきむくつけ親仁、
 「ホ、ウ利慾に迷はぬ門戸兵衛、推量に違はず、頼入りたき四海の大事、此度當國大内家と、屢
 合戦利ありといへども、要害堅固の岩國山、本城への間道有るよし、絶所の案内頼まん爲、わ
 ざわざ是まで來つたり」「成程其拔道を知つた者は、猪猿の外國中に、今一人と無い此親仁、夫
 を習うて大内家を、潰してしまふ心である」「イ、ヤ左にあらず、本道より責詰めなば、兩家の
 死亡少なからず、智計を以て歸服させ、名家を長く立置く心底、必ず疑ふ事なかれ」と、仁慈の
 仰にお側附、「お受けく」と有りければ、「ム、ハ、ハ、ハ、此國を切取らふと、間に合嘘は此
 親父が、兀あたまに映つて有る。夫ともに、四海の爲と云はしやるが誠なら、物習ふには法の
 有る物、大將風取り置いて、見事習うて見やしやるか」と、一理窟有る詞のはし、尤と思し
 けん、「皆の者、心に叶はぬ金子を取持ち、手廻りの外は船中へ」と、遙に遠ざけ久吉公、つか

つかと庭に畏り、「何事によらず教るは師匠、習ふからは弟子分の奉公人、遣うて見て下さりませ」「ハ、夫でちつとは誠にしいが、こつちの内に遣ふからは、米も踏んだり木も割つたり、それ合點なら遣うて見よ」「ア、とよ様めつさうな、あなたは今誰有らう」「ハアテ大事な、あのわるも元成上りぢやはい。少さい時には子傳したり、味噌こし提けて走つたり、下司仕事は苦にも成るまい。幸に絢ひかけて置いた其の繩、目見えにやつてくれぬかい」「何が扱安い事、五十尋や百尋は、つい朝腹」と尻輕に、取つて手品も下司近う、塵に交る薬仕事、坊主は傍に伸び欠び、「ヤレくくく、競ひかよつた敷金は元の鞘、反の合はぬは愚僧一人、せめて一ぱい親仁殿」「オ、コリヤ道理ぢや、娘よ酒屋へ一走り」アイくくくと立つお倉。「オット待つては蟲がきかん坊、おれが代つて徳利と、道々口からあて呑みに」咽を鳴らして出でて行く。煙管くはへて門戸兵衛、「よつ程下地が有るかして、薬のこなしが味い物ぢや。昔の業をさすに付け、一飛の立身出世、マア何から仕出したぞいの」「さればこそ、因果物語をお尋ね、仕業しながらかい摘んでお咄し申そ。小姓ども、湯を一つ」ハ、アと用意を白銀の、器に立てる臺子の泌、おつ取つてがぶくく、「のみの息さへ天上すれば、男は氣で食へ、生れ付いて小さい事が大嫌ひ、口から出次第いふ事も、一つ拍子が向いて來ると、我も知らぬ運が手傳ひ、天

が下といふ大身代、持つて見ての其の術なさ、イヤすぢつたはもちつたはと、訴へて來る度々、四五六に分けねばならず。ア、今年は豊年か、凶年か、米が高いは安いまで案じて見るは、其日過しと同じ身の上、町人が笑へば武家が脹れる、在が好ければ又此方と、思ふ様には成らぬ世界、なうくいやの天下取、按摩取にでも成りたいと、明暮願うてをりました「いか様コリヤさうも有らう、そんならやつぱり樂しみは、夕顔棚の下涼か」「ハイ、無うて事足る身こそ安けれ、ム、ハ、ハ、ハ、ドレ一服仕らう」心得小姓が、たばこ盆さへ目八分、長い煙管の上も無き、煙くらべの富士淺間、お倉は始終もぢくと、「氣の輕いお方なれど、仰山なあのお姿」戸「ほんになア、奥へ連立ち張込んで、おれが著換の古布子、著せかへてやつてくれ」久「ヤソリヤ有りがたい、久しぶりの洗濯物、お辭儀なしに申し請けう」戸「オ、勝手見がてら休んでおぢや」久「小姓どもは當家を放れ休息いたせ」「後程お目にかよりましたよ」と、上と下との分隔、そぐはぬ薬屋に長袴の、裾引別れ入り給ふ。跡には一人佛壇の、扉押明けぶつくと、ゆふ時の勤終る頃、お倉は心も心ならず、「申しとよ様、我を立抜いて久吉様を、留めさしやんしたお前の心、間道とやらを教へる氣が、但しは外に思案でも有つての事か」と心問へば、「そりや心底を見届けた上、どうせうと儘な事」「イエく悪うござんせう、御領分に住むお前、殊に

夫の身の上は「オ、今大内家へ歸參して、仁木武者之介と云はうがな」「エ、それ知りながら拔道を、教へる心でござんすな」「ハテ日本一の久吉殿、下司仕業の奉公も、下を憐む名大將、相人に取るは危なもの、こちの内に留めて置くは、國の爲聲が爲ぢや。ドレ裏へいて大將に、米なりと踏ましてこう」と、提くらべせし煙草盆、脇へ押しやり入る跡を、見送る目さへ涙ぐみたる女氣も、案じに暮れの「かねてより、夫を仁木武者之助と、本名知つてとよさんが今の口ぶり、敵方へ拔道を、教ゆる心はやつぱり慾か、但しは武家に望有る、弟が出世を願うてか、何にもせよ此事を、夫へ告げん」と駈け出せしが、「イヤ〜〜、知らした上で憎い奴と、たつた一人のとよ様を、國の仕置は知れた事、親の訴人に行くも同然、こちらも大切あちらも大事、兎にも角にも睦じう、して下さるが親の慈悲、中に立つ身の悲しさを、思ひやりなき胴慾」と、親と夫の二道に、迷ふ心ぞいぢらしき。時分を窺ふ弟元次、直に生立つ竹藪を、手頃につたる引削鎗、奥を目がけて寄らんとす。姉は驚き、「コレ弟、勢ひ込んでコリヤどこへ」「シイ音高し姊者人、幼少より武門を望み、上方にて主取せし、亡君明智の敵は久吉、恨を返す此の竹鎗、さすれば大内の國恩も、俱に報する今この時、そこ退き給へ」と血氣の若者、「オ、其心を聞く上は、女ながらも夫の名代、國に仇する眞柴大領、餘しはせじ」と、かひなくしくも身

拵へ、「急くまい姊人」倉「心得し」と、忍び寄つたる一間の内、人影目當に突込む竹鎗、切取る手ごたへ「仕損ぜし」と、蹴放す障子の内には爺親、思ひがけなき兄弟は、誤り入つて跡じさり、親は惚れなく何氣なう、「漸々へ戻つた弟、海山かけての獵師商賣、知らずに居ては口が干上る、其繩爰へ持つてこい。マア山の案内から、教へて置かう」と差圖して、「ソレ〜姊が持つた繩の端、東の尾崎を入込んで、さう、斯う西へ引廻した、二間ばかりが十四五町、見上げる様な石のかはり、ソレ横槌を上置き、其石を左へ取り、樹木茂つた谷間を十丁ばかり、此縁側へ上る様な、切岸高い岩山を、木の根にすがつて攀ち登れば、敷居の流れ小瀬川の、上を渡つて又爰に、數百間に餘る大岩、煙草盆、印に付けし枝折を尋ね、右へ廻つて高山を、上りつ下りつ、凡道法貳百丁、岩國の本城へ、急げ〜」と云ひければ、「スリヤ御教は山口の間道とな」「オ、兩人彌猛にはやるとも、いかな〜討たれぬ大將、今教へた間道より、武者之助を手引して、久吉が首討たさう爲、事にかこつけ留置いたも、聲に手柄がさせたいばかり、今宵の中に」と、持つたる一腰投げ出せば、元次ははつと押戴き、「コハ有難き御本心、是こそ主人に受けたる感狀、我身の姓名成行まで、一書に詳しく認め置く、事急なれば」と、取出す一封取り次ぐ姊、「難所の夜道怪我せぬ様」心得用意の陣松明、道を照して駈けり行く。親もぞ

くぞく後影、「我子ながらも、生れ勝つたりよしいやつ、此感状に姓名とは、何と名を付けをつた」と、親子は行燈引寄せて、「國を出づる時は、親兄弟を忘るよにはあらねども、弓矢の義理は私ならず。ハテむづかしう書置いたなア。明智の殘黨と申すは偽、誠は養父の古主に隨ひ、久吉公の下知によつて、間道を聞取らば、是を功に大内家と和睦の願ひ、國に仇して國を助け、不孝に似て孝を立つる和睦の神文、慥に御落手下され度候。親人様へ、兒島元兵衛政次」と、讀む度々に親子が驚き、戸「ヤア〜扱は頃日名に高き、兒島元兵衛といふ若者は、忤元次で有つたよな。ア久しぶりで戻りやつたは、間道を習はう偽か」とよ様「娘」ハアはつと鞆れてどうと坐し、しばし詞も無き折から、始終見届け久吉公、欣然と立出で給ひ、「仁木に縁有る門戸兵衛、一應では教へぬ間道、聞取る方便は兒島が誠心、感じ得させし其神文、間道より攻入つて、勝利は得るとも大内家の、本領相違有るべからず。案内知るれば直さま出陣、知らせの相圖」と狼煙の一煙、待設けたる諸軍勢、早御迎ひと満々たり。門戸兵衛は答へもなく、以前切つたる竹鎗の、穂先を腹に突立つれば、取付く娘が氣も半亂、「頼みに思つた弟は、義理故隔たる敵味方、死ぬるお氣なら後にはせぬ、早まつた事なされた」と、歎き沈めば息ぐるしく、「古今無雙の名將を、山かせぎの猿智恵で、計らんとせし身の天罰、國の破れを引出した、極悪人

の成敗は、此竹鎗のお仕置に、かよる因果の罪亡し、大將の御情には、國の相續其の次手に、不忠不孝な忤めを、行先頼み上げます」と、恩愛餘る親心。久吉殆ど感じ給ひ、「卑賤に惜しき親子が心底、實武者之助が妻舅、兒島が親にて有りけるよ。跡氣遣はず成佛せよ、さらば〜」と愁涙を、袖に拂うて出で給ふ。諸軍も隊伍嚴かに、間道さして急ぎ行く。泣入る娘も是までと、覺悟の刃止むる父、「イヤ〜放して下さんせ」と、あせる此方の苦船より、「舅の命捨てられし故、今こそ死地に陥る久吉、適妙計成就せり」と、云ひつゝひらりと縁側へ、上るは仁木武者之助、凛々たる勇氣の骨柄、「ヤアお前はこちの人、是は〜」と二度悔り、手負は傍に這ひ寄つて、「聲に取つた始より、只人ならぬ浪人と、思ふに違はぬこなたの素姓、きのふ陣所で名のり合ひ、教へを守りし今宵の手段、そつちの用意はいかに聲殿」「ハ、ア御氣遣ひ下さるな、海手を廻る間道を、反つて山路へおびき入れ、地雷を以て、慶、希代の勝利は瞬く内。去るにても親仁様、其身ばかりか肉身の、我子を見殺す御心底、嘸や便なく思されん。此家へ忍んで猿冠者を、討取るは易けれども、卑怯未練に身を隠し、欺し討ちしと云はれんは、大家に仕へる武名の恥辱、是よりほつ付き戰場にて、眞柴が頭を得ん事は、國の洪福舅の賜、ハ、ハ、ハ嬉しく悦ばしや」と、勇立つたる猛將の、聞えは末世に隠れなし。表へすたく〜きかん

坊、勢ひ込んで駈來り、「ヤア〜親仁殿、檀家の頼みに大将を、とつくりやつて山道へ、村境から勢揃へ、えいさつさつとたつた今、往たを見付けた穴賢。モウよい時分仁木様、早うお出かけなされませ。しかしかはいや大勢が、皆一時に焼殺され、朝には紅顔有つて追付け白骨のみぞ残れる、歸命無量術ない山坂へ、汗を流して引つかへす。仁木は開くる喜悅の眉、雲間をきつと打眺め、「我國の火精を以て、東に列る敵の木曜、一炬の焦土と成さんす計畧、水生木と北方より、助くる水氣は味方の凶事、ハテ怪しや」と伸上る。岩國山に雲覆ひ、忽ち降りくる雨の足、雷光際なく鳴る神の、響き渡つて悽まじし。孝郷怒りの齒がみをなし、「思ひ寄りなき此天變、謀は人に在り、功を成すべき天運は、久吉に及ばぬよな、無念々々」と降る雨に、争ふ涙はらく〜、妻もうろ〜門戸兵衛、「悴を殺し身を捨てよ、計りしも皆空事、何とせう」倉どうせう」と、騒ぐ二人を押ししづめ、「此上は無二無三、久吉が首取るか、叶はぬ時は切つて切死、舅殿。女房さらば」と、ゆう者の別れ、一振ふつたる鎗の柄に、風を切つてぞ駈出でたり。親子はハア〜心も空に、雨か涙の幾しきり、すはや合戦半と見え、螺の音太鼓人馬の聲、倉アノ大勢に只一騎、いかゞして防ぎ給はん」戸鞆はいかに「夫は何」と、早討死の時刻かと、見やる渚も吹く風に、逆浪打込む藁屋の軒、内も生死の汐境、「夫の先がけ

とよ様の、未來のお供」と、懐劍咽に貫けば、「娘出かした、潔よう死んでくれ。仁義を守る久吉の、此神文に違はぬ様、跡に残すが國の爲」と、探る手先に以前の竹、先に挟んで縁側の、柱にしつかとくより付け、よろめきながら親と子が、往様來様の通ひ路も、満ち干る汐の寄せ返る、浮身の終り、「なむあみだ佛、〜」今ぞ引きとる波打際、俱に落入る荒海の、哀ばかりぞ残りける。磯打つ波の眞砂地を、踏立て蹴立て武者之助、駈戻つたる阿修羅の勢ひ、「舅殿、女房共、親父様」と、呼べど答へも、「縁先に、滴る血汐は二人とも、此海底に沈みしよな。残りし一書は久吉が、和睦を誓ふ自筆の神文、奇怪至極」と引裂き捨て、「縦横無盡に尋ねれども、討ち洩したる大領久吉、我も海手の間道より、一先退き時節を待ち、眞柴が首取り手向けん」と、心に誓うて立つたる所へ、櫓を押切つて上方勢、士卒に交はるきかん坊、船端に大音上げ、「ヤアうつそりの武者之助、我を誠の同宿と、思ふはそつちの當の土、佐々木盛政が家來、粕谷の藤治、有りがたやから取入つて、そつちの工みはへこ蛸坊主、手並を見よ」と下知する矢襖、「ヤア舌長なるうす蟲めら、此世の暇くれんす」と、袖先に手をかけ周處が勇、「打返したる大灘に、藻屑と成つて塵、フ、、、ハ、、、」少しは心晴れ渡る、月は西島苦洩る船へ、乗移つたる其跡の、血汐に名残有りあけの、嵐に連れて漕ぐ船の、末しら浪路を窺

ひ寄る、英智の大將隨ふ兒島、「仁木が船の行先こそ、誠の間道ござんなれ。アレは届けよ兒島元兵衛」ハツと手早に小具足を、身輕に脱捨て飛込む水術、浮きつ沈んつ 三重慕ひ行く。

七冊目

神と君、直なる御代に周防の國、一の宮の鳥居先、参り下向をまつ蔭に、茶店半分片店は、時代世話事讀分講釋、榮來丹次と墨ぐるに、張紙べつたり聞人ども、毎日押しも分られず、一席仕まひ休息の、間もわやくや、甲「ナウいづれも、扱今の前講は、聞事ではござらぬか」乙「ソレイこちとらも張良が、謀に習うて 節季々々掛乞どもが取巻く時、笙の代に輕業の、ちやるめらでおだてかけたたら、九里山とあちらこちら、陽氣に成つて逝におろかい」甲「こいつはよいはいの、ヤ其謀で思ひ出した、此國の殿様大内様と、久吉殿との大いくさ、先度も岩國山ですつての事、眞柴殿は焼討に逢はれる所、俄に大雨が降つて来て、討ち洩したけなの」乙「サアさうぢやといの、夫から兩方軍も止めて、睨み合うてるばかり、殊に町人百姓にはお構ひなく、随分金儲けして賑はしうせいとお觸ぢや。そこでおれが思ひ付、近年は何でも角力の番附にする事がはやるによつて、軍の勝負附くと賣りあるいたら錢になろかい。兎角下々を憫れま

しやる殿様、神も納受なされたやら、あれ見やしやれ、時でもないに、神木の櫻の盛り、見事ぢやないか」と我一の、咄し半へ講師の丹治、席へ直つて聲づくろひ、「扱唐軍ばかりもあまり珍らしうござらぬから、後席は此間より、當世眞世話噺講釋を仕ります。則ち昨日は團七九郎兵衛一寸徳兵衛、攝州住吉霞松原にて口論の一件、つひに片袖を取りかはし、兄弟の約を成しまするは、カノ桃園にて義を結びし、立徳關羽が心に同じ。右九郎兵衛が舅三河屋義平次を切殺し、既に召捕らるべかりし所、一寸三分などが厚情によりまして、備中玉島へ下りまするまででございます。又其頃浪花の市中をあふれありく、五人男といふ者あり、所謂袖ふり男達是なり、其首領を鷹金文七と申し、身の丈七尺、面皮清らかに致して力飽くまで強く、従ふ手下正九郎、たけ拔群にして、眼は照れる星の如く、一聲雲に轟くが故に、世舉つて雷の正九郎と號けたり。其外あんの平兵衛布袋など、いづれも一騎當千にして、無雙の豪傑、武士町人の分ちなく、投倒し踏飛し、あたかも群れたる羊の中を、猛虎の躡けるに異ならず、四角八面にあふれ廻る。理なるかな此鷹金文七、宅間流の奥義を極め、智謀軍術たくましく、賤しき紺屋の忤なれども、後に宇治の常悅と變名仕り、夫より大明の味方となり、千里が竹に分け入つて、酒呑童子を亡すは、又明日」と出次第に、云ひ廻したる口拍子、聞人も軋れて、「こりや氣疎

い「千里が竹の林より、太郎の話の聞人ども、笑うて歸れば榮來丹次、葎實の陰へ立つて入る。折から先手の家來ども、「片寄りませい片よれ」と、道を拂はせ井上新左衛門元晴、折目高なる上下衣服、二腰さすが國取の、家臣と見えし其の勿體、來かよる向ふへ年ばへも、廿の上は六つ七つ、出海左衛門が妻の眞弓、神に願ひを掛けまくも、忍び詣の下向道、夫と見るより、「ヤ是はく、宗定殿の御内室、暫くはお物遠」「あなた様にも御息もじ」「成程々々、此間の合戦より、敵も味方も軍を止めて日を送るは、扱々退屈、氣晴しがてらの御代參、心もせけばお別れ申す」と、挨拶そこく行かんとする、袂を控へて、「まづ暫く、申すまではなけれども、此度の曠軍、譜代外様はいふに及ばず、末々の者までも、命をお主に抛つ戰場、夫左衛門只ひとり、軍評議の席へも召されず、出勤無用と御前の仰は、意趣有る人の讒か、神の力に曇りなき、身の云譯も立つやうと、日毎々々の歩詣、あなたのお目に掛るも御利生、お上へよしなのお取なし、偏に願ひ上げます」と、餘儀なき詞に新左衛門、「ナニ家來ども、社參の様子神主方へ早く案内」と下部を遠ざけ、あたりに咲きたる山櫻の、枝を手折つて傍に寄り、「拙者が返答此通り」と、さし出す一枝打眺め、「時ならず咲く此花を、御返事とおつしやるは」「ホ、ウ當春宮島千疊敷において、正清を見遁し歸すは、妻女の縁に繋がれて、親しき一家の出海左衛門、

返り忠も有らんかと、疑かよる返り咲。又一つの頼みは、其元の父小坂部兵部義廣公、豫ての懇望、味方に歸伏致されなば、自然と晴れる主人の疑念、汚名を雪ぐ花となるや、歸り咲の不忠不義と後指さよるよや、善悪二つは一つの返答、とくと工夫を致されよ」と、花によそへし井上は、實朋友の信なりし、聞くに眞弓は胸迫り、とかう辭も無かりしが、思案極めて、「オ、さうぢや、命に懸けて父上を味方に勤め、一心なき夫の忠義を顯はさば」「ホ、ウ御前の首尾は元晴が、刀にかけて麓略はなし。必ず吉左右相待ち申す」「おさらば」「さらば」と目禮式禮、夫思ひの一筋道、操に心張り詰めし、眞弓は別れ立歸る。時分よし簀の茶店より、出づる丹次が合圖の呼子、笛の音に寄る鹿ならで、こよかしこより一時に、現れ出でたる數多の力者、「井上遁すな討取れ」と、追取り圍めば、「ヤア何やつなれば此狼藉、すされやツ」ときめ付くる。「ヤアどこへく、榮來丹次と假名して、此國へ入込みし某こそ、大友家の勇者と呼ばれし瀬戸坂兵藏、主人を一ぱい啜らした、鐵砲鍛冶屋の俄武士、覺悟ひろけ」と罵つたり。元晴かんらハ、からと打笑ひ、「軍乏しく事がなと、相手ほしきどうぶくら、しをらしき拔斷呼はり、成らば手柄に仕留めて見よ」と、股立きりよと肩衣刎退け、大手を擴げて突つ立つたり。「ヤアにつくい廣言、ソレ者共」「まつかせ」二度に組付くを、取つては投げのけ人礫、折に神樂の笛

鼓、音に紛れて目ざましき、勇力無雙の働きに、腰骨肩骨いたやの霰、ばらく、ばつと逃げ散つたり。「ホ、ホ、ホ、神慮を恐れ難人原、助けて返すが放生會、味方の武運長久を、猶も祈りの太祝詞、義心岩戸を押開く、神の勇力加つて、時におほちの勝鬨と、勇んでこそは 三重詣でける。

八冊目

老いぬれば、麒麟も驚馬と身退き、我領國に引籠る、小坂部兵部音近、真柴大内の戦ひで、寄らず障らぬ老将の、胸の器も廣書院、案内と俱に入り來たる。大友三郎景澄、斯くと知らせに館の主兵部音近、家に杖つく岩疊作り、刀引提げ出で向ひ、互に挨拶事終り、「今隣國大内を責討たんと、真柴久吉大軍を催し合戦最中、篠下の大友何用有つて、入來なるや」と不審顔、「成程貴所にも存じのごとく、某始め列國の諸將、久吉の幕下に従ふも時の權威、武勇自慢の大内さへ、攻付くる勢ひなれど、足下の武名に恐れてや、手指しもせざるは 適家柄、殊に長壽の賀を祝し寸志の品、早くく」の詞の中、家來が運ぶ白臺に、巻絹黄金美酒佳肴、お髻の塵とる琥珀の硯、珊瑚の杖突鬨斗包、廣縁狭しと並ぶれば、「ム、真柴久吉冠者義廣、二虎戦はしめ、一虎は亡び、一虎は勞るゝ虚を討たんと、賄賂の麥飯を以て、蓮葉の我を釣らんと

は愚々」と取り合はぬ、詞に三郎膝すり寄せ、「弓矢取つては西國に、人も手を置く小坂部殿、わづか當城の主と成し置くは残念至極、拙者に力を添へられなば、真柴大内も討じし、六十餘州を手中に握らば、九州一圓四國を添へ、進上申す」と宛もなき、雲を便の空頼、聞きも敢へず打笑ひ、「ハ、ハ、ハ、甲に似せて穴を掘る蟹侍とは貴殿の事、我鋒先にて切取つたる一國一城、恩に被るべき主も無ければ、刃向ふべき敵もなし。足る事を知つて此城に、世を我儘の隠居親仁、國郡望みにおり無い、由なき音物穢はし」と、齒に衣被せぬ老人の、詞にべ無く言放せば、短慮の三郎ぐつと詰めかけ、「ヤア一大事を口外させ、否ならよいはで濟まさうか、胸を定めて返答せよ」と、切刃廻せど見遣りもせず、餘所に吹きなす煙草の煙、さわがぬ丈夫に氣を呑まれ、怖氣立てども負けぬ顔、「かほど言うても相人に成らぬは、エ扱は某が武勇に恐れしものならん。老人相人も大人氣なし、頼聞かすば此進物、持歸るに云分有るまい。留めて見ぬか」と足早に、犬の逆吠家來ども、頬眞赤に枝珊瑚珠、琥珀の塵灰付きは無う、しよけに成つてぞ立歸る。跡に兵部は眉を皺め、「鹿を指して馬といひし、馬鹿の上行く三郎景澄、數代續きし大友家も、斷絶なさん笑止や」と、仁なる悔きくの間、襖押明け正清が、妻の葉末に引添ひし、眞弓といへど弦も無き、胸は眞紅に結びたる、文箱携へめいくに、父の兵部

が右左、願ひ有りけに座に著けば、「ホウ兩家雌雄を争ふ時節、事繁き中姉妹共、打揃うて來りしは、我賀を祝せん爲ならん。思はざる合戦より、葉末が夫加藤正清、眞弓が嫁したる左衛門宗貞、聶と聶とは敵と敵、去りながら武士の常珍しからず。シテ孫どもは堅固で居るか」と、尋ねに姉は會釋して、「賀の悦びを幸に、参りし様子は久吉様へ、何とぞお味方有る様と、是までお勧め申せども、お聞入れない父上様、御勘當遊ばした弟の和三郎、今では眞柴の御譜代同然、聶も娘も子も孫も、一家一門睦じう、同じ味方に有るならば、モウ此様なお目出たい嬉しい事はない。昔氣質を取置いて、朝日と昇る大將へ、お味方なされ弟が、勘當赦すとい一口、いうて給はれ父上」と、我身の上と弟が、詫も一つに取交ぜし、姉が願ひを打消す妹、「オ、身勝手な姉様、私が來たのも同じ願ひ、大内の家の兩家老、武者之助か出海かと、言はるゝ勇士も眞柴の家臣、正清に縁有りと、義廣様のお疑、軍のお供も叶はぬ悔しさ。父上さへお味方あらば、夫の明りも立つ道理、孫子不便と思すなら、大内方へのお味方を、偏に願ひ上げます」と、いふも涙に曇り聲、遺の父も姉妹が、同じ願ひに黙然と、答なければ猶すり寄り、「御返答なされぬは姉様に近くお心か、若しお聞届けない時は、此箱の封を切り、改め見いと夫の云付」

「ソリヤ姉も同じ事、お返事の品に寄り、此箱を父上に、見せて心を定めよと、様子有りけな

夫の指圖、御思案願ひ上げます」と、同じく傍に差置けば、「ム、眞柴大内兩家より、是まで再三招くといへども、所存有つて従はぬ、我に見せよと兩人の、聶と聶とが送りし此箱、とくと思慮して否應の返答、それまでは預り置く、萬事は後程先づ奥へ」と、納むる父も一思案、夫思ひの姉妹が、上べに笑顔つくれども、胸は蝸牛の角隠す、心々を三方へ、引別れてぞ入りにける。秋は殊更物さびし、千草にすだく蟲ならで、臺子の釜の音澄みて、數寄屋待合前裁の、露路と勝手を忍び足、隔て合うたる姉妹が、心も先へ飛石づたひ、それと眞弓が「姉さんが」「オ、爰へは何しに、エ聞えた、わしを出し抜き父上を、大内方へ味方に付けうと思やるのか」「さう言はしやんすお前こそ、先へ廻つて久吉方へ、勧める心でござんせう」「エ、つべこべと口答、そこ退きやらぬか」と突きのけて、行くも姉甲斐隔つる眞弓、邪魔仕やんなと振りほどく、風に屏風の柳腰、帶際取つて引戻す、腕もかよわき糸薄、亂す黒髪兩方が、掴み合うたる姉妹喧嘩、争ふはずみ縁側へ、こける拍子にばつたりと、思はず開く障子の内、閑を樂む音近が、臺子にかより獨服の、濃茶の手前他念なく、「出海加藤が妻と言はるゝ身を以て、はしたなき振舞、さりながら、主家を思ふの貞節、さのみは呵らぬ、中直は幸々、姉妹中も濃茶の盃、サアへへ」と機嫌よき、父の詞に葉末差寄り、「今四海一統に、久吉様へ従ふ時節、理を非に曲けてお味方を」

「イエ〜姉様まんがちな。申し父上、義廣様へお味方せうと、つい言うて下さんせ」
 「ハテ姦しい、是非返答が聞きたくば、雙方共罷りならぬ。此上はそち達、持參の品を改めよ」と、取出し渡す以前の箱、心濟まねどめい〜が、あたふた明けて取出す、様子は何かしら布に、「ムウけふの細布胸合はずと、古歌の下の句、手跡は夫正清殿」
 「わたしが方はコレ此扇、ドレ〜秋來月を視て歸思多し、自ら籠を開いて白鷺を放つ。ム、コリヤコレ古郷を思ふ詩の心」
 「娘共、とくと工夫を仕れ」
 「アイとはいへどおとどひが、夫の心しら布と、かけし扇の判じ物、解けぬ色目を見て取る音近、眞柴が招きに従はざる、舅も聲も心々、けふの細布胸合はずと、一家の縁も此ごとく、斷切る布は離縁の印」
 「エ、そんならわたしは正清殿に」
 「オ、そちばかりでない妹も、古郷を慕ふ詩を、扇面に書し送りし左衛門、要をはづせし其扇、親骨子骨ばら〜に、因を切つたる扇の去狀」
 「ハアはつとばかりに詞なく、目には涙の玉手箱、明けてくやしき思ひなり。時しも次より近習の武士、眞柴家より使者として加藤正清、大内より使者として出海左衛門宗貞、只今是へ」と知らすれば、萎れし葉末も露持つ心地、
 「オ、よい所へ夫の使者、子中なした夫婦間、合點もさせず去られた様子を」
 「オ、さうでござんすとも、わたしとも同じ事、お使者で有らうが此恨、頼むは姉様」
 「呑込んだ」と、初めのもつれ何所へやら、ほどけ合うては引締め

る、帯も眞身のおとどひ思ひ、「ヤア縁切つたれば他人向、無禮の挨拶仕るな。身も禮服に改めん」と、いひつゝ立つて奥深く、入る間に程も長廊下、「加藤虎之助正清」と、親の名を假る笹市が、まだ十才の腕白盛、年も相生ふ松太郎、「父左衛門」と是も亦、名は芳しき梅檀の、みばえゆ〜しく打通れば、思ひがけなき母と母、「ヤア左衛門殿と思うたは松太郎か、ようおぢやつたの」
 「笹市もと〜様の御名代ぢやの、長上下の著こなしぶり、よう似合つた事はいの。サア〜お使者の口上此母へ」
 「イエ〜と〜様と縁が切れた、お前は餘所の伯母様ぢや」
 「オ、笹市殿の云はしやる通り、コレ餘所の伯母様、祖父様へのお取次、お頼申し上げます」と、云合さねど兩方が、利發に困る母親も、何と答へも口ごもる。一間にかくと洩れ聞く兵部、老の氣丈の長袴、左右に小太刀携へて、作法亂さず歩み出で、「久しく對面せざる中、ハテ大人しく生育ちしな。娘が縁に引かれざる、小坂部が性根を知り、縁を切つて孫共を、使者に差越す發明々々。ガもし此祖父が承引せずば、其儘では歸られまい、とくと思案を定めよ」と、詞も待たず松太郎、「此役目仕おほせねば、生きて屋敷へ戻るなと、と〜様のお詞」と、云ひつゝ手早に上下上著、脱けば白無垢麻上下、母は見るより、「オ、さう無うてはならぬ筈、大人も及ばぬ健氣さを、眞似が成るならどなたでも、仕て見やしやんせ」と聞けがしの、詞も耳に當り障り、「コレ妹、親の口から

子を褒めるは聞きにくい、それ程の事仕かねる様な笹市では無いはいの」「アイ祖父様が味方に付いてくだされずば、死ぬる覺悟に極めてます」「オ、さうで有るく、早う用意」と上下の、紐を解くやらほどくやら、上著脱がせば同じくも、下は無紋の死出立、見るよりはつとは思ひながら、「オ、出かしやつたなう、眞實極めたそなたの覺悟、誰も口では立派にいへど、まさかに成ると臆病風、出やすい物」と初の嵐、吹き戻されて「コレ姉さん、臆病風とは誰が事、儀に依つては命を惜む松太郎ぢやござんせぬ」「ソリヤこちの子も同じ事、父上のお返事次第、立派な覺悟見物しや」「イヤ松太郎が覺悟を見せう」「見事そなたが」「お前が」と、我子最良に取りのがし、詞しどろに争へば、「ヤア無益の論談、左程離縁が悲しくば、切れたる縁を繼合す王夫はさまざま、さりながらわれ達は此座に叶はぬ、早く立て。うじくと立ちかねるは、父が詞を用るぬか」と、老のいら立是非もなく、出づる心のしをり門、親子の中も隔つる切戸、鏢かけて、「申し祖父様、久吉方へお味方有らば、わしや侍が立ちませぬ」「オ、武士が立たうが立つまいが、祖父様はこつちの味方」「イヤさうは成るまい」「して見せう」「オ、出かすく、適勇者の憐ども、しかし大内に付けば笹市が恥辱とならん、と有つて眞柴に従はど、松太郎が身の上、いづれを捨ていづれを取らん、彼獅子の子を試すに等しく、此場に置いて兩人が、眞

劍の勝負を試み、勝つたる方へ祖父が味方、心覺えの此の二腰、是を以て立合へ」と、渡せば取つてめいぐが、腰にさすがは武士の、こ太刀の目釘くひ濡し、股立りよしく身拵へ、戸の透間より差覗く、母と母とは在られぬ思ひ、「年端もいかぬ二人の子供、命にかよる眞劍の、勝負さすとは餘りな、むごいはいの」とかきくどく、親の思ひぞ遣る瀬なき。耳にも懸けず音近は、床に直せし鼓取上げ、「我壯年の頃、武將足利義晴公、數度の軍功御賞美有り、尙も武名を鳴せよと、笏と號けし此鼓を下し賜はり、年賀毎に打つが吉例、今六十の賀を祝す、謠終らぬ其中に、用意よくば」と打鳴す、鼓のしらべ、白刃の刃、抜放して立向ふ、互の懸聲鼓の矢聲。「謠有りがたや、治る御代の習ひとて、山河草木穩かに、五日の風や十日の、あめが下照る日の光」劍の光打合ふ刃音、見る目ひやいさあぶなさに、こらへかねて駈け入るを、何時の間にかは物陰に、忍び姿の宗貞加藤、制し留むれば詮方も、泣けど叫べど白砂を、一足去す切結ぶ、武士の扇の直焼刃、付入る刀請けはづし、弓手の肩先松太郎、切込まれてたぢくく。母は見るより悲しさの、心あせれど詮方なみだ、「謠さも潔き山の井の水、山の井の水、山の井の手疵も屈せぬ松太郎、尖き刃先笹市が、高股四五寸切付くれば、「アレ笹市が切られたはいの、ソレくく油断仕やんな」「ア、あぶない、必ず負けてたもんな」と、あせりながらも親々が、

詞の助太刀牛角の手練、切ツつ切られつ逆る、血汐染めなす秋草も、色を争ふ修羅の場、勝負いづれと氣を配る、父と父とは千萬無量、母は外面に血の涙、祖父は早むる謠の責、「謠君は船、君は船、臣は水、水よく船を浮べ〜て、臣よく君を仰ぐ御代とて、返す〜もよき御代なれや、〜、萬歳の道に歸りなん〜」深手に弱る松太郎、氣嵩の笹市捲り立て、とどめ刺さんと立寄るを、「ヤレ待て勝負見届けたぞ。娘どもは手負の介抱、早く〜」に母と母、我身をしづに東西の、鏢はづれ押明くる、としや遅しと駈け入つて、我子〜に縋り付き、「オ、嬉しや笹市、そなたは淺疵、神や佛のお蔭ぞ」と、姉は悦ぶ妹は、手負にひしと抱付き、介抱愚なきさげぶ、「ヤア武士の家に育ちながら未練至極、笹市勝負に切勝つ上は、兵部音近今日より、久吉公へ味方ぞ」と、聞くにいそ〜姉葉末、お馬の先の高名にも、まさつた手柄と譽めそやす、餘所の悦び子心に、聞くも無念さ松太郎、「エ、わしや負けたか口惜い、今一勝負」と刀を杖、立上れどもよろ〜、見る目に母はたへかねて、「オ、道理ぢやく〜、道理ぢやくはいなう。武士の意地とは云ひながら、孫は子よりも可愛いと、世の諺も有る物を、見殺しにする固意地は、むごいつれない父上」と、恨の數矢かぞへ立て、いふも眞弓が子に迷ふ、悔みにいとど苦しきの、引入る息を張詰めて、「ア、かよさま、祖父様に恨はない、負けたはわたしが未熟

から、大事の役目を仕損じた。憎いやつぢやくとよ様に、呵られうかとそれが悲しい。もし尋ねてなら、笹市に負けはせぬ、怪我につい切られたと、言うて詫して下され」と、今はの際も名を惜しむ、稚心のいちらしさ。こたへ〜し祖父兵部、以前の刀抜くより早く、腹へがはと突立つれば、「ナウ何故の御最期」と、右と左に姉妹、取付き歎けば氣丈の手負、眞弓が顔を打眺めて涙を浮め、「オ、恨は尤さりながら、何をか包まん松太郎へ、最前渡せし一腰はな、刃引も同然なまくら物、さるによつて笹市が手疵は薄手、斯く計らひし一通り、本意ならねど云聞かさん、姉の葉末は先立ちし、我兄元胤が忘れがたみ、某とは生さぬ中、同じ血の緒と云ひながら、義理有る孫の笹市が命を助け、肉身の松太郎を殺せしは、指す敵加藤正清に、縁を引いたる親左衛門、返り忠もあらんかと、主家義廣の疑念を晴すは、骨肉の一子を殺す義者の潔白、此上なしと思ひ寄りしも、義理といふ二字が劔と成つたるかや。月にも花にも換へぬ程、いづれ劣らぬ不便さも、生みの娘が生みの縁、分けて可愛い松太郎、コリヤ空死とばし思ふなよ。年こそ寄つたれ無雙の勇者、小坂部兵部音近を、そちが刀で此の如く、小腕に仕留め潔く、討死せし手柄者、出かしをつたと爺親が、賞めこそすれ呵りはせまい、心残さず臨終を」と、義理の孫子と恩愛に、捨つる命の有りがたさ。姉は元より妹が、「さうとは知らず父上を、恨んだが勿體な

い。コレ松太郎聞きやつたか、そなたが死ぬるは爺御の爲、負けたのぢやない勝ちやといなう」
 「ア、嬉しうござる、そんならお前も縁切らず、元の通りにと様と。中よう添うて下されや。
 かと様、かと様は何所にぢや」
 「オ、爰に居るく、悲しや其方はまう目が見えぬかいなう」
 「アイ、侍の子が未練なと笑はれうか知らねども、死ぬる今はにと様や、お前の顔がたつた
 一目、それがく」といふ跡は、舌ももつるゝ斷末魔、「オ、苦しかるせつなかる、其苦痛より此
 祖父が、切ツつはツつの度々を、諺鼓で紛らしても、肉骨を裂く苦みは、一百三十六地獄の、
 呵責を一度に請くるとも、此上の有るべきか、可愛の孫や」と取亂し、歎けば姉は急き上けく、
 「孫子の爲にお命を、捨てゝ恵みの父の恩、船車にも積まれうか。そればかりかはいとし子を、
 義理の刃に殺すのが、悲しう無うて何とせう、こらへてたも」と妹に、手を合したる詫涙、「アノ
 姉様の勿體ない、斯う成り行くも先の世の、約束事と諦めても、こんなゆゑしい子を殺す、其日
 も更へず父上まで、同じ刃の憂き別れ、神も佛も無き世か」と、手を取りかはし姉妹が、返ら
 ぬ悔み宗貞も、加藤が手前恥ぢらひて、爰にとだにも得も言はぬ、胸の苦しき目に餘る、涙見
 せずと喰ひしぼる、心を察し正清も、たもちかねたる共涙、眞は泣寄り眞實の、涙々に暮近き、
 秋や哀れを添へぬらん。左衛門悲歎の涙を拂ひ、「一子を殺し、一一心なき我誠忠を表はすも、悴

が孝心舅の情、命を給はる返禮は、再び結ぶ聲舅」「ホ、、、正清とてさの如し、大内義廣征伐
 に、小坂部が討死と記録に残さば、松太郎舅の追福此上なし」と、聞くよりにつこと打ち笑み
 て、「ハ、仁有り義有り、味方は名のみ相果つる、兵部が末期の置土産、笹市に與へし太刀こそ我
 重代、北辰の二字を彫りし、武運守護有る七星丸、萬夫不當の正清に、劍の威徳加はりて、和
 漢に美名を残されよ。此上頼むは末子三郎、小坂部九郎音近と、我が若年の名を繼がせ、厚恩
 有る久吉公、御子孫の時に至り、スハ御大事と見るならば、粉骨盡し忠義を立てなば、草葉の
 蔭より悦ぶと、傳へておくりやれ聲殿」と、末期の一句孫娘、「ナウこれ今が別れか」と、歎けど
 更に其かひも、鼠が告ぐる螺太鼓、遠音に響き物凄し。加藤が郎等木村和田藏、かけ來つて
 大音聲、「大内が本城山口は、要害堅固の絶所なれば、數日の對陣時を待ち、計り知つたる海手
 より、足利慶覺西國へ、下向と流布せし六字の旗、武器を隠せし兵船に、押立てく、押し渡る、
 味方は必勝破竹の勢ひ、急ぎ御出馬然るべし」と、申し捨てゝぞ引返す。「一大事」と左衛門宗
 貞、劣らぬ正清雙方が、忍び装束脱捨つれば、肌には小具足身をかため、勢ひ込む軍場の出
 立、「やおれ正清慥に聞け、久吉樂毅が術をなすとも、味方は臥龍が備へを立て、只一戦に追
 ひ散らさん。早く歸つて猿冠者が、首を堅固に用心せよ」「シヤ案外なる非禮の過言、山口如き

の破れ城、正清先陣蒙らば、一搦みに拉いでくれん、吠頬かはくな左衛門」と、互の廣言雙方が、詰めより詰めよる勇者と勇者、女房々々は正體も、涙ながらにいたはれど、枯るゝ老木と諸共に、惜しや翠の松太郎、あへなく息は絶えにける。わつと一度に聲立てよ、妻が歎きに目もやらず、互に睨みあひ聲同士、又も聞ゆる攻太鼓、哀を跡に三つ羽の征矢、射るが如くに兩人は、戰場さして三重出でて行く。

九册目

「ソレくくくやつとせい、こちの殿さま軍を止めて、軍慮帷幕に廻らす物は、間のおさへの盃ばかり、吸付くお敵に夜軍を、誰も来て見よかしのえ」「オ、出来た」と大將の、譽める卷舌大隅が、肩に御手を掛綱形、「イヤナニ、こりや軍兵ども、切ツつはツつの軍せうより、色と酒とが浮世の味。ナウ大夫」「サア其御機嫌は嬉しいが、大事の御身を酒びたし、ちつとはおひかへ成されませ」「ハテ異見とは堅いやつの。サ汝等も此盃で一つ呑めく、ソレ」と投げやる大蓋を、笠に戴く軍兵ども、「へ、有りがたい大將の御下知背かず、察兵衛芋六、まあ身どもが」と一息に、「呑んでの風は荒けない風だなア」「何だそりや口合か、ドレく是へ注いで

くれ。風で夜討と定めたり、めたりぬる夜の睦言に、むつ言に目出たうさむらひける。べんべんがべれくくくべんくくくだらりの底抜ども、さいつ押へつ、「ハ、、、イヤコリヤ面白いはく、ま一踊をどろで無いか」「ヤア、さらば爰らで鎧武者の、腑抜け踊が所望ぢやが、合點か」「危い軍は取置いて、好きな酒をば呑み次第、敵の首を討たうより、鎧兜を打殺し、討死せうより呑討ぢや。ソレくくくくくそこらでせい」夢中に成つて踊の最中、苦り切つたる出海左衛門、かけ入る目先の酔ひどれども、投げのけ突きのけ打通れば、一座の興も酔もさめ、底氣味あしく尻込みする、士卒をはつたと睨み付け、「追つけ寄せ来る敵を引受け、馬鹿々々しき此の有様、銘々持口大切に、早行けく」と鋭なる、詞に皆々顔見合せ、「扱ても堅い御家老の、折々しかつい御異見に、さつぱり困つた鎧武者」と、あだ口々へ出でて行く。左衛門無念の膝突つかけ、「再度の戦ひ久吉が、武威に碎かれ思はぬ敗北、口惜しながら君を誘ひ、本城山口へ引籠り、軍議評定せんものと、飛歸りしに御陣の有様、酒色に耽り淺ましき御身持、油断とや申さん、不覺とやせん。サ、、、早く御用意々々」と、忠義の一途出海が、諫むる詞もしら川に、夜船潜ぎ出す酒機嫌。「ム、熟醉に正體なきは、ホイ、是非なし」と屈託を、我身一つに主思ひ、見聞くにつらき大隅が、「何を言うても此のお姿、後程お目が覺めてから、夫まで

しばし御休息」と、いふ顔眺めて「いか様はや、西施を五湖に沈め、楊貴妃を馬嵬に斬る國の敵はム、成程々々、差扣へる内折入つて、そもじに尋ね問ふべき仔細、暫くあれへ」に何氣なく、「お目が覺めたら呵られうか知らねども、黙止がたない仰、然らばこちへ」と先に立ち、伴ひ別間へ入りにける。折ふし陣門打騒ぎ、「眞柴家よりのお使者なり」と呼れば、大將義廣枕を上げ、「其使待ちかねたり、早く通せ」もめれんの下知、呼び次ぐ内に加藤正清、軍中の姿引きかへて、長上下も優美の骨柄、目禮して上座に著き、「珍らし義廣殿、及ばざる戦ひに、自己の勇威を慢じて拒み、勅命に敵せられしは、滅亡を招くにあらずや。漸く利害に心付き、降參を望まるゝ條相違なきや、相糺せよとの上意なり」と演べければ、義廣廻らぬ舌打して、「ホウ誰かと思へば加藤氏、御苦勞々々々。始めはおのれと我を張つたが、久吉の軍配、箠下の強勇ヤモ厳しい物、叶はぬ〜。所で降參仕る」と、袴の褶のおれそれも、居すまひ悪しく平伏有る。始終窺ふ出海左衛門、つツと出で、「ヤア舌長なり正清、久吉實に勅を重んじ、忠勤を盡すぞならば、禮儀の使者を越すべきに、人も無けなる今の演舌、大内の家は御先祖より、天子へ背きし事もなく、他國の軍馬を領地に入れず、汝一旦の運に乗じ無禮の一言、我國に聞き用ひる者有るべきか。早く歸つて寄せ來れ」と、筋をあらゝけ云ひ放せば、「ム、ハ、ハ、ハ、ハ、仁慈を以ての御使者なる

に、恩を仇なる汝が返答、此方より望むにあらず、降參は心次第、併し正清使して、其返答では歸られぬ。主従とくと評定して、命にかけがへ有るならば、勝手々々と大膽不敵、臆めず一間へ打通る。跡打見やり出海は、無念涙をふり拂ひ、「御先祖代々武威を落さね家筋も、かばかり敵に侮られ、降參との思し立、君には天魔が見入りしな、但し御所存有つてか」と、怒り歎いて問ひ詰むれば、義廣は答へもなく、あさりの弓に大雁股、番ふ日當は庭前の、松の下枝かつきと射切つてほやく〜笑ひ、「左衛門々々々、我心底はアノ一枝」ム、松の木の下の久吉を、まつ此の如くの御弓勢、ハアおでかしたされた、夫でこそ我殿」と、悦び勇めば、「ハレヤレ夫は悪い合點、邪魔になる下枝を、取つた木振を見たがよい。久吉へ降參して、免し無ければあの松の、木篇は直に死罪の道具、作りを分ければ公と讀む、公の磔柱」といふ事、木に曝されても軍はせぬ氣、長い物には負けいぢや」と、又も手酌に續け香、呆れ果てたる左衛門は、胸にとつくと極むる覺悟、鎧脱ぎ捨て座を占めて、諸肌くつろげ物をも言はず、引抜く短刀腹に突立て、「エ、見下け果てた腰ぬけ殿、さは知らずして肉身の、悴を殺せし忠節も、皆むだ事と成りけるよな。君辱しめらるゝ時は、死をもつてする臣下の道、命を捨てて諫める詞、少しは御用ひ下されかし。數代傳はる家國を、敵の馬蹄に穢さん事、口惜しや奇怪や」と、怒りの涙はらく〜、

實も大内の兩家老、類稀なる忠臣なり。始終洩れ聞く加藤正清、歩み出で、「遠は出海尤の切腹、義廣の降參は勅命を守る所、別心なき條見届けたり。是こそは宮島にて、衣笠三位と名乗りし賢者、和を計らひし自筆の短冊、何ぞの御用に立つべき品、和睦の印」と手負に渡し、「イデ此通り言上」と、一家の義理をにべもなく、心に残し立歸る。手負は遙かに見送り、「殿御計略の降參、誠と心得歸りし正清、此上味力の手配りはな」「ホ、ホ、ホ、よくも悟りし左衛門宗定、降參と油斷させ、敵の不意を討たん爲、懦弱と見せし我が本心、察せし汝も空腹ならん」「ハツハ、主従心一致の上は、本城へ馳せ歸り、諸卒を引連れ逆寄せん。是まで思はぬ敗軍の、お家の寶失せたる故、最前奥にて大隅が、父母の形見と見せたる短冊、ナコレ此守りこそ詮議の緒、加藤が渡しし短冊と、引合して御覽あれ」「オ、豫て知つたる其守、合點行かずと大隅を、留め置きしも心有る、衣笠三位が自筆の短冊、彼が工みと知りながら、武道の意地と久吉に、銚先を争ふも、勘合の印紛失故、違勅の咎を受けまいと、天理に任す家の興廢、眞柴を破るは今宵の一舉、ぬかるな左衛門」「合點」と、心の勇みに屈せぬ疵口、腹帯しつかと出海は、山口指してかけり行く。様子立聞く大隅が、走り出るより取纏り、「名をさへ知らぬ父母の、形見の守は何にもせよ、お胎のやよは産月の、けふかあすかと顔見るを、樂しみ

し甲斐もなう、二世の君には疑はれ、何とて生きて居られうぞ」と、覺悟の刀しつかと押へて、「ヤレ待て女、腹な悴がかはゆくば、コレ此の守を添へ、幼少にて別れし親を尋ね求め、我に知らさば變らぬ契り、時節を待て」と手に渡す、守に込めし大將の、さすが情の詞には、こよろ弱りて泣くばかり。「いで曠軍の用意せん」と、目には別れの一票、ふり捨て奥へ入り給ふ。名残惜しさも女氣に、心引かるよ小車の、我身につらき憂き思ひ、座を立ちかぬる折こそあれ、柵外響く鯨波、遠見の軍卒馳參じ、「正清和睦を受合ひしも、味方の虚を打つ敵の計略、西島の門戸兵衛か悴、兒島元兵衛政次が案内にて、岩國山の間道より、勢を廻して山口の本城を十重廿重におつとり巻き、出海殿の歸路を立切り、不意を打つて陣外まで、大軍押し寄せ候ふ」と、云捨てよこそ引返す。障子をさつと冠者義廣、怒りの面色髪逆立ち、「謀るく」と思ひしに、眞柴が智謀に陥入りしな。此上は本城の寄手の奴原一拉ぎ、馬引けやツ」と大音聲、心得引出す月毛の駒、ひらりと打乗り文餘の鐵棒、苦も無く打ち振る四天の勇、「我身も俱にどこまでも、離れはせじ」と大隅が、縋る手綱を振放し、「ヤア戰場へ女を召連れ、我を愚將と誹謗さするか。アレく寄手も込み入つたり、早立退け」と仰の内、どつと駈け入る上方勢、得たりと鐵棒追取りのべ、五人七人一みしやぎ、怒れて遁け散る先手の勢、駈立て蹴立て馳出

づる、君の御跡おほすみが、危さ怖さ別ちなく、猶も慕うて、三重 迷ひ行く。

道行山路の轡蟲

岩たよむ、嶺の嵐も秋暮れて、物騒がしき氣色かな、遙けき山路羊腸たる、峻岨を凌ぎ義廣は、思はず爰におちこちの、たつ木の蔭も白雲は、別け入る跡を埋むかと、心細さも只一騎、残月に鞭を揚げ、暫しは曇る身なりとも、何時まで斯くは有りなんと、勇む驛路の鈴の音、ふり返り見る陣雲も、やよ收まりて靜かなり。義廣馬上に頭を廻らし、「樹間の殺氣は猿冠者が、爰にも兵を伏せつるな。シヤ何程の事あらん」と、獨言して行く先の、茂みに秋の聲ならで、金鐵皆鳴る鎧武者、「落人遣らぬ」と特めいたり。「ホ、、しをらしよやさしや」と、例の鐵棒振上げて、はつたりちやうくきりぐす、我をまつ蟲鈴蟲も、蹄にかくる轡蟲、露の玉蟲消えぐに、鳴く音残して蠢勢、跡に見捨てて行くとなく、心急るよ岩波の、苔の下行く水の音、難所の渡早瀬川、「ア、此駒よく、如何はせん」とイむ内、何處よりかはしる鳩の、兜の上を二三遍、廻りくく谷を越し、飛行くさまを見やり給ひ、正八幡の遣はしめ、鳩の行くへは神明の、導き給ふ浅瀬ぞと、一鞭くれて跳り越え、劉玄德が檀溪の、例も斯くと三重いざし

ら菊や小萩原、薄の穂にも落人の、跡を慕ふや女郎花、走著いたる大隅が、「エ、あの山陰を廻るまで、お姿見えさせ給ひしに、いづれへお出でなされたぞ、義廣様我君」と、呼べど答もなく鹿の、俱に夫戀ふ聲ばかり。「エ、聞えませぬ殿様、道さへしらぬ山中に、捨てられし身のつらさより、お胤はいとさう無いかいなう。思ひやりなき胴慾も、印の守父母の、守は無くて筐こそ、仇」と投込む谷水の、あはれを告ぐる身の行方、誘ふ嵐に吹送る、遠山松の葉隠れに、「義廣遁すな生捕れ」と、君を取りまく木の葉武者、「アレくひあいや只お一人、人も梢も紅葉して、空に焦ると我思ひ、渡る瀬もなき谷川の、狭き流れに程もよく、さしかよりたる古木の松が枝、二世三世、縁をからみし葛城の、糸の岩橋中絶ゆる、契りと知らで一筋に、帯引きしめて攀登る、女心の一念力、懸れる苔に踏みすべり、足手もさける花ならで、葛の錦をさがにの、いともあやふし三重。

十冊目

山又山更に幽なる、秋の調や琴の音の、御簾の隙もる殿造、梢の錦立田姫、衣織る家とも疑はる。風も悲しむ戦場より、島の冠者義廣は、したふ敵を追ひ散らし、谷川づたひ白鳩の、跡を求め

し此の家の軒、「我を導く白鴛の、爰に至りて止まりしは、ハテいぶかしき館の構へ、聞ゆる調は想夫戀、いかなる人の閑居ならん。我も豫ては好ける道」引合より取出す名笛、吹きしめして琴の緒に、和する祕曲は戀々と、斷腸の聲をなし、呂律は風に飄り、谷の水音松の風、心してもや吹きぬらん。内へ洩れしか琴の音も、絶えてひそく、婢子女が、「ナウ雁金、人里遠い此山中、變つた音色ぢやないかいの」「オ、名月の云やる通り、狐か但しお姫様の琴の音に浮されて、山の神が來たので有る」と、おづ／＼二人は差覗き、「今の笛はあなたかへ。爰へはどうして、ア、紅葉狩の御趣向、惟茂様でも有るまいし、女を鬼と取違へ、必ず聊爾なされな」と、ざれも云寄る詞の品、「ホ、ウ一陣の敗將、少しの勞休めん爲、暫時の宿り御免有れ」と、駒繫ぎ捨て大やうに、しづく／＼通る大名風、二人は頓て押隔て、「ア、顔に似合はぬあつかましい、後室様の留主の内、山の神でも天神でも、内へはならぬ」と支ゆれば、「ナウ暫く」と御簾の間より、留むる蘭奢の一薰り、振の姿もいと清く、月の洩れづる其風情、「女ばかりの山住居、宿こそならずとも、音色やさしき笛竹の、ゆかりは暫しの御休息、いざこなたへ」に女共、「サアお通り」と媚めけば、「心有る琴の調、主の御芳志忝し」と、伴ひ入る顔見合す顔、「ヤアこなたは」「あなたは日外宮島にて」「實も逢見し啞の女中、岩國屋といふ町人姿、

誠は大内、アイヤサ落人となる我身の上、迷ひ來りし山奥に、思ひも寄らぬ閑居のしつらひ、ムウ導く鳩の宿といひ、此家はむざと動かれず」と、座に著き給へば姫は悦び、「ほんにあなたは落人様、軍にお負け遊ばして、たつたお一人、ようまあお負けなされたなア、是程嬉しい事は無い。名月、鴈金、何をうつかり、追付け和子のお歸り時」明エ、迎ひに行けでござりますかえ、日頃のお噂ナウ鴈金、あなたのおふり合點かや」應皆まで言やんな請受つた、山の神様おゆるりと、そこらを宜しう。ナウ申し、お頼み申上げます」と、笑を残して二人連、出づる間を待ちかねて、「お懐しや」と縋り付く。すけなくも振拂ひ、「假初の戯れも、互にかはる此姿、迂闊けな事仕給ひそ」と、咎められては今更に、恥かし振の袖几帳、「姿形は變るとも、名にしおほちの君様と、知らいで仇に戀草の、種蒔き初めてよいものか。焦がれくしけふの今、床しいお顔みち年の、花より稀の逢瀬ぞや、過ぎこし方の契りをも、忘れ給ふは胴慾」と、鎧の袖に縋り寄り、涙の露は緋緘に、朱の玉散る如くなり。「ホ、ウ恨は理さりながら、心得がたき山住の、由緒を聞かねば心の疑念」「スリヤ自が身上を」「承知の上にて末の契約」「申し上げねば」「契りも是まで假の宿、とくと思案を致されよ。後刻」とばかり云殘し、心をおくに入り給ふ。姫は始終に胸迫り、明けて言はれず明さねば、二世の契も薄紅葉、はかない縁に成

らうかと、かこち涙の折からに、えいさらさらくえいさらく此車、眞紅の綱手引く婢子女が、紅深き上の衣、木々に照添ふ艶姿、錦帳かけし輦の、内より出づる此家の老女、そぐはぬ朱の小打著や、袖に抱きし稚子は、並々ならず見えにける。「オ、皆大儀々々、大事の和子の御痘瘡、紅葉の色は出物の藥、山あけから水もつ、かせ口に成つた婆が嬉しさ、オ、姫君にも嘸お待ちかね。ヤアえい」と石投を、上るひあいさ心得て、「和子様是へ」と抱取る。姫も涙の色目を隠し、「オ、伯母御前今お歸りか、若の機嫌もよい様子。雁金、最前の品こなたへ」と、仰をきくの一枝は、「此谷川へお留主の中、流れ寄りしを和子様へ、お慰に」と差出せば、「オ、是はく彭祖が保てし八百歳、御壽命目出たき其の一枝。ア、昔の若い折ならば、祝うてばよも舞の一手、ホ、ホ、有られも無い事言うた、是も少しは菊水の、酒の科ぞと赦し給べ」「イエく常から聞いてをりまする、昔は舞のお上手と、名を取つた後室様、是非に御所望姫君の、琴の調も若様を、祝してちよつと」とほのめけば、「ア、譯もない事云出して、迷惑ながらア、儘よ、若やいだ此姿、必ず跡で笑ふまいぞ、扇がはりは此菊の」枝取持つて立上り、「オウオ和子もにこくをかしい筈よ。唄そも扱も此君は、誰人の子なるぞ、天下一人の花の兒よく、眞柴を除けて、連れておりやりにや上方へ、吉野初瀬の花よりも紅葉よりも、い

としき方は此君の、齡は千代も變らじ」「さても見事お上手」と、口々ほむるを耳にも觸れず、「ハテ心得ぬ琴の音色、常に變りて殺伐の、調子は此家へなう姫君、妾が留主に何人ぞ、男子でも参りしか」と、問はれてはつと心の驚き、傍から引取る名月、「ア、イエお留主に來たは其菊ばかり、花のお蔭で珍らしい、後室様の舞振を、今一度見たい。雁金、秋雨、木の實でも草花でも、流れてこぬか」と谷川へ、「ま一つこい婆に遣ろ、イヤアノ後室様へ上げます」と、昔咄しに紛らす氣轉。「オ、何やら流れて來るぞく、是はめでたい松さうな、後室様へ」と搔き寄せ、「コリヤ何ぢや守袋が掛けて有る、御覽じませ」と差出すを、老母手に取り、「此裂は花兎、ハテ心得ず」と紐とくく、開けば中に覺えの短冊、「夏の夜の、夢路はかなき跡の名を、雲井に上げよ山郭公。此歌は夫の辭世わらはが手跡、此谷川へ流れ寄りしは、ふしぎく」と打守り、いぶかる氣色にいぶかる姫、「聞覚えし其歌の、爰へはどうして婢ども、なほも流れに氣を付きや」と、さし圖に皆々寄り集ひ、「も一つこい姫様の、お待ち遊ばす川上に、あれ見や今度は美しい、大きな物が流れてくる。あれよく」とどよめく内、宿世の縁か川岸へ、流れ寄りしを見て悔り、「ヤア疵だらけの女の死骸、これはく」と立騒ぐ。老母もそぞろ氣にかより、「捨身か但し人の所爲か、何にもせよ死骸を岸へ、早うく。

血汐の穢れ若君に、あやかし有つては尙大事、姫君俱に一間へ」と、氣を配る内残りの娘、こはく死骸を引上げたり。老母はおつ立ち疵口より、六脈看相とくと改め、「早事切れし急所の痛手、所詮存命叶はねども、一度蘇生させし上、様子を尋ね見ん物」と、錦の袋取出し、押戴いて死骸の肌へ、納むる寶の奇瑞にや、服せし水を吹出し吹上げ、うんと一聲、「ソリヤこそ」と、秋雨鴈金耳に口、「女中様、女中様いなう」と呼び生くる。無慘やな大隅が、かひなき魂も夫したふ、愛著心に引かれ来て、息吹きかへし目を開き、「殿様々々、我君様」と、死んでも忘れぬ煩惱の、迷ひノて這ひ廻るを、「コレく女中、心を慥に尋ぬる仔細、此守りに入つたる短冊、持主はこなたか」と、手に持たすれば探り取り、「エ、親の形見の此の短冊、見るに付けても恨めしい、是故にこそ捨てられて、早瀬を渡る鳥かづら、二世の縁まで切れ果てよ、岩に裂かれし身の苦しみ、八寒地獄劔の山、焦れ死ぬるは厭はねど、ま一度逢ひたい義廣様、此身ばかりか腹な子も、十月の今に持孕り、非業に殺すが可愛やなア。皆様のお情には、死んだお胎を切りあばき、身二つにして其跡の、亡骸よきに頼み上げます。萬に一つも生れ子の、お腹で無事に有らうかと、そればかりが今際の樂しみ、顔見ぬ先に死ぬ母が、心を推量してたべ」と、苦しき中に子を思ふ、親の心の三瀬川、浮む瀬さらに見えざりし。扱

はと老母が胸は板、「守りを添へて別れし娘、宿せし種の初孫も、俱に殺すか不便や」と、目には泉の涌きかへる、心のせつなさ義廣に、縁有る様子名乗りもならず、せめてと千々の思案を定め、「オ、それよ、庭に祭りし此石は、大内家に由縁の名石、先祖の守護神子孫の安産、守りは外に泣入りし、手負を取つて石上へ、假の産家と抱き寄せ、血脈にこぼす血の涙、雨と注ぎて清めの手水、猶も寶の靈験を見せしめ賜へ」と額に當て、心に願ひ掛けまくも、神に祈りの眞實心、名家を助くる御奇特、空にありく白鳩の、伸羽ゆたかに飛廻り、擁護の神力平産の、初聲高く聞えける、末の榮ぞいちじるし。老母は覺えず聲を上げ、「ハ、ア有りがたき寶の奇瑞、傳へ聞く右大將頼朝公の御公達、石上にて平産有る、住吉の誕生石、氏はかはれど男子の出生、吉例目出たき水子の榮え、隠すにも隠されぬ、此ばよが孫ぢやはいなう」「エ、そんならわたしが」「オ、證據の歌は母が手跡、家來に預け其後の、便に送りし形見の短冊、廻り廻りてけふの今、逢ふと其儘死ぬる娘、安堵の往生させたさに、今まで包みし名乗合、眞實眞身の親子ぢやはいなう」「チエ、忝い我君様、守りの主が知れたはいなア。此事を申上げ、未來の縁が結びたい、母様に問ひたい事、我子は彼所にぞ。モウ目が見えぬ、息有る内に殿様に、逢うて此子が渡したい、逢ひたい見たい」の其人は、爰に有りとも知らぬ火の、餘所に心をつ

くしがた、名のみ残して消ゆる身に、母は取付き、「可愛やなア、望有る身の悲しさは、可愛い娘を三つ四つで、いつを逢瀬の生別れ、今死ぬる期に母が手へ、戻つて来たも因縁かや。長の年月行方さへ、尋ねぬ母を明暮に、さぞや恨んで居たで有る。夫子の名残云ひたい事、岩間に朽ちる秋の草、苔の雫と成つたか」と、取亂しては正體も、涙々に誰々も、歎き數添ふばかりなり。哀れを告ぐる鐘ならで、袂に響く攻太鼓、老女は心つくくくと、傍に聞居る二人の女、何思ひけん目くばせし、奥の間さして駈け入つたり。「ハテ怪しや、此家を取巻く寄鼓、我身の凶事か何にもせよ、姫君々々、春姫様」と、呼ぶ聲共に走出で、「コレく申し、今まで付添ふ三人の女は、久吉方の廻し者、若を奪うてどつちへやら」「ヤアくくく、それは」とばかり氣を逆立ち、かけ出す 懐 赤子の泣く聲、足手まとひ、「エ、くくたばかられて信若君を、奪取られたり口惜しや」と、立つて見居て見無念の齒ざり、猶もかけ行く後の方、「ヤアくくく、江州比良が嶽の城主、柴田修理進勝家の後家小谷の方、大内島の冠者義廣逆意の證跡見届けたり」と、立出で給ふをはつたと睨め、「我を小谷と呼びかけて、逆意有りとは何を以て」「ホ、ウ近會宮島にて、絹笠三位と勅を偽り、表は和睦内心は、好みを斷たん汝が女計、其時加藤へ送りし短冊、柴田が辭世とまがはぬ同筆、其守り故大隅が、不便の最期蘇生して、平産守る寶の奇

瑞、在所は是」と庭に飛びおり、件の大石かろくと、取つて引きのけ、「土中の印、再び我手に入つたり」と、につこと笑うて立つたる所へ、又も此方の谷蔭より、「小田三代の武將信若君、眞柴久吉守護せり」と、抱き叅らせ出で給ふ。お供に付添ふ以前の妣、「我々は福島小西が妻女共、此君様のお迎ひに、疾くより入込み奪取つたり。柴田氏の奥もじ様、我慢を止めて日月の、御旗を返し給ひなば、信若君は四海の武將、春姫君は大内家へ、和睦の印お取持、生れしお子はお世繼様、三國一の大将の、捌きは斯う」と諫むれば、聞く無念さも遺の老女、思ひ定めてどつかと坐し、「信若君に籠略なきは、其身の冥加恩には被ぬ、わらはが恨は夫の仇、春永薨じ給ひし後、久吉に心合はざる我夫柴田勝家殿、時にあはづを餘所に見て、比良が嶽に引き籠り、互に争ふ運定め、終に頼みもなつこだち、朽果て賜ひし修羅の妄執晴さんと、我も自害と云ひ觸らし、年月謀りし念願も、今ぞ叶はぬ身の終り、久吉仁義の心あらば、若君姫君兩君の、納りよきに計らへ」と、覺悟の刃を止むる姫、「是まで厚い御介抱、御恩送りは此の水子、我身にかへて養育も、成らう事なら存らへて、教訓頼む伯母御前」と、涙の袖を振放し、「ナウ意地を立つるは武の表、夫へ云譯兩將の、疑ひ晴す自害ぞ」と、突込む刃は段々壞、折れて遙に飛散つたり。「ホ、ウさこそく、日月の旗懷中有れば、其身に劍は立たざる筈、死を止

まつて夫の菩提、君の御先途見遂けるも、天照神の神勅なるぞ。違背有るな」と久吉の、切拂うたる頭の霜、「一句に服する餞別」と、天子の御旗はた竿に、さつと掲けたる月日の光、久吉重ねて大内に向ひ、「互の寶失せし故、云合せずして暫しの確執、小田の正統信若君を守奉れば、今より水魚の交たらん」「ホ、ウ我とても白鳩の、導く靈驗神慮の和平、爰に納まる軍の始末、義廣の明察違はぬ兩家の因」此家をさして「御注進」と呼はり来る雁金は、お傍去らすの會呂利が女房、「御兩家和睦太平と、諸軍も勇む歸陣のお先、塞ぐは仁木武者之助、久吉公に見參と、無體に軍を始むる結構、例の荒者其儘では、敵も味方も内證軍、マアお知らせ」と訴ふる。「ホ、仁木が僥忽の合戦は、互に和睦を知らざる故、義廣向つて制すべし、久吉殿には跡より」と、召馬引寄せゆらりとりの門出せし、其大隅が亡骸を、よきに印の石の下、傾城塚とも末の世に、呼ぶ追善や御祝言、蝶花形は春姫の、輿入國入若君を、守護する御武運久吉公、見送る老の一奏。千代に八千代を細石、巖に残る涙の種、姥が窟やもみぢ葉を、踏分けてこそ 三重下山ある。

十一冊目

山口の絶所を塞ぎ、久吉の歸路を立切る武者之介、先を争ふ陣頭に、自ら進む其勢ひ、只烈風の如くにて、群がる中へ割つて入り、縦横無盡に突廻る、突き槍先當りかね、引色立てと諸軍勢、四方へぱつと逃げ散つたり。かよる所へ加藤正清かけ來り、「コレ物に狂ふか武者之介、寶の失せしは柴田が後家、小谷の方が爲す所、事明白に分かりし上、眞柴大内の和睦調ひ、目出度き歸國を支ゆるは、いかなる所存と云はせも立てず、「ヤア和睦とは云ひがひなし、たとへ主人は承知有つても、此仁木は不得心、勝負も決せず此儘に退いては、西島にてつがひし詞は反古、一旦合戦と極めし心は金鐵。サアこい勝負」と詰め寄る所へ、大内義廣、出海井上引連れて、後れ駈せにかけ付け給ひ、「ヤア武者之介、久吉公は稀代の名將、小田の正統信若君を守り立てんと有る誠心を感じし故、弓矢の義を捨て和睦の上は、眞柴大内は水魚の因、但し某が詞を背き、譜代相傳の恩を忘れ、此義廣に弓引くか」「サアそれは」サアくくと理に詰められ、流石の仁木も屈伏したる其折から、小坂部和三郎大友を生捕つて、家來に引かせ出で來り、「寶を盗み讒を構へ、眞柴大内の兩家を亡ぼし、天下を奪はん下工み、殊に新左衛門は俱不戴天の親の仇、討つて本望遂げられよ」と、聞くより井上飛上り、三郎が首討落し、「惡人誅罰せし上は、互に目出たき御歸陣」と、心解けあふ諸軍將、兩家の因萬歳と、野山に滿つる百萬

騎、皆一同に祝しける。

蝶花形名歌島臺終

御所櫻堀川夜討

第一

恩は春のごとく、威は虎のごとく、訓は父のごとく、愛は母のごとしと、李嚴を誑ひし史民の詞、今此時に當れるかな。六十餘州の總追捕使、右大將頼朝卿、仇を討つこと爐上一點の雪のごとく、流れをたどす氏の再興、世はうごきなき鎌倉御所、威嚴四海に凝形せり。されば兄に宜しく、弟に宜しうして國人を教ゆといふ。御舎弟九郎判官義經を都にするおき、兄弟東西に立別れ、民を撫育ましますば、御中水魚の如くなるべきに、月明かなりといへども、光を雲の覆ふがごとく、梶原父子が支へによつて、忽御中吳越とへだたり、穩ならぬ世の聞え、萬民心意を惱せり。重ねて討手を上さるべしと、召によつて在鎌倉の諸大名、問注所の廣庇に相詰むれば、頼朝仰出さるよは、「扱も義經色に溺れ酒に長じ、禁裏の勤を怠り、我儘の行跡、剩へ平の時忠の婿に押成り、平家の連判狀頼朝見ようす、鎌倉へ下せと再三いひやれども、兎角事によせ隠し置く心底、景時が申すにたがはず、一定叛逆に極つたり。所存有れば名を指い

て、誰參れと下知はせず、覺有らん者討手にのほり、義經が首取つて高名せよ。恩賞せん」と宣へども、「恐ろしく、摩利支天の再來といふ判官殿の御討手、我々が力に及ばず」と、目を見合するばかりにて、誰上らんといふ人なし。こらへ兼ねて梶原平三景時進み出で、「斯様の時の御役に立てられん爲、身に過ぎたる莫大の所領を給はりながら、名を指いて誰參れと御詫なきは、恐れながら如何なる御所存、お請申さぬ方々一々見知り置く、此返報の時節待たれよ」と睨め廻し、「ヤア人までもなし平次景高、汝討手に罷上り、御心を安め奉れ」畏つて領掌す。末座に候ひし澁谷土佐坊昌俊、「南無三寶、彼奴を討手に上せては、義經公の御大事」と分別し、御訴訟々々と聲をかけ、御座に向ひ、「御兄弟の御中と申し、歴々さへ口を噤ぎ給ふに、我等式の御討手と申すは憚りながら、某罷上り、御首を給はらん。さりながら、事あたらしき申し事なれども、木曾の強敵、平家の大軍を一時に責亡し給ひしは、君の武威全き故とは申せども、一つは義經公御身を捨てよの御働、酒宴遊興に溺れ給ふは、實は御年若き故、よりより御諫言を加へ給はど、直させ給はで候ふべきか。又平時忠の婿に押成り給ふ事、尤彼時忠平家の何某とは申せども、降參を聞き請け、命を助け置かるよ上は、娘を召さるよ程の事は、さして御誤とも申されず。就中平家一味の連判狀」と言はせも立てず平三景時、「ヤア詞多し

昌俊、判官殿の叛逆、事極まつて評定の上仰付けらるよ討手、御邊は何と聞く、其咎をしらためるに、和殿風情は頼まず」と一口に言ひ消せば、居丈高に成り、「是梶原殿、其評定の衆は誰々、其人こそ心得ぬ、斯くいふ昌俊は金丸の昔より、累代源氏の御家人、鎌倉殿も主、判官殿も主命によつて主の討手、大體で向はるべきか」「ヲ、其詞で知れたく、遙々都へ上つても、誠らしく言譯を聞かば、首を給はるまでもなく、素手振つて歸るは知れた事、いやたど討手は景高に仰付けらるべし」と、遮つて申せば膝立直し、「ならぬ事」。昌俊が望みかよつては、頭が舍利に成つても餘人は上さぬ、義經の御首は、此昌俊が給はる」と和殿しかと取るべきか」「くどいく」「ハア、天晴の忠臣、然らば君の御心を休むる爲、一紙の起請文違背は有るまい。ヤア景高、君にかはつて文言を望むべし。誰か有る、熊野の牛王、硯を昌俊に參らせよ」と、退引ならぬ手詰に成り、よし／＼誓詞は書くととも、神は非禮を請け給はず、我が一命を忠義にかへ、都に上つて義經の、御爲あしくは計らはじ」と、些とも辭退の色目なく、景高が望むに任せ、筆押取つてさら／＼と、一紙の起請かくばかり、「謹しんで申す起請文の事、上は梵天、帝釋、四大天王、閻魔法王、五道の冥官、泰山府君、下界の地には伊勢天照大神を始め奉り、伊豆、箱根、富士、淺間、熊野三所、金峯山、鎌倉の鎮守鶴が

岡の正八幡大菩薩、氷川、鳥越、根津權現、總じて日本の大小の神祇、冥道請じ驚かし奉る。殊には氏の神、全く昌俊討手に上り、義經の御首を給はらずんば、骸を堀川の御所に埋み、再び鎌倉へ歸るべからず。此事偽有るに於いては、此誓言の御罰を蒙り、來世は阿鼻大地獄に墮罪せられん者なり、よつて起請文此の如し。文治元年今月今日昌俊」と、筆を振うて書きたるは、身の毛もよだつばかりなり。頼朝御機嫌なよめならず、「頼もしき土佐坊が心底、假へ都の土と成るとも、子々孫々の末までも所領を與へ、些か疎略有るまじ。平次景高も一所に上り心を合せ、義經に出で逢ひ、二ヶ條の非義を糺し、越度に極らばゆめくいたはるべからず。斯く言はど人々の我を情なしとや思ふらん、叛逆野心有る者は、兄弟とてもゆるさずと、我より手本を顯して、下萬民に訓ゆる事、源氏の威光長久のしるしぞかし、時節を移さず打立つべし」と、沙汰こまやかに御説有り、簾中に入り給ふ。治極つて亂に入り、亂極つて動きなき、賑ふ民の鎌倉山、嶺に立つ木や這ふ草も、隨ひ靡かぬ三重方もなし。鎌倉殿の詔意を受け、直に打立つ土佐坊昌俊、梶原平次景高、上使の威勢かさ高に、路次の行列美を盡し、夜を日に次いで東海道、伊勢路も跡に水口や、石部の宿の本陣に、泊り賑ふ勝手の混雜、料理拵へ俎板の、音もてきく亭主が馳走、

手をつくしてぞもてなしける。相役といひ、心へだてぬ昌俊景高、家來番場の忠太諸共、打寛いで奥座敷、勞を晴す折こそあれ、取次の侍罷出で、「平の時忠様、家來鮫島藏人を召連れられ、密に御逢ひなされたき旨、通し申さんや」と伺へば、昌俊聞いて眉をしわめ、「是さ景高、此度我君判官殿に御咎は、則ち時忠父子の儀なるに、其時忠是へ參られしとは訝しよ」「オオ不審尤、彼時忠卿とは、某かねて懇意の中、折入つて頼む仔細、先達てあらまし申遣せども、出合へば幸ひ、貴殿にも引合せ、打寄つて内談せん。それく忠太、案内せよ。是へ通せ」と、いふにしたがひ立つて行く。さとき昌俊、詞のはしぐ聞取つて、「ホ、ウ何かは知らず、内談とあれば聞内、しかし旅づかれか、何とやらしきりに心地あしければ、座に列なる事思ひもよらず、貴殿が様子を聞かれば、某が逢うたも同然、無様ながら病氣の事、御容赦有れ、暫く次にて養生せん。委細は後刻承らん」と、障子押明け入りにけり。忠太が案内に打ちつれて、時忠主従しづくと席につき、「先達て書状に言越さると趣、他聞を憚る密事なれば、上著なき内、篤と内談いたさん爲、參つたり」と宣へば、「是はく御苦勞千萬、此度鎌倉殿の御疑、誠判官に別心なくば、預り置かれし廻文を差上げ、貴卿御父子の首討つて渡されよとの御説、某承るといへども、鹿略にならぬ貴卿の御事、御命に恙なきやうと存する某が一分別、

義經が手に有る彼の廻文、密に奪ひ取つて給はらば、夫を越度に責め付けて、義經に腹きらせ、貴卿御父子の御命は、此梶原が受合ひて助くる所存」と、そやしかくれば、「ホ、それこそ手前が願ふ所、義經が滅亡せば、日比某が心をかくる静も自然と手に入る道理、召しつれし此鮫島藏人は忍びの名人、主従心を合す程ならば、廻文はおろか、龍の腮の玉なりとも、奪ひ取つて渡すべし」と、額と額摺合ふばかり、密々咄、障子の隙間に昌俊が、見るとも聞くともしらばこそ、梶原主従猶すり寄り、しかし大切なる廻文、中々輒く奪はれまじ。但手がかり手だてもありや」「オ、其儀はちつとも氣遣ひ遊さるよな、案内知つたる此藏人、盗み出すは明六日の丑三比、御所の高堀見越の松を目印に、忍んで待たれよ忠太殿。相圖の詞は此方から、番かといはゞ、ヲ合點、忠と答へて受けとらん」それよくと、互になづきあふみ路や、深き工の湖も、「洩らすなぬかるな、同道するも危な物、時忠卿はお先へござれ、此方は勢田へ廻道、必ず見ぬ顔知らぬ顔、氣取られぬやう合點か」と、互の契約釘鎌鏝、念に根つぎの石部の宿、別れてこそは三重。かはる世や、昔は平家の小舅君、今は源氏の大将を、婚に取つたる身の威勢、平の朝臣時忠卿、譜代の家の子鮫島藏人秀氏一人めしつれて、工も深き堀川の、大下馬前にさしかより、「ヤア〜藏人、兼約のごとく、梶原の郎黨番場の忠太が來りなば、日比の大望、必

ず今宵は過ぎれず、手筈を違へな氣取られな」と、主従囁きうなづき合ひ、御門外に立寄つて、「判官殿へ火急に申入るべき仔細有り、平の時忠推參」といひ入るれば、門番の侍飛んで下り、貫木扉ぐわつたりひしめき海老錠の、腰折りかどめ出向ひ、「夜更けての御出、何とも申し兼候へども、折あしき主人の他行」と、聞きもあへず、「イヤサ皆まで申すな、婚義經某が娘京の君は懷妊せしとて、此方へ戻し置き、毎日毎晩九條の里に遊興と聞き、異見の爲に來りたれば、たとへ明日まで相待つとも、對面せずんば有るべからず」と、鮫島諸共入り給へば、跡は御門もしめやかに、拍子木の音いちばやく、更行く空の影冴えて、衆星北に拱し、明方ちかき白壁に、映る姿は影法師か、それかあらぬか、見上げるばかりの大男、頭も足も眞黒に、包む人目のせき拂ひ、相圖と思しく築地の上に、鮫島藏人顯れ出で、「番」と一聲呼びかくれば、「忠」と答ふる相詞、「扱は番場の忠太殿か、刻限違へず能くぞお出で、首尾よう廻文盗み出した。お渡し申す」と一卷を、包む服紗の錦さへ、闇は黒白なやあやふき思ひ、受取りかへる向より、同じ出立の黒装束にて、又によつこりと出來り、番といへども以前の忍、忠とも答へずすりぬけるを、「扱こそ曲者ござんなれ」と、道を遮り抜討に、弓手の肩先切られながらかくぐり、拔身をもぎ捨て逃げ行くを、後抱にしつかと組めば、藏人すかさずひらりと飛下り、敵

か味力か暗さは暗し、後に來たりし侍が、兩足かいてのめらせば、命冥加な手負の忍、廻文大事と逃けて行く。跡には兩人組合ひ捻合ひ、四つ手に成つて、互の頭巾と頬被に、一度に手をかけひつたくつて顔見合せ、「エ、イ藏人か」「ヤア忠太か」二人「こりやどうぢや」と、興をさめ島うるたへ廻れば、「イヤサ是、盗み取つた廻文は、ナ、なんと」と、問ふも語るも氣はいらだて、「サ、されば、紛者の心は付かず、今の奴に」「エ謀られたか無念々々。程は行くまい、追つかけん」と、二人つれ行く取りなりは、阿呆鳥のかあくくと、夜は明渡る 三重。戀をする身はいよ伊達らしや、おも白無垢に染小袖、裾吹きかへす朝風に、揉まれもまるよはぎの露。義経「コレ静、廓と違つて、四角四面な屋敷の内、あの風流な唄と三味、てんとたまらぬ道中姿、可愛らしい」と抱付き給へば、「オ、辛氣、御所の女中方の見さんして、我君を手に入れ、自慢と思はんす所も氣の毒」と、ぴんとする河の次郎が引取り、「イヤ申し、其お氣遣なされますな、京の君様は、御懷妊ゆゑお里歸、そこでお前を根引にして今日の御館入、鴛鴦も連れられぬが一趣向、はやお忘れなされしか」と、心を付ければ、義「オット誤つた。今日某、鴛鴦のお芳」常とは違つて、小袿搔取りちよこくと、義「申し太夫さんえ」次「オ、それでこそ鴛鴦ぢや。扱是から拙者めが禿の役を仕る、眠らぬを取えに、嵩高なは了簡あれ」と、い

へば静もをかしさに、「禿のはれはもの言ひが第一、こいよ」次「ナアイ」靜「もうそれが禿でない」と打ちこまれて、次「ホンニさうぢや、奴の返事と取違へた。ヤアく女房達、靜様の花のお入、お盃を持參あれ」と、呼ばれくるわに品かはり、島田 箆 巻長な女中方、銚子島臺取揃へ御前に出で、「御舅時忠様夜前より御出有つてお待ちかね、御對面もや」と伺へば、義「ウム夫れで聞えた、最前の一節も、時忠殿を汝等が慰よな。我等に逢ひたいとは、廓通をやめにせよと、例の異見煩しく。ナウ靜、此程は揚屋々々の暇乞に、全盛の大酒盛、其處をとんと氣をかへて、あの堅くろしい腰元共を、相手にするも面白かる、飲んで獻しやく。禿よ早う酌をせい」アイと返事も長柄の役をする河の次郎、君が仰につきかくる、玉の盃底ひなき、御酒宴半に廣間より、「源八兵衛尉 廣綱、御見參」と披露して、切腹したる武士の死骸、戸板に載せて庭上に昇きするさせ、「今日 某 御所の御番に相當り、早天より出仕いたし候所に、昨晚の御留主預り、鎌田藤次政経、あのごとく自殺 仕る、様子は此書置に明白たり」と、一通を差上ぐれば、繰返し、披見有るより、忽 怒の御顔ばせ、飛びかよつて靜を捻ぢふせ、「ヤイ女め、汝鎌田藤次と忍び契りしな、今日の館入を無念に思ひ、彼通腹切つて、書置に不義の段を顯したるは己への頬當、かよる後めたき事を隠した天罰の程覺えよ」と、長柄を

押つ取り、織袴き脊骨をちやうくく、銚子の酒に身はひつたり、花を粧ふ衣紋も亂れ、わつと涙にむせびしが、「エ、お情ない氣の廻り、そもや君の目をぬいて、悪性しさうな静ぢやと、思し給ふか曲もなや。身の言譯は有りながら、證據になる相手は切腹、何をいふとも死人に文言、不義淫の名を取つて、先だつ命はいとはねども、老いたる母の磯の前司、兄様は有りながら、親に不孝な生れ付、わらはが死んだ其跡では、嘸母様の便なかる、未來の迷は是二つ。二人の衆、なぜに留めて下さんす。いつそ君の御手につけ、殺してたべ」とばかりにて、恨啣ちて歎きける。「オ、望の通、鎌田が冥土の供せん」と、白洲へはつしと蹴落し給ひ、「駿河次郎あれ計らへ」と有りければ、源八兵衛憚なく、「コハ御短慮なる御仰、流の女の偽表裏は天下晴れたお定、それを何かと御遺恨に思召すは、智勇兼備の名將に似合はぬ、御心がせまいく。殺さず痛めずあの儘に捨置いて、死骸の番をさするのが好き成敗、皆々引け」と人をよけ、「先御入」と諫むれば、静は堪へかね、「コレなう申し」と立ち寄るを、駿河が隔て、「何處へく、もう泣言は叶はぬ、我君に見はなされて、身の立てらいがならずば、近々に五條の橋へ来たが好い、千人斬の時お手にかよりし者のゆかりへ、御施行が有る筈、其役目は此清重、此方も君のお手にかよつた人なれば、千人斬の施行の人数に入

れて、施のお銀いたどかせう」と、悪口たらく、主従打つれ奥に入る。跡に静はたど獨、涙にくれて居たりしが、藤次が死骸の一腰追取り、既に自害と見えける後に、「ヤレ待て」と馳出づるは時忠卿、「むだ死するか」と押しとめられ、「無駄死とは曲もない、なんと是が生きて居られう、留めずと死なして下さんせ」と、振りはなすを猶抱き留め、「最前よりの始終、物陰にとつくと聞いた。あつばれ汝は女に稀なる心中者、其心底を見る上は何をかくさん、元來京の君を義經に嫁せしは、餌にかうて肌をゆるさする一つの方便、今死ぬる命を存らへ、兼々くどく此時忠にはなぜ従がはぬ、命取め」としなだれ給へば、「エ、イそんならお前は義經公を殺すお心か」「ア、音高し、人や聞く」と、前後を見廻し給ふ所へ、とつたくと捕手の役人、十手打ちふりおつ取りまく。上段の御簾さつと捲き上げ、九郎判官義經公、有りしにかはる御出立、装束改め、源八兵衛廣綱、駿河次郎清重、左右の翼と隨ふにぞ、飛龍の氣を呑む御大將、悠々と床几に直らせ給ひ、「ヤア静、覺えなき身のしばしが間も不義者といはれ、嘸いぶせく思ひつらん、斯く計ひしは時忠の悪逆を顯さん爲、罷立つて休息すべし」と宣へば、扱はと悦び静御前、袖は涙に濡衣の、面目すよぎ入りにける。「ヤア時忠殿、京の君を餌に、此義經に肌をゆるさせしと宣ふが、此方は又静といふ餌にかより、巧まれし謀叛を見すかされ、さぞ本意な

くおほすらん」と、仰もあへぬに時忠卿、からくと打笑ひ、「扱はかよる仰々しき有様は、靜にたはむれし事共を、聞きはつとての疑よな。それしきの儀を取上げて、謀叛とは近比粗忽粗忽」イヤ此期に及んで言ひぬけんとは、未練の一言、昨夜平家の廻文を盗まれ、申譯の爲に腹切つた鎌田の藤次を、靜と不義の體にもてなしたも、其元の巧見出さう爲の偽、廻文の行方も、此方の胸に覺が有らう。然れども此詮儀は所存存つて用捨いたす、差當つて謀叛でないとの申開承らん」と、席を打ちて宣へば、「イヤサ先達て娘京の君を遣し置いたが、某に二心の無い好い證據」と、あらがひ給へば源八兵衛、「然らば最前の謀に載せられ、義經公を亡さんと有りしは如何に」「イヤそれは」源八「サアなんと」と問ひかけられて、「ホ、それこそはよき糺明、靜を我手に入れ、判官と娘が中を睦まじくあらせん爲に、戀路の闇と見せかけて、誠は子故の闇なるぞや」源八「ヤア戀路でも子故でも、闇盡の言譯暗いく」と、いふに氣ばやき駿河次郎、「最早御詮儀には及ばぬ、叛逆に極まつた。アレ擲めよ」と下知すれば、又ばらくと詰寄るを、「ヤアはやまるな」と、判官捕手を制し給ひ、「かくあらがひの上からは、招き置いたる訴人を是へ呼出せ、はやとくく」との命に應じて、源八兵衛廣綱が、伴ひ來るは時忠の御臺所、兼て覺悟の心にも、かはる浮世の数々に、思ひなやみ立ち給ふ。時忠見るより嚇とせ

き上げ、「エ、につくき女め、夫の訴人好くしたな」と、言はせも果てず義經公、「ヤア其一言が謀叛の證據」駿河源八、「承る」と雙方より、「捕つた」とかよるを御臺は目もくれ、氣も狂亂のごとくにて、「其繩目が悲しさに、幾度かく、妾が留めし異見諫も用ひなく、過去りし平家の一門、非道奢の天の責にて、じびしとは氣も付かず、仇よ敵と狙ふは鞞の判官殿、連れ添ふ娘が難儀と成るも顧みぬ謀反の企、愚かな女の思案より訴人して、其訴人の恩賞に、夫の命たすけてと、詞を番ひし甲斐もなく、此縛は何事ぞや。殺さでかなはぬ道ならば、自らを代に立て、連合をゆるしてなう判官殿」と、前後不覺に嘆かるれば、時忠卿も今更に、御身の悪事の數々を、思ひしら洲に差しうつむき、面目なみだにくれ給ふ。大將しばらく御應もなかりしが、「オ、女氣の一途に恨まるよはさる事ながら、今鎌倉には梶原有りて、やよもすれば讒言をかまゆる時節、鞞のよしみ有る故、結句用捨成り難く、繩かけさせたは政道の一條、契約の通、訴人の功に命を助け、能登國鈴の御崎へ流しつかはすべし。早とくく引立てよ」との御説に隨ひ、警固厳しく左右を圍み、配所をさして追立て行く。御臺は有るにもあられぬ風情、「如何なる沖つ島守とも成らばなれ、夫婦諸共やつてたべ」と、せき入りくくどかるれば、義經公聞召し、「そも流殺の法は、黃帝の御代に始つてより、妻子を相添へながしたる先例

なければ、鎌倉への聞え、旁々以つてかなはぬ願ひ、いたはしながら、御臺はこなたへ伴ふべし」と、簾中さして入り給ふ。斯くと聞くより鮫島藏人秀氏、一味の悪黨從へて駈け來り、「ヤアア駿河源八兵衛、何もかも皆聞いた。主人時忠の無念晴さん其爲に向うたり、覺悟ひろけ」と呼ばるにぞ、「ヤア時忠卿に謀反をすよめし親粒の鮫島め、束の間もゆるしは置かぬ」と、二人は夜叉の荒れたるごとく、猛勢一度に切つてかゝるを事ともせず、弓手馬手へ薙立てく追掩れば、言甲斐なくも鮫島藏人、迷惑うてうろつく所へ、駿河源八一散にかけ付けて、臙ほんとふみのめし、「此奴が様なへろく侍、刀で殺すは大人氣なし、鮫島なれば片身づつ」と、兩足左右へ引張つて、ヤアエイくのかげ聲にて、さらくさつと引裂き捨て、勝色見する梅の間松の間柳の間、御殿々々をかり立てく、爰は所も櫻の間、緋櫻ちらして、彼岸櫻のちりぢりばつと、逃散る敵の犬櫻、一重櫻蒲淺黄、天狗櫻や虎の尾の、勢有りあけ月花の、都の外の外までも、二人が武勇の譽は高き山櫻、枝をならさぬ源氏の御代、浪靜なる堀川の、御所の櫻ぞさかんなる。

第二

施は財と法と無畏の三つ、權者の詞盛んなるかな。九郎判官義經いまだ牛若たりし時、五條の橋の千人斬と、世の取汰沙も年月も早十三年、千人供養遂ぐべしと、橋詰に假舎をうたせ、幕の中には駿河次郎清重、斬られし者の月日刻限、日次の扣に引合せ、御施行をひかるべしと高札を立てければ、洛中洛外の町人百姓、聞傳へく、おれも切られた、娘も切られたと、毎日五人十人宛、疵言立に笹原を、橋詰にこそ詰めかけたり。かゝる所へ源八兵衛廣綱、御廟參の次ながら、お見舞申す」と假舎に通れば、「是はく廣綱殿、今日は頭と殿の命日、御菩提所へ御代參か、嘸御苦勞」「いやく何の苦勞、誰あらう義朝公の御命日、源氏の祿を食ふ者、月月の三日は、廟參せではかなはぬ。して御自分の役目の千人供養は」「さればく、日を逐つて漸と、人數の都合も今少し、あれへ詰めたる三四人、九百九十九人、さりととは我君、御若年の時なれども、僧正坊に習ひ給ふ劍術の手ひどさ、いつかなく、刃向ふ奴もないと見えて、毎日々々來る人に、手疵おはぬ者はなく、其時は平家の世盛り、往來の剛臆を見て味方に付ける御所存なれば、一命を果す程の深手もなく、萬一死たる者には、親類によらず、縁者の端にも格別に、弔料下さるよ」「フウ、したりく、今草木も厚く源氏の御代、斯様の施なされぬとて、誰がぐつと言はねども、下を恵む御仁心、天晴源氏の好き礎、ヤア何か言ふ間に、御代

参おそなはる、さらば〜」と源八兵衛、別れて御墓へ詣でける。駿河次郎日次の大帳押開き、「コリヤ〜、汝ら最前も言ふごとく、我君の覺書に、少しにても相違有らば、御施行は渡されず、銘々其夜の物語、早とく〜」と有りければ、雑色供人いかつげに、「出ませ〜」の聲に随ひ立出づる。年は四十の肩で風、「ふう〜」仲間の立者と、人より先に鳥羽の里、車遣の其中で、腕に覺の若盛、往來をなやます天狗の若衆、出合うて見たさにわざ〜と、一里餘をきさらぎの、晦日の夜に暗がりから、牛若様とは重荷に小附、祝ひ額を此の如く、切られましたは丑の時、まうとう違ござりませぬ」と語りける。チ、其詞も合鮫の、古びた一腰さつするに、禰宜の中でもかすけの天窓、願かけてきられしは、口先ばかりで世を渡り、商賣とてはせん本通、軍書歌書の講釋師、「其頃は地主祭、夜講釋して歸るさ、しかも春雨しきりに降つて氣味悪く、たゞ一人橋臺に差しかよれば、暗さは暗し、驀地に討つてかよる、受けつ開いつ、追ひつまくツつ、判官様は欄干傳ひ、擬法珠に片足立て、慥切つたと思つたは違はず、草履の鼻緒踏切つて、輶けつ轉びつ、なう悲しや人殺と、たつた一聲のふ顔の、五條あたりのしるべへ駈込み、あまの命を拾ひし」と、おのが家業の仕形咄、今見る様にしやべりける。それに違も「ないない〜、身共は御所のお道具持、御覽の如く奴めが、髭と尻とは晴れ道具、其尻をしたよ

かに切られたは一昔、土用八專寒の入は、慥にうづきの十八日、お觀音の下向道、清水坂に契を結び、安物に通ひ樽、ころりと明けた酔機嫌、しやつぶり一太刀、劔も折れるは大悲の誓、まさかのときはかなはぬ、夫れから再び此橋へ、紺のだいなし看板を、うたぬばかりの迹疵痕、御施行も疵相應に、ずつしりてごはりませう」とかつつくばふ。駿河次郎は月日刻限、一々に引合せ、「汝らが詞に違はぬ、是で九百九十九人の帳面濟む、必々お上の御恩、仇疎かに存するな」と、銀子も一枚平等に、足り不足なく與ふれば、「やれ忝や有りがたや、お銀子貰うて尻切らるよとは、正眞の譬の裏、斯様の事なら、千人切にまあ五六度もあうたらば、閨の有る大晦日の拂の足しに」と打笑ひ、別れ〜に歸りける。跡へ來るは誰ごとも、三十餘の女房、綿帽子眉深に顔かくし、世帯染みても爪はづれ、只ならぬ日の物語で、密に念珠繰り添へて、假屋の前に手をつかへ、「私は日の岡に住む浪人の妻、連合の父御、わらはが舅、其時はまだ六十に足る足らず、春の日の長きを暮しかね、都は花の最中、氣延しに見物と、浪人の鍔刀、衣裳は汚れ垢づきても、心は汚れぬ武士の浪人、嫁女、留守能うおもしやと暇乞なされし、其佛が此世の見納、知らせによつて駈付け見れば、此橋に切殺され、敢なき御最期取りませて、夫は奉公稼の留守、姑御を始めわらはが歎を御推量、跡で切人は判官様と聞きたれども、恨みつ

らみも人により時によると、思ひくらしし年月も、十三年のお弔ひ、是はまだしも奇特な事、望み有る舅の命、外々よりも經念佛、たんと唱へて冥途の妄執、晴らして進せて給はれ」と、目には涙を持ちながら、言ふ程の事しとやかに、武士の妻とはしられける。語る中より駿河次郎、只フウくと小首をかたむけ、「先待て女、見る通り、千人供養も最前の三人にて、九百九十九人の人数、悉く揃ひ、千人目は武藏坊辨慶にて、お帳面もしまる所に、思ひもよらぬ只今の物語、一圓に合點ゆかず、其の又月日は「アイ、則ち今日が舅御の祥月命日、齋米持つて墓参りが慥な證據、見すく切られて逝た人を、覺えないとは御卑怯、良人は武士の浪人と聞き、お主思の偽か」と、せきにせいて詰めかくれば、「黙れ女、天下晴れた千人供養、そちが夫を鬼神にもせよ、武士の虚言を言ふべきか、我君の手にかけて賜はぬといふ證據、せかすとも心を鎮めとつくと見よ。月の三日は休日と、日次の控へに記し有るは、御父義朝の御命日、人は勿論魚鳥の殺生さへ戒め給ふお精進日、其日に限り汝が舅、何故殺し給ふべき、ナ合點がいたか」とくよめる様に語れば驚き、「エ、イ、そんなりや外に殺人が」「あるく、察する所、老人に意趣有る奴、切殺して千人切につきませ置きしに疑なし」と、聞いて女はハアはつと、しばし詞もなかりしが、「御覽のごとく身分貧な私、無い事も有る様に言ひなし、施行のお銀を食るか

と、御蔑しみも恥かしや。外に殺人有らうとは、夢にも思ひがけもなく、せいた儘の悪口雑言、御赦されて」と立上れば、「オ、疑ふも尤、親を討たれし夫が心根推量せり。身共は駿河次郎清重、用事有らば館へ來れ」と、慈愛の詞に一禮のべ、春の日脚も八つ頭、暮れるにはまだ程遠き、日の岡さして立歸る。折から梶原平次景高、頼む鮫島藏人は、義經に討取られ、盗取つたる廻文も奪はれ、若しは尋ぬる手がかりもやと、詮議のあてども雲をつかむ、雲雀毛に打跨り、鬘重をちらと見付け、悪い所の出合頭、駒の頭もうなだれて、知らぬ顔に乗過ぐる、見ぬ顔させぬと駿河次郎、向うにすつくと立ちはだかり、「ヤア珍らしや梶原、汝上洛せば、早速主人の御館へ参るべきに、面出しもせず、洛中は主君の膝元、馬の蹄にかけ乗打するは、フム合點合點、平家亡びてより、鎌倉殿と御兄弟御中睦じからず、汝親子が讒言にて、討手に來たるに違はぬく。サア堀川の御所へ参つて、有の儘に白状せよ」と詰掛られ、返答ぎちとつまりしが、弱身を見せじとからくと嘲り笑ひ、「景高は大名、左様の禮儀をしるまいと思ふか、此度鎌倉殿より御不審の條々、一々承つて上洛したる梶原は御上使、汝等風情が乗打を咎むるがまづ緩怠、一つには又判官殿、言譯の筋も立ち、御兄弟の御中、御和睦も有る様にと、加茂祇園北野の社に祈誓をかけ、只今參詣する所」と、口から出次第神集め、嘘八百に言廻せば、「サア其御不審

の「イヤ小癩な、汝が聞いて何んと判断なすべき」と、手綱搔繰り乗出す、尾筒を掴んで、「待て〜〜、言はぬは曲者、何分主君の館へ参れ、異議に及ばず鞍つほに括り付け、引きずつて行く、覺悟せよ」と、二三間引戻し、尻居にどうと投付ければ、梶原馬上に反橋形、「エ、憎くき清重、上使に向つて重々の狼藉。それ引くよれ」と、聲に随ひ數多の家來、ばら〜と立ちかよるを、駿河次郎、得たりや應と取つては投退け、掴んでは打付け打付け、梶原目がけ飛んでかよる。こはかなはじと一鞭あて、一散にかけ行けば、家來もはふはふ逃げちつたり。何國までも遁さじと追ひかけしが、「いや〜〜、一先主君に申上げう、思へば憎い梶原め」と、駈出しては立戻り、「よし〜、生けて歸すも千人供養」と、心一つでとつおいつ、思案の底を堀川の、御所をさしてぞ三重歸りける。都の出口来て見れば、愛宕参りや伊勢参宮、引きもちぎらぬ往還も、夜は旅行の跡絶えて、人音まれに粟田口、木々の梢も若草も、名残の霜に照添ひて、姥が懷物凄く、星の光も曇る夜の、黑白なき道をのつさ〜、歩み来るは天津の町、古き老舗の店を張り、みよすも通る名も通る、往來もとうて池の端、針右衛門とて遠目にも、光る鬢付頭がち、強い事好く腕自慢、覺もなりより力より、心ばかりの浮氣者、京の得意を駈廻り、日暮れて歸る道の邊の、側へに積みたる稻村より、「ヤイ待て待

て」と強請の胴聲、聞いて悔り飛退きしが、「ム、合點々々、爰は名代の姥が懷、狐狸のわざでも有るまい、剝奴等に極つた。望む所」とずつと寄り、「天津八町に隠れもない、池の端の針右衛門知らぬかい。待てと吐すは何奴ぢや」「オ、針右衛門聞及んだ、おりや見えた通の稻村」「ヤ此奴滅相な、橙子が物言うたは見世物に有つたれど、稻村が口利いた例がない。馬鹿つくさずと、用が有らば出さつて吐かせ」「オ、出なというても頼見にや置かぬ」と、によつと出でたる大男、力士の如く突立てば、ぎよつとせしが怯まぬ顔、「コリヤヤイ、われが用は聞くに及ばぬ、酒手で有らうが、温かに此男、鼻紙一枚やりやせぬはい。退いて通せば其方の仕合、悪う働きたてすると、身内が鐵の針右衛門、くつしやくしや突いてくりよ」と、力みかよれど見向もせず、「ハテ姦しい、願たよかすとぎり〜脱けやい」「ヤア何ぢや脱け、ハ、ハ、ハ、此奴こりや寐とほけたか、相撲ぢやないぞよ。裸にしたくば、腕先でならばさあ取れ、サア剝け」と、身構しても動かばこそ、「ヤアをさめ過ぎた盗賊奴、此ぶつぶとふきでる力、此方から見せ付けん」と、胸づくしをしつかと捉り、「何と嚴いか、どうも得せまい、所をすつと斯う差込み、引つ擔いで、コリヤ可かぬは、めんよう、常は能ういくが、さあと言ふと場うてがする、ム、其筈勝手が違うた。今度は斯う取る、うんと、是でもやられぬ、やられぬ物は乞食

の悪口、相手に成つて入らぬ物、赦してこまそ」と、退いて見てもむしやくり腹、思へば無念と又取付く、腕もぎはなし、素首弱腰引搦んで、深田の中へどうど投ぐれば、「あいたたよ、さつてもひどい、コリヤ酷い」と、身内を撫でて「南無三寶、今の拍子に財布を落した、ア、儘よ、其處等に有つても呉しやせまい。エ、こんな事なら、構はなんだが勝ちやもの、力だてして銭出して、痛い目するは盗人におひ、されど布子は助かつた」と、はふく逃けて歸りける。財布取上げ、是は扱、足りにもならぬ目腐銭、無駄骨折つた」と咬く向へ、「来るはく、此奴は慥に實の有る奴、遁しはせぬ」と呷づんばい、先はそれとも知らねども、心から吹く臆病風、ぶうく者はをらぬかと、こはさ紛らす高念佛、「なまいだ、なむあみだいやほう」ほうど出くはせ、「コリヤ遣らぬは、其懐な物置いて往け」と、聲かけられて、「ア、恐はく、持合が有りや如才はない、いかなく一銭も」「ヤ無いとは言はさぬ、とほけまい。體に似合はぬ奴が足音、重い輕いで、有る無いは目をかけた程知つて居る。銭も有らう、金もしつかり持つてをろ」と、星をさよれて、「コリヤ奇妙、ア、目高に逢うててめはならぬ。我等は三條釜の座の、金四郎といふきん五好、夕べ大津で引つかけたたりや、勝つ程にく、板銀一丁錢三貫、汗水流して取つた物を、又物せうとはそりや胴窓、今夜の所は圍うて貰ほ、重ねて進ぜるしびんも有

らう、了簡なされ」と、言捨てと逃げんとす。「どつこい遣らぬ」と飛びかより、肩先搦んで引けひよろく、「ア、こりや如何ぢや、引戻すはあざきりか」「ヤア動くな、四民をはづれ、野ら遊のほでてんがう、おのれらに金銀持たすは國土の費、とても口先では渡すまい、手短にばらしてくりよ」「ア、其ばらすはきつい禁物、まよてんとれ金四郎が不運、唄七里八里は馬でもこすに、越すに越されぬ姥が懐、我らが懐是非がない、どうだいに三つを見た」と、皆捲け出して逃けて行く。爰へいきせきくる男、暗さは暗し氣はいらつ、行當つて、「あいたしこ、御許されて下さりませ、少と急用が有れば、氣のせく儘の籠相」「イヤ籠相は赦す」「アイく」「其代に酒手せうはい」「エ、イ」といふより身はわなく。「サア出せ」「アイく」「出さぬか」「アイく」「出しをるまいか」と引捕へ、わつと叫ぶを無理無體、懐探し、「コレく、これ程有る物を、強い奴ぢや」とつき飛されてどうど伏し、涙はらく大聲上げ、「テモ扱も情ない、たどさへ術ない暮らしをするに、一人の親が大煩、今をも知らぬ危い命、せめて髭人參でも進ぜたら、取止める事も有らうと、心はせけども、何を如何とのあだてもなく、せん方つきて京の妹が給銀の内、拾ふ借つて貰ひ、一足も早う往んでと、力に思つた甲斐もなう、此様な目に逢うて、すごく戻つて何とせう。見すく親を見殺すは、テモ扱も情ない」と、大地

を叩き身を悶え、只わつくくと、泣くより外の事ぞなき。「ムウ何ぢや、親の大病、人參が吞ませ
 たさに、妹が給分借つたのか」「アイ漸と拾ふ、夫れをお前にしてやられて、親父様は死にやり
 ます。悲しい目を見やうより、寧ろ殺して下され」と、歎けば共に涙ぐみ、「ム、身共も煩ふ母一
 人、孝行は同じ事、コリヤ銀戻す、大切な場に成つて、髭位では届くまい、大人參で養生せい」
 と、板銀一丁投出せば、「エ、イ是をわしに下さりますか」「オ、孝行を感じておのれにやる。人
 の親も我親も、大事に思ふは同じ事、親の爲にする追剥、惨い銀は取らぬはい」「エツエ 忝
 い、慈悲深い結構な盗人様、お銀を下さる冥加の爲、せめては布子を脱ぎましょか」と、帯と
 きかよれば、「ヤイ馬鹿め、剥ぐ程なれば銀はやらぬ、隙入らずと早うせて、養生しをれ」とつ
 きやられ、「是はまあ夢ではないか、追剥様に銀貰ふは、命冥加な親父様、人參が切れたらば、
 又剥れに参りましょ」と、銀戴いて歸りけり。「エ、吠えをつたばつかりに、板一丁ついもめた」
 と、跡振返ればしろくと、雪かと思ゆる雪洞綿、引きしめ着なす女の所體、「味いく、眞裸
 にしてこまそ」と、歩みくる先突張つて、「コリヤめろさい、襦袢脱け」といふに驚き、「ア、
 怖は」と、跡へ逃ぐるを引捉へ、顔見合せて、「ヤア女房どもか」「郷右衛門殿か、是は扱、此
 方はまあ如何して爰へ、ム、聞えた、此間毎夜々々出さしやるを、合點がいかぬと思つたが、

能うもく、此様な怖い事」「オ、思付いたも母を助くる營、武士の落日に切取強盜恥にも
 ならず、それゆゑ非道の銀はとらぬが、さう言ふわれや母の病氣の介抱を、隣の噂に誂へて、
 今まで何處にはひつて居た」「サアわしぢやとて母御の側、常は一寸放れねど、今日は父御の
 御命日、せめてお墓へ水なと手向きよと、参つた戻に五條の橋、千人供養の所へ往ての」「ヤ
 アおのれや施行受けにうせたな」「ハテなんのいの、イヤサ夫れ受ける程なりや、此態になつ
 ては居ぬはいの。コレそんな事ぢやない、大切な今の事」「ヤ今の事とは」「ハテ彼の相手が違
 うたはいの」「ヤアそりや如何ぢや」「サレバ、段々譯は有れども長い事、爰で咄すも内が氣遣」
 「オ、それよ、道々聞かう、サアく來い」と、打ちつれて、歸る夜嵐山嵐、梢木の間もさら
 さらさつと、吹けば散るてふ身の住家、急ぎてこそは 三重 越えわぶる、浮世の峠瀬苦しき、
 大津と京の世渡り道、向脚から出る日の岡に住む浪人有り。南蠻の骨接郷右衛門と名を記し、
 桐の古木の看板も、琴の音ならで世にひどき、つめかくる療治人、切疵、打撲骨違、或は脚氣
 願外れ、其それぐの膏藥を、妻は見馴れて習はねど、のべて離れぬ女夫中、人の痛は直せ
 ども、夫の老母の御大病、藥も術も盡きはてよ、夫れ故心の痛みには、付けう藥もなかりけり。
 女房膏藥延べしまひ、奥を覗いて、「申し、御療治人が二三人も待つてござる」「おつと心

得「たち出づる郷右衛門、紙子羽織の大廣袖、金氣はなれし柄廻、内でも不斷大だらを、さすがに武士の浪人と、いはねど見ゆる其風情、「オ、皆待遠にござらう、身共が老母大病今晩もしれず、療治どころぢやなければども、折角わせられたもの見て進ぜう、一番は誰ぢや」「私でござります」「なんと召された」「夜前京からの戻りがけ、松坂の成敗場を通ります時、かねて追剥が出る物騒なと申すに違はず、太山の様な、てうどお前様の様な」「ハテ迷惑な、身は追剥は致さぬぞ」「イヤ、お前様とは申さぬ、様な男でちやうどお前様の様な怖い聲で、酒手をよこせと申しました。私も見掛と違うて、腕に覺は有り、今一倍怖い聲で、大津池の端に隠ない針右衛門知らぬかい、剥いだ物が有らば此方へよこせと、いふやいなや剥ぎにかゝる、まつかせと引擔いて、深田の中へ眞逆様に、投込みは込みましたが、此脚ががつくりというて痛出し、やうく杖に縋つて参りました、療治頼上げます」と、即ち剥いだ其人に、まつかさいさまの物語、をかしさこらへて郷右衛門、「夫れはいかいお手柄、どりや疵見て進ぜう」と、脛押しまくりとつくと見、「コリヤ投げた物ぢやない、お身手痛く投げられたな」「アノ夫が見えますか」「投げられたばかりぢやない、剥れたまでが見え申す」「ハテ面目もない、何を隠さう、したよかに投げられました。されども心有る追剥で、財布に遣ひ残した錢ばかり、著物はたすかつた。

いたみさへ癒れば、取られた錢は一精出せばつい戻る。どうぞお慈悲でござります、御療治なされて下さりませ」「直しておませう。女房ども、あほすところんに、あるまんすを些と混ぜて付けておましやれ。次は誰ぢや」「イヤ私でござります」と、きどく帽子に手綿被せ、願かけて引つくり、目ばかり見せたは何女、親父めく者連れて出で、「私は山科の挽物師、此奴は嫁でござりますが、コレ此様に」と、綿も帽子もかなぐれば、願はづれてぶらくくと、翁の面見るやうに、鼻から下の面長さ、「聲が達者で甘い物食はせ過し、願が落ちた、蠅も得追はぬ様に成りをつたと舅の歎、轆轤で骨を削らる様な、御療治頼上げます」と、おろく、涙いちらしよ。「いや左様でない、此名を落架風というて、男女に限らず、仕事するか物を見るか、なんでも有れ氣を盡かすか、或は阿呆氣に欠などすれば得て有る事、此儘で置けば物も得食はず、段々と願が重うは成る痛はする、死なうより外はない、其方は一大事、此方は心安い療治、癒しておませう。女房ども、風呂敷よこしや。エ、残多い、京中の膨膨どもに是が有れば、一かど禮銀してやる物、しほつても瘦親仁、よもや汁はたるまい」と、戯れながら風呂敷すつほり打被せて、頭押へて願を、いらふ手品の一はずみ、「サアかよつたは」と風呂敷とれば、嫁は會釋手をつかへ、「扱もく有りがたい」「コレ物言ふまい、二三日もあしらはねば、又はづれるし。

薬に及ばぬ、退いたく。次は見しつた、六地藏の捨鞭の三藏ぢやないか、なんとした」「ア
 一旦那殿、あたほつこしもない、さきをとよひ、鎌倉行の二十三貫有る荷を付替るとて、此
 腕がほつきりというてから、痛んでから、かどまいでから、此様に膨が来てから」「もう好い
 は、からくいふな、診てとらせう爰へ来い。ホ、ウ、したりなコリヤ大事、肘の骨が齧齧う
 た、嘸痛う。悪うすれば死ぬれども、南蠻の骨接、郷右衛門が秘密の療治、立所に癒してやら
 う。女房、細引もつておぢや。オ、好い時見せて仕合者」と、痛む腕を引きよせて、柱にしつ
 かと括付け、羽織引脱ぎ身輕に成り、手水鉢にさしかより、ずばと抜いたる大刀物、水さらく
 と汲みかけく、鼻の先を閃めかせば、見るに生きたる心もなく、「申し、夫で如何なされ
 ます」「腕打放して繼ぎ直すはい」「なう悲しや」と大聲上げ、エ、くくくと男泣、「馬鹿なしや
 ツつら、吠ゆれば癒るか、今切放して接ぎ直せば、本の如く役に立つ、捨置けば次第々に腫上つ
 て、終には一命を果す基と成る。切放す間は一思、役に立つは身一生、人も聞く、吠えまいく」
 「でも慘たらしい」「慘うなければ療治にかよらぬ、サア今切るぞ」と振上げて、てうど切る眞似
 おつと飲む、呼吸のはすみ引く拍子、腕の番がつくりと、「もう好い、違うた骨がとつくとほ
 まつた、最早痛が止まうがな」「ほんに止んだは、スリヤ切り放しはなされぬか」「ハレやくたい

もなく、耆婆や華駝がわせても、切放して何と接がるよ物ぞ、臆病を見込みて身を引く拍子、手
 をさへずに本復させる、是が南蠻秘密の療治、此膏藥で膨も減る、何と奇妙な療治か」と、聞いて
 皆々憐りし、「扱も頓智、御發明、頓ての内に天下道具、怪我せうならば今の内、神か佛か長
 居は恐、是々腕が動きます、足が自由に成ります、ハア有難い、忝い、サアお暇」と女房の
 側、面々謝禮差置いて、悦び打連れ歸りける。夫は奥を窺ひ見て、女房を小隅へ招き、「母も
 未だお目が寤めぬ。此間に夕べ道すがら咄した事を、今一度聞きたい。彌夫れが治定で、義經
 殿がお討ちやらねば、親の敵は外に有る。嬉しや義經殿と違うて、討つに義理も遠慮も要らね
 ば、その敵誰ぢやといふ、夢程も心當がない、雲に汗が出来た様で、又雲をつかむ様で、
 分別に能はぬ。萬に一つ、聞いた内、手掛に成りさうな事はなかりしか、今一度語れ」と念入る
 れば、「サアさう存じて段々念を入れたれば、駿河殿も繰返し、帳面の御吟味、何月、幾日
 の夜幾人、何の物著て、幾歳ばかりで、如何で斯様でと、小袖の模様年恰好、刀脇指の拵、ま
 で明白な帳面、都合九百九十九人は、其所縁の衆が皆施行戴いて歸り、千人目は武藏殿で、帳
 面さらりと打濟み、微塵も胡亂な事もなく、手がかりに成る筋は猶なし。おいとしゃ、誰が殺
 して千人斬の内へつきませ、科ない義經様を疑はせ、大事のお前は埋らせ、是までさへ有る物

を、此上の心づかひ、御苦勞なざるが悲しい」と、涙催す折からに、表に人数多足音して、乗物昇きする立出づる其行粧、頭は薙髪の大男、足利様の長羽織、平柄の刀提げ立出で、「頼入らん」と案内請ふ。女房立出で、「何方ぞや」と答ふれば、「南蠻の骨接、郷右衛門といふは此家とな、在宿ならば御意得たし」「ハ、何方か、幸ひ宿にをりまする」「然らば罷通らん」と、しづくくと奥に入り、「未だ不知案内御免有れ、郷右衛門とは和殿よな、仔細有つて我名は申さぬ、骨接金瘡の療治御巧者と承つて推參致す、頼入りたし」とありければ、「功者と御聞きなされし上は、下手と申すも諛がまし。某が癖として、名も處も聞かなくても、お頼なれば療治致す。シテ其お痛みは」「療治してくれめされうか、忝いく」と、弓手の片肌押脱いで、疵さし向ければ立寄りて、包みし袱紗物解きほどき、とつくと見、「ムウ疵口は僅なれども、鈍骨に當つて、しかも手の内定らぬ鈍刀疵、是は嘸お痛みなされうが、療治致さば早速御平癒。女房膏藥箱持つて來い。ホウ肩先にも古疵の痕、こちらの切口とは違うて、オ、天晴な刀の痕、此時は嘸御難儀、御人體に似合はぬ、さいく斬られさつしやるの」「さればく、其疵は十三年以前、身も未だ浪人の時で、養生に迷惑いたいたさ」「何として又切られさつしやる、浪人の時ならば、辻切追剥でもなされての事かい」「イヤ左様でない」「さうでなくば押

入か強盗か、如何で碌な事では有るまい」「ハテ迷惑な、さう問はれては、語らずばかなふまゝいものでおぢやる。此疵は十三年以前、其比は平家の世盛、身が譜代の御主人は、仔細有つて東國に漂泊の御身、京都の便を窺はんと、某一人都へ上る、比は三月初めつた、地主権現の花盛、太政入道の次男平の宗盛、湯谷といふ女を俱して終日の花見の歸、是ぞ能き折節、見參せんと、六波羅密寺の小藪の蔭、立忍ばんとすれば人有つて、狼藉なり、何者といふ。木にも萱にも心置く身の悲しさは、平家より付置く忍の番と心得て、返答もせず抜打にてうど斬る。彼奴もさる者、心得たりと抜き合せ、したよかに切付けしは此疵痕、されども難なく切殺し、見れば六十餘りの老人、側に弓と矢有り。扱此人も源氏の餘類、宗盛の歸りを窮ふ我同腹中と、跡で心は付きたれども詮方なく、早追々に警固の提灯星の如く、見付けられては事むづかしと、死骸を引提げ、程近き五條の橋に捨置きしは、其比如何なる者やらん、五條の橋にて千人斬、跡で聞けば、義經公千人斬の十三年、追善供養なされしとや。夫とはしらす、其仕業にせん物と、一時の計略、今源氏一統の世となつて、恐るゝ方はなけれども、好事すら無きには如かじ、必々他言は無用」「何が扱人には語るまい、して其時の御假名は」「澁谷金丸昌俊、今は澁谷土佐坊昌俊」「親の敵遁さぬ」と、ずばと抜いて打ちかくる。飛びしやつて抜合せ、

はつしと受け、「コリヤ早まるな、扱は只今物語りし老人が悴よな」「おんでもない事」「さも有らん、せかすとも名を名乗れ、いかにく」「義経公の御内に然る者有りと呼ばれたる伊勢三郎義盛、千人斬につきませし其老人は、我父伊勢の左衛門俊盛、親の敵遁さぬはい」「どつこい先待て、其伊勢三郎は義経公の股肱の臣、何故に此有様、それ聞きたい」「オ、汝が今の物語、父を討つたる其時、我は駿州にさすらひ、都に残せし此妻が方より知らせに驚き、早速都へかけ上つたれども、千人斬も早事濟んで、誰を敵と討つべき様なく、又本國へ下つて無念の年月を送る所に、不思議に義経公の家臣と成つて、西海四海の戦ひにも、影身を離れぬ我なりしが、五條の橋の千人斬は我なりしと、去春初めて御物語、討てば主、討たねば親への孝立たず、奉公は猶ならず、母を養ひころしての、跡は浮世を捨坊主と、合點して暇を取り、其上盜賊せし時に習覚えし此營み、昨日敵は外に有りと、女房がつきませの譯を聞出しても其名を知らず、再び心をくるしむる所に、思はぬ今日の對面は、親人が是討てと、手を取つて連れてお出でなされたか、ハア、忝い有難い。優曇華は拜んで折る、親の敵は拜み打、立上れ、サア參らう」と詰めかけたり。「待て、早まるな言ふ事有り。ヤア家來ども尾籠千萬、何を立騒ぐ、此家を遠ざけて歸るを待て、往けく。扱々、承つて御心中察し入る。いかにも爰は

お相手に成り、御本意遂げさせたい物なれども、あつといはれぬ其仔細、物語の内先刀を引かれよ。今度鎌倉より義経公へ一ヶ條の御不審、平家一味の連判状と、京の君の首取つて來れと、梶原平次景高を都へ上さる、彼梶原父子逆櫓の遺恨によつて、義経の御事様々に讒言すれば、都へ上り如何様に事を破り、御兄弟の中惡しく、御身のひしに成つてはと思ひ、鎌倉殿の御前にて一通の起請文を書き、梶原と一所に此地へ赴く、案にたがはず堀川の御所へ忍びを入れ、彼連判状を盗取り、義経の誤りにせんとたくむ、扱こそと某姿をかへ忍び寄り、念なう其連判は梶原が手より奪ひ取り、密に義経公へ渡さんと折を待つ、是此の疵は其時の疵、梶原と一所に住む居形の内、療治の取沙汰聞えては、返答むづかしく、御邊が名を聞いて、是まで療治を頼みに來たり、思ひもよらぬ對面、我こそ親の敵よと、名乗つて討たるよは安けれども、爰を能く聞かれよ、今御邊に本意をとけさせ討たれては、誰か残つて義経の御身の上、事なき様に取はからひ、鎌倉殿とも御仲よく、梶原を鎌倉へは歸すべき。かく親の敵の顯はるよ上からは、御邊も義経公に恨みなく、主従の禮儀よもや忘るまじ。梶原を鎌倉へ返すまで了簡し、此敵討を延べて給はれば、某が初一念も立ち、義経の御身も立つ、聞分けてたべ三郎殿」と、低頭平身手をつかへ、涙をながさぬばかりなり。「ヤア聞分けぬく、知らぬ中

は是非もなし、知つては半時も同じ天は戴かれぬ、サア勝負々々」夫は曲もない、所存の本意を達せんと思はど、返り討ちに討つ事も有るべきか、夫れは道ならず。なう御内所、仔細は聞きなきるよ通り、歩に首を提げられ、鎧をかたにかけぬ法も有れ、偽りなし、梶原を返すまでの宥免、お取なし頼入る」何が扱、人にこそよれ昌俊様、其處に偽りは有るまい。三郎殿、申しく」といへども聞入れず。「いやくく、女の知つた事ではない、だまつて居よ。コリヤ昌俊、返り討ちに討たれうが討たれまいが、それや互に時の運、裏釘かへすな一寸も待たぬ、此座は立たせぬ、サア立上れ」といぢばる聲、「三郎待て、義盛までやい」と、母は寢處を立出でて、嫁を杖とも柱とも、引かれ纏はれ二人が中、ヤアエイと座をしめて、苦しき息をつぎあへず「つれあひを討たしやつた 昌俊殿は此方か、オ、健な能い器量や、義経様を御大切に思つて、上京さつしやれた咄聞きました、いかい御苦勞、サア緩りとなされ。コリヤ義盛、餘り物が了簡過ぎる、夫では思はぬ間違が有る物と、日頃叱つたそなたが、昌俊のわけでお申しやる段々の斷、今日に限つて何故聞入れぬ。但しは生死不定の世界、日を延べて其内に死にやつてはと思つてか、夫は人による、梶原が都の逗留も、長うて百日か百五十日、昌俊の命、それまでは母が受合ふ、了簡して先往なしましやいの」「ハア、畏つたと申上げたいが、

是ばかりは御赦されう。昌俊が命は五年三年延べても、ちつとも氣遣ひござらぬとも、結局お受合なざるよお前のお命、明日も知れぬ御大病、其病の起りはと申せば、此奴が親父様を殺した故、十三年の御歎き物思ひ、又某此方より暇を取つて浪人し、世の諺にも、老の入りまいとこそいふに、餘命なき御身に貧苦をさせましたも、此奴が千人斬の中へつきませた故、勿體なや、咎ない義経公を討たれぬ敵と、くいく、思召されたおどもりが、つもりつもつて此度の御大病、すりや親父様ばかりぢやない、お前を煩はせるも此奴が業、一方ならぬ憎さく。年來の濃霧を散ずる今日只今、首取つて莞爾のお笑ひ顔が見たさに了簡は得致さぬ。女房奥へお供申せ。サア昌俊、立つたく、了簡ない」と裾端折つて身繕ひ。母「コリヤやい、今昌俊を討てば、父の供養、母へも孝行にはならぬぞよ」「とはく、如何に」と褰けを下ろし、驚き側へすり寄れば、母「父親は宗盛を一矢射んと忍び出でて、再び返らぬ昔話、かねく、母がいうたと、昌俊殿の物語違うたか。討つた此人も、討たれた父御前も、同じ源氏の爲を思つて味方打、親に掛換への有る物なら、此敵は討たいでも、人が卑怯者とはよも言ふまいと思へども、其處は女の智慧に及ばぬ。今討つて父の供養、母へ孝行にならぬといふ譯はな、まそつと先まで、義経公を親の敵と思ひつよも得討たなんだは、三代相傳のお主故ではなかりしか。其お主

に鎌倉より御不審かより、一大事の今此時、立歸つて御用に立たうと思ふ所存はなく、結句お爲に成る昌俊殿を殺して、梶原めが思ふまゝに、義經公を取りつぶさせて仕廻うたら、嘸冥士の父御前が出来たとお譽めなされうぞ。武士は町人百姓とちがうて、なんほ親に孝行でも、忠義と武勇を忘れては、弦なき弓も同じ事。恥しや昌俊殿、君の爲に我を忘れ、頭を下け手をついて段々の斷、敵同志は猶恥有る物、義理を忘れて、何ぢや、此座を立たせぬ、オ、見事な武士道、此上は留めぬぞ。サア討て、振上ぐる刀の下、母が先へ死んで見せうぞ。エ、悲しや、其心では一生其身で埋もれ、伊勢の名字も是限り、是を思へば昨日にも死したらば、此愛きめは見まい物、ながらへて憂き命や」と、我身を啣ち子を恨み、かつぱと伏して泣きさけぶ。三郎大きに身を悔み、「御存生の内、敵の首お目にかけてたいと思ふ一途に、主君を忘れし誤、眞平御免下さるべし」と妻諸共、五體を投伏し詫言し、「ナウ土佐坊殿、仔細はお聞きなされう通、母の心を休むる爲、梶原が鎌倉へ歸るまで、此方は敵討を延す所存、貴殿も愈延べて欲しき御所存か、何とく」と是はく、忝い、必定延べて下されうか」「おんでもない事」「ハア祝著仕る。是と申すも老母のお情、お禮の申様は、夫よく、幸の物こそ有れ」と懐中より、錦に包む一軸を取出し、是こそ梶原が手より奪取りし、平家一味の連判狀、是を老母に

進上申すと、手に渡せば押しいたゞき、「あつばれは何よりの賜物、我が子が奉公歸參の願ひ、義經公への土産物、此上の有るべきか。斯ばかり心有る昌俊殿、申すには及ばねど、我君の御事を、くれぐれ頼み參らす。敵討の儀は格別、夫までは義盛昌俊殿と中好うして、君への忠義を忘るよな。命有らば又お目に、かよる所に長居して、人の疑ひ受給ふな。歸らせ給へ昌俊殿」「實に能く心付けられたり」と突立上り、「伊勢三郎義盛と、澁谷土佐坊昌俊が契約金石の如く、預の大事の我命、只今持つて歸り申す。さらばく」「さらばく」と立出づれば、義盛も突立ち上り、「天に不時の風雲有り、人に不時の煩ひ有り。病氣ならば養生加へ、早速に知らされよ」「何が扱何がさて、御邊より預る命、我身に換へて疎略はない。随分健固に勝負せん」「オ、嬉し頼もしよ、さらば」「さらば」と立別ると、鎌倉の義者都の勇者、東よ京よ娑婆冥土、「なう母様の御臨終」と言ふ聲に、立寄る甲斐もなき佛、わつとさげべど歎けども、歸らぬ死出の片便り、情は情仇は仇、見るにたへかね忍びかね、こぼると涙押つよみ、南無阿彌陀佛彌陀佛と、心でいふも誓願力、長き闇路や三重照すらん。

第三二

風の勢は大海の浪を動せども、井の内の水を動す事能はず。九郎判官義経公、梶原父子が讒言にて、御舎兄右大將家の御不審日々に彌増し、京鎌倉と隔たつて、親々矛盾の折からに、北の御方京の君、はや五月の御懷妊、御腹帯の御祝儀も、外様の聞えを憚りて、御譜代昵近の面々ばかり、思ひくに出仕有り、めでたき例を取結ぶ、帯の祝ひぞ賑はしき。お次の間より女中の聲、京の君の御乳人、侍従太郎森國が妻の花の井、彌襦袢とやかに、列座をおめず打通り、御前に手をつかへ、「サテ我君様へ申上げます、今日の御祝儀、幾千代かけて未ながき、お腹帯の儀式も相濟み、京の君様にもお里にて、それはく事ないお悦び、御乳人の役なれば、夫侍従太郎参らるゝ筈なれども、今鎌倉より意地悪の梶原が上洛して、有る事無い事、かはい男へ忍び妻が、日文を書いてやる様に、頼朝様へ知らするけな。夫故に目立たぬ様に、私が参上いたしました」と披露する。「オ、さも有りなんく、此義経、梶原づれを恐るゝには有らねども、鎌倉殿を敬ひ補ふ心より、今日の壽もひそかにと言ひ付けたり」と宣へば、「夫に付き、此おめでたを幸に、京の君様のお願ひは、去年の春より行方のしれぬ、伊勢三郎義盛殿の事、

誤りを御赦免有り、元の通御家來となし下されかし。此間毎日々々お里へ来て、お詫びなされ給はれと、あの一人當千な侍の、身すほらしいを見る目も氣の毒、いとしさにお次まで同道致しました。お腹帯の祝ひに持ちかけ、伊勢殿の歸參の願は大きな吉左右、伊勢の二字を偏と傍を引きわくれば、人平に生まるは丸が力とよむと有れば、當る十月にするくく」と御平産の瑞相」と、色も香も有る花の井が、言葉に花を咲かせける。判官始終を聞給ひ、やと黙然としておはせしが、「傳へ聞く伯夷叔齊は、其罪を憎み其人をにくますと言へり、すけなく追ひかへすも物の哀を知らぬに似たり。殊に武盛といひし比より、一方ならぬよしみの者、先々是へ呼出せ」とありければ、花の井額を疊に付け、「有りがたい御仁心、使のきほも立所に、御對面有らんと有る、サアく是へ」と、知らずに程なく立出づる、伊勢の三郎義盛が、主の威光に踟り、身に鱗もなき鮫小紋、麻上下に垢づきし、細袍布子も打しほたれ、携へ持てる一つの箱、案上にする置きて、遙下つて平伏す。「オ、珍らしや義盛、汝主に暇を乞はず逐電して、一旦見限りし義経を、又候や慕ひ來る、所存如何に」と宣へば、伊勢の三郎承り、「恐有る申開きなれども、君牛若の御曹司たりし時、五條の橋にて千人斬の刻、我父伊勢の左衛門俊盛といつし者を、御手にかけれしを爵憤に思ひ込み、恨を晴さんとすれば、三代相恩の主殺

の罪に落ちる。所詮討たれぬ敵討とあきらめ、俱不戴天の父が仇を忘るよからは、武士を立てても益なしと身退き、縊れても死なんす命を、老いたりし母が爲とながらへ有しは、弓矢神の控へ綱、此程誠の親の敵に廻り逢ひ、敵にてなき御主人を、暫しと疎みし天罰の勿體なさ、身にしみくと思ひ知り、御詫願ひ奉る」と、涙にくれく言上す。花の井も取繕ひ、「何かはしら木の此箱入、歸り新參の手柄始めに献上」と、御座近く差出せば、御手づから蓋押開き、一卷を御覧有るより御氣色變り、「ヤア是こそ詮議する平家の廻文、我館へ忍入り、盗み取し曲者は、扱は三郎おのれよな」と、思ひがけなき咎に義盛、「コハ情なき御疑ひ、其廻文某が手に入りし仔細、他聞を憚る密事なれば、最前御式臺にて武藏坊辨慶に、密に語置き候ふ、追つて御聞き下さるべし」「イヤ猛々しき偽り、誰か有る、アレ引立てよ」と御詫の下、西塔の武藏坊辨慶、梨打烏帽子引立て、輪棒摺つたる大紋の、袖まくりにて御廣間の大火鉢を携へ、しづしづと御前に出で、「コハ仰々しい御憤、先刻廻文持參仕ると、此御疑ひ有らんと存じ、彼が面晴れの用意致し候ふ。コレく義盛、古の高良の臣は、湯起請を取つて君の御疑ひをはらしたる例も有り、御目通りにて鐵火を握り、身の申譯立てられよ」と、火鉢に燻べたる鷹股の大矢一本、鐵を火焰に焼立てよ、飛びちる火花を打ちはらひ、指出せばいさぎよく、「伊勢三

郎義盛が、平家の廻文盗みとらざる正直心、是御覽ぜよ」と、既に燒鐵手に取る所を、「ヤレ待て辨慶、早まるな義盛、疑ひ晴れて元の如く、主従なるぞ」と宣ふ聲に、二人は夢の覺めたる心地、ハ、ハット飛びしさり、悦び勇む折こそあれ、當番の奏者罷出で、「鎌倉の御上使、梶原澁谷同道にて、只今是へ」と申上ぐれば、大將暫く御思案有り、「ヤア伊勢の三郎、察する所、此廻文渡せと有る催促ならん、其時に汝心得持參せよ、先夫までは休息すべし」と君の御機嫌、義盛はつと領承し、伺候の人々諸共に、御前を立てば花の井嬉しく、「此様子を京の君様へお咄も申したし、蜘蛛と鷹には、逢はぬがとくくお暇」と、お里をさして立歸る。鎌倉の上使梶原平次景高、澁谷土佐坊昌俊を伴ひ入り來れば、禮儀正しく義經公、辨慶諸共出向ひ、「上使と有れば方々は、鎌倉殿も同然」と、上段の間へ進めやり、御身は席を下り給ひ、饗應殊にこまやかなり。梶原平次會釋もなく、「先達て仰越されし二箇條の御不審、日逝き月來れども、便と御申開き無きによつて、右大將家以ての外の御怒、急ぎ北の方京の君の御首討つて、廻文に相添へ渡されよとの御詫意なり」と、苦々しく相述べれば、物に騒がぬ御大將、謹しんで聞召され、「去る比腰越にて、神文まで指上げしに、御疑ひ晴れざるによつて、暫く時節を見合せ、申開きを立てんと思ふ所に、存じの外の詫意、追つて返答申上げん」と、仰もあへぬに澁谷

の昌俊、「イヤ此上に御返答延引致さば、由々しき御大事、指を數へて近きに有り。右二箇條の御不審、今日中に申開き有るべし。了簡強い梶原はとも有れ、某は用捨仕らぬ」と、口にはつれなく心には、我手より渡し置きたる廻文にて、申開きを立て給へと、言はぬばかりに言ひ廻す。「ヤア此景高を了簡強いは、熟柿を笑ふ澁谷の言分、手緩しく。詭意を守り京の君の首討たうとの仰なければ、此通を鎌倉へ申遣す分の事」とすんど立つを、未座にひかへし武藏坊、「ア、暫くお待ち下されよ」と、押沈めたる其所へ、伊勢三郎義盛、華麗に装束改め、廻文の一卷をうやくしく臺にする、御前に直せば、判官座上に移らせ給ひ、「ヤア梶原、上使の一通り相濟んだれば、あれへ下つて、平家へ一味したる者どもの、名を一々に讀み立てよ」と宣へば、「鎌倉殿の上覽にさへ供へられぬ廻文を、拙者に」「イヤサ讀めといふには仔細が有る、早疾く疾く」と仰に景高立寄つて、連判狀の紐解き開き、「コリヤ如何ぢや、口の文言、我等が寺にはすつきり無い字、年號月日も知れた事」と、繰り明け、「東國八平氏の旗頭大場の平太景信、同次郎景兼、古郡の左衛門保忠」と讀みさしてぎつちり詰れば、「シテ其次の名は」「サアそれは」「サアなんと」と、問詰められてうろたへ廻れば、判官こらへず廻文もぎ取り、「去ぬる一の谷の合戦の時、某に不覺をとらせんと、おのれ一家が勧めにて、平家へうらがへつたる侍幾許

ぞや。いやといはせぬ證據は是見よ、自筆にて梶原平三景時、同源太景季、同平次景高と、親子三人の血判有る。かゝる舊惡を隠さんが爲に、詭意ごかしに此廻文、奪取らんとは、ふてくしき工よな。此外の連名讀むに及ばず」と一つに丸め、前なる火鉢へ打込み給へば、折ふし誘ふ山風に、焰々として連判は、忽尉と成りにける。せきにせいたる義盛辨慶、詞を揃へ、「鎌倉殿へ御申開きの種とも成るべき一卷を、焼捨て給ひしは訝しき御賢慮」と、憚なく申すにぞ、「オ、驚くは理、問ふまでもなし、我心腹を明さん、昌俊是へ」と近く召され、「只今焼捨てし廻文の事は、疾くにも鎌倉へ渡すべきを、某が手に留め置きしは、全く舅時忠をいたはるに非ず。今源氏に隨ふ東國の大小名の中にも、連判したる輩少からず。事治りし上なれば、御咎なきにもせよ、廻文御手に入りしと聞かば、身に覺え有る者どもは、自然と心隔り、終には鎌倉の騒動とならん。鎌倉の騒動は天下の大事、其處を思うて焼捨てたり。是も我誤にならばなれ、天下の爲兄の爲、是程迄に思ふ弟を、佞人讒者の偽にまどはされて、兄ながらも鎌倉殿のつれなき御所存、誠に他人の始りとは、能くも譬へし世の諺、今義經が身の上に、ひしと思ひ當りし」と、猛く勇める御目の内、涙うづまくばかりなり。切なる君の御悔み、思ひやつて伊勢武藏、感涙催し土佐坊も、とかう答へもなかりける。梶原は減らず口、「某親子は平家を欺く智略の連判、誠

に一味した者の爲には、結構なお情」と、ひやうまづけば氣早き大將、ぐつと焦き立ち、御佩
 刀に手をかけ給へば、辨慶中へかけ隔たり、「ア、御短慮なる御振舞、梶原に御遺恨は私事、
 鎌倉への御返答、苦しからずば御免を蒙り、某宜しく仕らん。君には先々御座の間へ、いざ
 させ給へ」と諫むれば、尤とや思しけん、「オ、忠臣は危きに顯るゝ、汝が振舞、主の難儀を
 身に引受けん」と、健けなる心さし、然らば我になりかはり、萬事よきに計らふべし。義盛來れ
 と引連れて、帳臺深く入給へば、梶原平次笑壺に入り、「サア辨慶、焼いた廻文は是非もなし、
 其代には明日とも言はせぬ、京の君の首討つて渡されよ」と、又ねぢかよれば、「イヤサ、先
 達て時忠卿を能登國へ流されし上は、最早京の君にはおかまひない筈」と、いはせも果てず、
 「ヤア其言譯暗いく、平家方の娘を具せらるゝからは、鎌倉へ對して謀叛といはんに、ぬき
 さし成るまい。京の君の首討つて申しひらき有るか、但し判官殿に痛い腹切らせるか、二つ一
 つ、手短い返事承らん」と、詰寄せく、遁れぬ手詰ぞ是非もなし。辨慶は拳を握り、思案に
 くれて居たりしが、「ハ、ア夫よ、愚夫顛倒迷之と聞く時は、善も悪も迷ひの前、北の方の御
 首討つは、不忠に似て主君を助くる大忠臣、いかにも説意の趣、相心得候ふ」と述べければ、
 「オ、其筈々々、流石天台坊主程有つて、尤な氣の付け所、然らば今日八つの鐘を相圖に、め

ろさいが死にしやツたら、梶原が受取りに參るべし、罷歸る」と突立てば、昌俊もつゞいて立
 ち、「必々京の君に犬死させぬ工夫が大事、合點か」と、善惡二人が詞詰、獨の心に取納め、
 辨「氣遣有るな」景「北の方の御首必ず討てよ」辨「念にや及ぶ」と、目禮するも睨み合、反
 打ちかくれば真中に、義有る土佐坊、佞有る梶原、忠有る武藏ばう然と、立別れてこそ 三重行
 空の、天さかる、鄙にはあらぬ京の君、雲井を出でて何時しかに、義經の北の御方と、なれて
 榮え有る武家の妻、殊更に御懐胎、御腹帯の御祝儀も相濟み、お上屋敷は 公の事繁く、お心
 にさばる事もやと、御乳人侍従太郎が館に、暫し假居の先々まで、公家武家方の見舞の使者、
 門前市をなしにける。爰にお腰元信夫が母親、おわさといふお物縫、御機嫌伺ひとて來りける。
 侍従太郎が妻の花の井女房達、「能くぞく上られし、今日はことなうおさまもじさう故、誰を
 がなお伽にと思ひしに、嬉しやく、いざ」とてお前へ連れ出づる。「珍らしや、此程は何とし
 て見えざるぞ、定めて四方の紅葉見に、彼方此方と、嚙面白き事はかり、浦山しや」と宣へば、
 「御意の通、高尾榎の尾嵐山、わけて今年は稻荷山の薄紅葉が、いつくよりも見事な事と世
 上の噂、ほんにく、針のみとすで聞くばかり、あなたからは早う來い、此方からは疾う來いと、
 參るもく紅葉見の、お晴小袖の仕立物、夜を晝に京田舎が打ちまじつて、夫はく賑やかな

秋でござりますすけな。是と申すも、義経様が京にござなさるゝ故ちやと申すを聞けば、弓も引きがた判官様最辰、嬉しいやらめでたいやら、お悦びにあがりた、今日よ明日よと思ふ内、娘が方から帯のお祝ひもすんだ、何故お悦びに参らぬと、叱つておこした文をろくに見るや見ず、何が捨置き取りあへぬお悦び、何ぞ上げたいと思へど、結構な物はあなたに有り餘る、せめて是を」と差出す、袂の内の袂紗物、「是は海馬と申して、文字には海の馬とやら書くけな、めんよう希代の御産の呪ひ、私が曾祖母が十九人、祖母はおとつて十三人、母から私が手に傳へ、あの信夫を産むまでに、一度も不覺の産をせず、満足に産みならべた、腹覺えの有る捧け物、追付御産の月満ちて、此海馬にひらりとめし、檢非違使五位尉、源の義経様の若君我なりと、大手の門をさつと開き、やすくと御誕生、おめでたやく、へ、、、ホ、、、ハアしんどや」と饒舌りける。「ほんにつべこべくと長口上、息がはずむ、娘お茶一つくんでたも」と、申せば君をかしさの、「氣輕にわさくと物いやる、おわさとは能う付きやつた」と、袖打ちおほひ給ひける。かゝる所へ奥使の女中、「申しく花の井様、君よりのお使に、辨慶様がお出でなり」と、申上ぐれば女房達、「サアく女嫌ひの武藏殿が見えたといの、濡れかけて嫌がらせ、お慰みにせまいか」宜かろくと立騒ぐ。「是々皆の衆、君よりのお使な

れば、いつもとは違ふぞや、必々駟るまい、先連合を呼んで下され。おわさ女郎、辨慶といふ人見てか、未だなら此處にゐてお逢ひなされ、かんまへて皆の衆、くつくく吹きだすまいぞや」と、夫諸共に出向ふ。何時に勝れて武藏坊、へりぬり取つて打かづき、大紋の袴ふみしだき、しづくくと奥に入り、むすと坐して一禮し、「オ、存じたと違うて、御顔色もみづくくと御機嫌の體、先安堵仕る。是と申すも夫婦の衆の御介抱、大切になさるゝ御苦勞の甲斐が見えて、祝著に存するよ」「是はく、忝い御挨拶、御主人ながら御平産有るまでは、此所に預りの京の君、殊に御存じのごとく御母君、娘が平産祈の爲願ひを立て、伊勢参宮の留守の内、彌我々が心遣ひ御推量、義経公の御前幾重にも御執成」「いやく執成に及ばぬ、物事のとりなしといふは、かなれ八合な事を十分に言ふが執成、辨慶はそれ嫌ひ、見た通を罷歸り、眞直に申さば、君も無御満足。扱是は御夫婦への咄ではない、後學の爲京の君への御物語。總じて勇士の戦場へ赴く時は、三志と申して、忘るゝ事三つ有り、國を出づる時家を忘れ、塚を過ぐる時妻子を忘れ、敵陣に臨んで我身を忘るゝ、婦人の懐胎もまつ其如く、一氣腹に舍る所、とりも直さず勇士の國を出づる時、御腹帯をなさるゝ所が、勇士の妻子を忘るゝ所、既に月満ち、すは御産の紐をとかるゝは、勇士の敵陣へかけ入つて、これぞよき

敵ござんなれ、のがすまじと引組んで、首を取るか取らるよか、好い子をうむか得産まぬか、生きるか死ぬるか生死の界、爰を能う御合點なされ、かねて無き身と思召せば、その期にのぞんで不覺をとらぬ、ナウ御夫婦、左様でござらぬか。ヤ我申す事ばかり、肝心關門の御内談遅なはる、爰は端近、密に御意得たし。女中方も遠慮めされ、奥へ參らうか」「いざお通り、御案内」と、京の君を誘ひ先に立てば、「なう御夫婦、豫てなき身と存ぜねば、其跡に必ず未練か出るではござらぬか」と、鎌倉殿の難題を、つい打明けていへばえを、暫く心おくの間に、打つれ伴ひ入りにける。年若けれども利發者、信夫差配し、「ナウ皆様、何事の御内談、お隙が入らうも知れまいに、お盃でも出してはの」「それく、マアお烟草盆、お茶持ていくぞや」「宜からうく」「お菓子もついでに頼むぞや」「さらば此間にちよつと母様、此比はお顔も見ず、お懐しや」と立寄れば、「和女も息災に有つたの、明け暮れ傍に引きすゑて、見れども厭かぬ一人子を、手離して置く親心、親懐しと思ふより、百千倍とは知らぬかや。假令御前の御意に入るとも、必々傍輩衆を袖にすな。陰口告げ口たしなんで、諸事を内端に控目に、出かし立てして猜まるよな。林の中にも高い木は、風が枝をば折るぞとよ。一人寢覺めの度毎に、逢はど如何言はう斯ういはうと、溜て置いた數々も、逢へば嬉しうて口へ出ぬ。何を言ふもか

を言ふも身を大事に、煩うてばしたもんな」と、手を取りかはし撫でかはし、心を盡す親と子の、わりなき風情ぞ道理なる。やよ有つて侍従太郎、奥より出づる屈托顔、おわさ目早く、「是は是は侍従様、お顔の色悪う、お目の内も潤んで、氣の浮かぬ御容體、御内談といふは何ぞ」「いやくく、氣遣ひの氣の字もない、氣の浮かぬ事微塵もなく、心がしよぎくと盆を待ちかねる。ヤ好い次手ぢや、態と往ても逢はうと存じた、幸ひぢや、ちよと物語致さう。別の事でもない物でござる、拙者そまじの息女、此信夫に大執心」「エイ」と親子が興さまし、娘は母の後かけ、小さう成つて身を忍ぶ。「是々、さましてもらふまい、惚れてく今日八つまでの内に貫はねば、此方の工面がぐわりりと違ふ。今奥の時計を見たが、九つ過、半時にはまだ成らぬ、秋の日は短い、八つに成るは手間隙入らず、サアおつと言うて貰ひたい。時忠の執權侍従太郎、年に不足もない男、浮氣でない、虚言申さぬ、サア下さるかサア如何ぢや」と、眞面目になれば、けらくくと嘲り笑ひ、「ア有難い忝い、深山の斧のこけら屑、誰れ取上ぐる人もなく、徒に埋ると我娘を御執心、進せましたら何となされまます」「ハテ女房にしますはいの」「あの花の井様といふ美しい奥様の有る上に」「いやてや、花の井は隙やつて、信夫を奥様にするはいの。侍冥利愛宕白山、偽ない」といふ後に、立聞く花の井嚇とせき、顔は上氣の爪紅血

筋走り寄り、「なんぢや花の井は隙くれる、何をどうして隙下さる、仔細が有らう。譯聞かねば
 自も武士の娘、ついぐづくと暇はとらぬ、其譯聞かう」「ヤアしやらくさい、昔より女房は
 衣服に譬へ、厭いたれば何時でも脱ぎかへて、外の著物を著るはい。是より外の仔細はない、
 小言いはすと歸れく」「ムウ聞えた、厭かれて添うては面白くない、隙とつた、實正信夫を
 女房に持ちやるの」「くどいく」「持つて見やよ」「持つて見せうぞ」「見るぞや」「見せう」と
 我を張つて、負けず劣らず争へば、見かねておわさ押隔て、「呆れて太郎様にはいつそ手が付け
 られぬ、慮外ながらはしたない奥様、假令如何様におつしやるとも、お前を去らせてそんなら
 ばと、娘を進せさうなおわさぢやと思召すか。女御后に成るとても、道ならぬ榮華を悦ぶ様な
 私どもではござんせぬ。氣遣ひせずとも、早う仲直らしやんせ。悉皆氣狂の沙汰ぢやまで」
 と嘲れは、「スリヤ氣狂の様に見ゆるかや」「様な段ではござりませぬ、ま氣狂でござりますは
 いの」ハア、はつと夫婦は顔見合せ、暫く詞もなかりしが、やよ有つて花の井、「實にや思内に
 有れば色外に顯るよ、氣狂とも狂人とも見ゆる筈、心は疾うから氣狂に成つて居る。其譯は、
 今日武藏殿の参られしは、京の君の首討つて渡せと、鎌倉よりの御難題、其爲に梶原平次景高、
 土佐坊昌俊の上洛、討つて出さねば叶はぬに極り、悲しや京の君様のお首を取りに見えたはい

の。お小いから夫婦の者が手しほにかけ、育て上げた彼のお子、畏つた、御勝手になされと、
 そもや首が切らされうか。殊更只ならぬお身の上、辨慶殿も斬りかねて、とつおいつ思案の上、
 昔より無いならひではなし、人の見知つたお子でもなし、身代を立てまいか、其身代は誰彼と
 詮議の上、年頃眉目容も相應した此信夫、夫とても、お家譜代相傳の人でもなく、命を下され
 といふ程の、恩を見せたといふではなし、無體には殺されず、合點してはよも死ぬまい、何と
 せうどうせう、斯うせうでは有るまいか。幸ひおわさも來て居やる、大人氣なけれど太郎殿、
 信夫に執心なといひかけて、無理に女房にお貰ひなされ、そこで私が格氣するは、憎い奴ぢや
 と隙が出る、心得たと隙取るは、サア今日の只今から、信夫は侍従が女房ぢやと、獻々の盃し
 た其上で、女房どもまづ斯うくぢやと譯をいうて、我女房に成るからは、其方が爲にもお主
 の身代、死んでくれと退引きさせず、命をお貰ひなされぬか、是宜からうと談合づく、不調法
 な女夫喧嘩も、お主の命助けたさ。そんならおれが娘は殺しても大事ないか、身勝な事をい
 ふ、道しらす物しらすと、蔑しきも恥かしけれど、正眞の脊中に腹とやら、コレおわさ女房、
 了簡は有るまいか、夫婦の者の苦しみを、思ひやつて」とばかりにて、かつばと伏して泣きけ
 れば、夫も坐したる膝を改め、「浮世の中の無心といふに、是に上こそ無心も有るまい。其返

報には夫婦の者を、八つ裂にもなされちつとも惜まぬ。惜まぬ命は二つ有れども、一つも今日の役に立たぬ、本意なき無念さ悲しさを、推量有れ」とばかりにて、はらくと泣きければ、信夫進出で、「扱もく、神ならぬ身はそんな事とは存せいで、年に似合はぬ恥しらすと思侮りし、十年二十年の宮仕も、たつた一日御奉公申しても、お主様に違ひはない。其御難儀が何と聞いて居られうぞ、私が様な者の首でも、お役にさへ立つならば、願うてもお身に立ちたい、サア首切つて御用に立てよ下さんせ。申し母様、四年跡の大煩、豊程薬は利かず、死ぬる命をお前の精力たつた一つで助かつたれど、其時死んだなと諦らめて下さんせ。私はお身代に死にます」と、聞きも敢へず飛びかより、抱きしめく、「これつかく」と物言やんないの、黙つて居よぞ。これく此子はな、一人で出来た子ではござんせぬ、顔も知らず名も知らねど、父親が有る、其人を尋ねて渡すまでは指もさよせぬ。率爾に斬らしやつたら、聞くこつちやござんせぬぞ」「コリヤやいく、如何にうろたゆればとて、母親ばかりで出来る子が、三千世界にあらうか。其上顔も知らず名も知らぬ父親を尋ね手渡するとは、何を證に尋ねるぞ。偽者、表裏者。得心せぬ者、無理やりに身に立てうとは言はぬはい。子心にさへ主従の道を辨ふるに、見限り果てたる女め、娘を連れて早歸れ、心急がし、立つてうせう。女房此方へ」と

立上る。「なう申し、マ、待つてたべ、偽者といはれては、親故此子が頼汚し、顔も知らず、名も知らぬ、夫を尋ねる印は是」と、上の一重を押脱けば、右は替らぬ詰袖に、左ばかりが振袖の、濃き紅の染模様、橘ならぬ袖の香の、昔ゆかしく忍ばしく、「是を御覽なされても、仔細を言はずば御合點が参るまい。娘が聞く前恥かしき、昔咄なれども、私のもと西の國の在所者、親は所の何かし、十八年以前、頃は夜も長月の、二十六夜の月待の夜、私が所は諸方の入込、誰とは知らず袖をひかれて、あのよものよを言ふ間もなく、暗がり紛れのつい轉び寝、つらや人の足音に驚いて其人は、おき行く袂を捉ゆる拍子、斷れて我手に残りしは此振袖、假寝の情は、たつた一度の浅けれども、妹脊の縁や深かりけん、其月より身も重く懐胎し、友達衆の介抱にて、産み落せしは此信夫、父なし子産んでは家の恥、子を捨て嫁入せよと、親々の意見、御尤とは思ひながら、二人の夫は重ねまじ、縁有ればこそ子まで産んだ物、此袖を知るべに尋ね逢はんと、國を出でて十七年、水兒を抱きかよへさまよひ、種々の憂き艱難、あの年まで育て上げて、此子が縁の薄いのか、我身の縁の薄いのか、今に尋ねあはねども、此上にまだ五年でも十年でも、女の念力、是こそ娘よ父御よと、名のり逢はするそれまでは、蚤にも喰はせぬ大事の娘、相應に物の道理も忠義も知つたれど、お役に立てぬは右のわけ、卑怯でない、未

練でない申譯、永々と嘸お氣がせかう、サアお入りなされ。娘立ちや、お暇申さう、コレ立ちやいの」と、いへど立ちかね見捨てかね、親子心の隔の一重、誰とは知らず信夫が脊骨障子越、ぐつと指いて一割、うんと悶ゆる苦しみに、是はとおどろく母の親、侍従夫婦も仰天し、「ヤア殺人は武藏坊、かよる狼藉心得がたし、如何に〜」と詰めかくる。母は泣くやら氣は狂亂、「扱は夫婦の衆とぐるになつて殺しやつたの、聽かぬ〜、本の様にして返しや」と、絶り喚けば、「こりややい、聲低に物を言へ〜」いや高う言ふ、何故切りやつた「夫れは段々仔細が有る、まあ手負を勞り介抱せよ」「何んぢや、勞はれ、いたはれといふ程なら、切らぬがよい」と放さねば、「待て〜、見する物有り」と、肌押脱けば這は如何に、下著の衣の紅に、大振袖の伊達模様。「これ見たか、此片袖は其方に有らうが、播州姫路の福井村、十一兵衛が所の月待、二十六夜の假寝は、其方で有つたな」「エイ、其時のお前の名は」「オ書寫山の鬼若丸」「すればお前は娘が父御、其父御が又娘をば」「オ殺したは身代り、お主の役に立つるはい」「ハア悲しけれども、夫ならば恨はない。これなう娘、尋ねた其方の父御といふは辨慶様、御對面申し上げやいの」と、抱き起せば起されて、「母様何ぞおつしやるさうなが、耳が聞えぬ、もう目が見えぬ、必ず辨慶が側に居て、お前も殺されて下さんな、ア、術ない苦しい」といふ聲も、次第次

第にせぐりきて、早玉の緒も切れ果てと、此世の縁は絶えにけり。「ハア悲しや、最早息がせぬはいの」と、聞いて皆々立騒ぎ、見れどもほとほりばかりにて、其甲斐さらになかりけり。母は膝に抱き上げ、「扱も〜、淺ましや、如何なる因果な生れ性ぞいの、父御を尋ね初めたは五つの時、申し母様、餘所の子供衆には、父様も有り母様も有る、私にはなぜ父様がござらぬ、逢はせて下されと言ひ初めて以來、一年々々智恵の付くに隨ひ、譯を聞いて猶逢ひたいとせがむ故、在所にも有るにあられず、其夜は都の衆も有つた物、もしやと都へ上つて尋ねても、知れなんだこそ道理、此方様で有つた物。可愛や此子は、一生父御を戀慕ひ、一生物を思ひ詰め、今日といふ今日尋逢ひ、せめて一時半時も、我子か父様かと、一所にも居る事か、詞もかはさず、しかも父御の手にかゝり、辨慶が傍に居て、母様も殺されなと、いうて死んだ心の内、如何ばかり苦しかりつらん。父御の仕方も慘たらしい、同じ殺す道ならば、互に親よ娘よと、顔も見たり見せたり、納得させての上ならば、是程には思ふまい。ヤレ娘よ、父御前こそつれなくとも、母に恨は有るまいに、たつたま一度母様と、言うてくれよ」とばかりにて、空しき死骸を抱きしめ〜、くどき立て、聲も惜まず泣ききるたる。辨慶も諸共に、咽ぶ涙を押しかくし、「よしない母が悔み事、咄を聞くと等しく、扱は我子と飛立つばかり、生頬も見たかッしが、な

まなか見つ見せては、未練の心もおこらんかと、生きぬ様に剝りし物、一たまりも堪へうか。辨慶とても木竹ではなし、生れてより此年まで、跡にも先にもたつた一度、てんがうな事して生れたる、我子と聞いて憎からうか、可愛かるまいか。其様に泣くを見て、太郎御夫婦の居やらずば」と、泣くより泣かぬ苦しきは、鳴蟬よりもなかくくに、泣かぬ螢の身をこがす、小唄も我身に知られたり。「是に付いても、親の恩の深き事、今取分けて思ひ知れ。唐土の樊噲が、母の小袖を母衣と名付け、戰場まで持つたりといふ、夫を學ぶにはあらねども、此下著は母の手づから縫ひ仕立てよ下されし、汝に片袖を取られたれども、亡き母に添ふ心して、縫ひも直さず振袖の、此儘四國九國の戰場、今日の今まで肌を放さず持たればこそ、名も知らず顔も知らぬ親と子の印と成つて、十七年めに廻り逢ひ、主君の絶體絶命の、大事のお役に立つる事、偏に亡き母の此小袖に手を通し、親子を一所に引合せ給ふ、廣大無邊の親の慈悲、子故に親は名を上ける、能う死んだな出かしたな。とはいひつよも息ある内、是こそ尋ねた父ぢやはやいと、こんな頬でも見せたらば、嘸嬉しがらうもの、是はばかりが残多い。親も一生子も一生、言ひ初めの言ひ納め、せめて一口父様かいのと言うてくれ」と、生れた時の産聲より、外には泣かぬ辨慶が、三十餘年の溜涙、一度にせきかけたぐりかけ、侍従夫婦が貰ひ泣、四人の涙八つ

の袖、八つの時計を打ちまぜて、悲しい事の數々を、言ひ盡すこそ果しなき。辨慶はつと心付き、「南無三寶、歎に紛れしか、半時の時計も聞かざりしに、早八つ、御首討つて渡さんと、梶原に契約の刻限、時移つては事むづかし。サア太郎殿、京の君の首討つて渡されよ、是より我は檢使の役」と、席を改め坐しければ、「實にく、公事に私の歎換へがたし、只今京の君の御首討ち申す」と身づくろひ、信夫が死骸引寄せて、敢なく首を打落し、「サア受けとられよ」とどつかと坐し、返す刀を我身の弓手の小脇に突き込み、きりよくと引廻す。物に動ぜぬ武藏が驚き、妻はあわてと縋り付き、兎角の詞もなくばかり、「ヤア騒ぐまい武藏殿、我切腹御合點が往かぬか、是なう御邊が細工の京の君の此置花、尤大概は似たれども、實は雲の上人と、地下人の色香の違、梶原が邪智強き眼に見咎め、詮ない事になつてはと思ふに付け、京の君の傳とは、鎌倉殿もしろし召したる此侍従太郎が首添へて渡さば、天地を見ぬく梶原も、よも作り花とはいふまい、誠の花と見せう物、信夫に犬死もさせまい物と思ふ故、御邊が細工に添へて遣る、心計の色香ぞや。吠ゆるな女房、是まで御存じない事を、それ泣いて奥へ知らせるか。萬事武藏殿の差圖を受け、おわさと中好ふ、御平産の跡々まで、心を付けるが良人への忠節、心得たるか、泣くなく。サア武藏殿、時移る、首うつてたべ」「オ、理を聞く上は、辭退申

さぬ、観念有れ」と抜放し、ひらりと見えし刀の影、首は前へぞ落ちにける。直に袂を押切り、二つの首を包むに餘り眼にもると、涙よ歎き果しなく、さらばくと、首を左右にかき抱き立上れば、「是なうしはし」と取付いて、「我は未來の約束せん」「我は親子の一世の限」「共に名残に今一度、亡き顔見せてたべなう」と、泣けど慕へど焦るれど、心強くも振捨てよ、見せぬも辛し見ぬも憂し、返らぬ道に憧るよ、夫の別子の別、二つ歎を一筋に、見捨てよ御所へぞ三重かへりける。

第四

道行伊勢土産

思ふ事、内外の宮に曳く鈴の、鳴らずばよもやさばかりの、参宮同者はよもあらじ。義經の北の方、京の君御懐胎、御産の紐もやすくと、時忠の御臺所、娘思の御願立、二人三人の御供にて、どれが主やら下部やら、皆一様の染浴衣、著連れて笠のヤアこれの、肩にお祓伊勢土産、包む人目や風呂敷や、旅立つ比は曉の、明星が茶屋を跡に見て、馴れし都へ下向ある。櫛田の宿は名のみして、髪に擬へるぬめ帽子、其色艶も行く人の、袖に縫るよ伊勢比丘尼、唄今の

目元は成る眼元え、晩にかならずまつ坂と、しなだれじやれて行く雲出、これぞ津の町かうの彌陀、太神宮と御一體、佛神水波と分れども、隔てもなみの水たまる、窪田も越えて嬉し野や、はてしなが野も打過ぎて、都の方へむく本の、木蔭にしはしやすらひ給ひ、参の時は一足も、早う願のかけたさに、何處が何處やらわくせきと、せく心より此關の、尊き地藏もそこくに、拜みし事のおろかさよ。あれく其處へ乗りかけの、馬士が小唄も外ならぬ、關のお地藏は親よりも、ましぢやにあひのつまたもる、其一節も御慈悲の、餘りて深き其中に、わけて女の妊帯、五月目を守らんと、此御佛の誓なれば、心に願かけまくも、忝しと伏し拜み、心も足もいそくと、坂の下より鈴鹿山、山又山の土山に、誘ふや嵐、ちるや紅葉の亂れくと、空にちりぬる散らし書、こよは硯の水口や、田面におつる雁金の、一行列るごとくにて、跡や先やと子供の参宮、お蔭での、抜けたとさ、えいぐくく、さつくくさ、さつと流るよ横田川、浅く渡りて深きを知る、神の恵の動なき、石部の宿より梅の木村、薬も花の香に匂ふ、よう御所風となふられて、人目まばゆく袖おほひ、忍ぶほど猶聲々に、唄あれは慥に都の上臈、姿優しくしをらしく、さういうて派出ならず、移氣な人心、かい取袂のなりふりに、しんぞ此身を打込んだ、オ、笑止く。うたふを聞けば聲の文、さすがに都遠からず、心勇みの花摺衣、千

種の錦古郷に、かへすも暫し名に高き、草津の宿にぞ三重著給ふ。明今年や世の中よいとのよいと、浦々里々、参宮道者の家々の家印、ござれく、是についてござれの、よいとのもの。長閑に治る君が代の、お禮参の人群集、鎌倉参勤京上、往來の人に荷ひ賣、「目川仕出しの田樂、鹽梅よし」と賣る聲に、物見だけは道者の癖、我もくと立集り、「なうくと皆の衆、豆腐の始り、田樂の由來聞かまいか」「コリヤよかろ、所望々々」と立ちかよれば、頓作言ふも商ひ口、しかつべらしく團扇を上げ、「東西々々、豆腐の因縁堅くとも、耳をすまして聞し召せ、昔々、天竺の達磨大師と申せしは、顔に似合はぬ豆好で、座禪豆と名付け、常に賞翫有りけるが、初めて豆腐を思ひ付くとて、壁を睨んで九年めに悟をひらき、なむおみとうふくと、奈落の鍋へ落入つたる湯豆腐も、終には浮み上る所を、南無あり杓子のすくはせ給ふ誓願なり。扱唐土二十四孝の唐夫人といふ嫁御は、豆腐の姥に孝行者、それより和國辨當にひろまつて、煮染に成り、竹輪に成り、縮緬豆腐は細きをいとはず、お壁とは、白きを譽めたる大内言葉、お公家方には小野の道風、武家方には敵陣へ寄せ豆腐、名を萬天に掲げ豆腐、別きてこのくく、田樂と申し奉るは、忝くも白河院より始つて、都に祇園二軒茶屋、難波に生玉島の茶屋、菜飯に田樂ひんよいと、神勇めにも成るぞかし。それにまさりし目川の田樂、けん

けんしたるお方には、雉焼にて参らする、いつかな不食なお人でも、此太鼓飯つぎの、底を叩いてでんく、田樂、唇に障へるや否や、吸込み飛込み、咽は鎌倉街道の名物なり」としやべりける。在り合ふ人々どつと笑ひ、「豆腐の因縁聞いたれば、心もはれやれよい慰」と、皆々別れて通りける。京の君の御母上、伊勢参宮の歸り足、姿は地下に窺せども、供の女中の取なりも、ほんじやりとして可愛らし。荷かたづけ田樂屋は、不思議さうに立寄つて、「ヤア何れもは、なみくのお人ではなささうなが、男切もつれず、伊勢参宮でござんすか」と、問ひかけられて御臺所、「さればとよ、遙か西國方の者にて候ふが、是なる二人を伴うて拔参り」と、半分いはせず、「ぬけくとした嘘つかしやんな、尤身の廻は田舎めいた参宮人に見えれども、物ごし爪はづれば都も都、内裏上、藤のひんぬき」と、星をさよれて、はつと三人顔見合せてためらふ所へ、先走りの侍、鐵棒ひきすり、「御上使梶原殿、義經の北の方京の君、めのと侍従太郎主従が首持たせ、お通りなるぞ、片寄りませい」と呼はらせ、鎌倉へ歸る急ぎの道中、御臺は斯くと聞くよりも、梶原が前に轉出で、聲も涙にせぐり上げ、「自は京の君が母、平産祈りの甲斐もなく、身二つになりもせで、刃に罹り死ぬるとは、天照神にも捨てられしか、宿世如何なる報ぞや。姫と侍従が死顔を、此世の名残に只一目、見せて給はれ梶原殿」と、消入るばか

りになげかるれば、平氏景高ぐつと睨め、「京の君が母めとは、好い處で出くはせた、己も一つ首にして、鎌倉へつれて行く。あれ引ツくよれ家來ども」承ると一度に寄るを、「どつこいさせぬ」と田樂屋が、荷の枋押取つて、薙立てく叩退け、御臺の世話を焼豆腐、後に圍うて立つたるは、鹽梅よしとぞ見えにける。「ヤアいはれぬ味噌めが肩持だて、彼奴からまづ繩かけい」と、聲で威せばせよら笑ひ、「商賣の豆腐屋が、田樂料理の鹽梅見よ」と、枋のつくく竝んだる、主も家來も一くるめ、撲惱されてせんかたなく、一度にはつと逃けちつたり。御臺を始め附々まで、「思ひがけなき田樂屋が、身にひつかけての働は、知るべの人かどうぞいの」と、言ふ間程なく大童に成つて立ち歸れば、「コレく此方は何人で、御臺様の御介抱、名は何といふ人ぞ」と、せはしけに向ひかくれば、「エ、急な所で名の鑿穿、いふ間もござらぬ。義經様の由縁と聞いて、世話するからは、何ぞで有らうと思はしやませ。アレ爰へ、敵の奴ばら、一度で懲りぬ手籠の鹽梅、二はい三ばい八はい豆腐、ざくく豆腐に刻んでくれん」と、追ひまくりほつ拂ひ、又立歸つて、「コレくく、爰には居られぬ早お退き、跡は拙者が受取つた、早う早う」とせき立つる。「いやコレ重ねて禮いふ爲、そもじの名をばついちよつと」「エ、此瀬戸ぎはに根問ひ葉問ひ、是非言へならかい摘んで、かく申す某は、義經様の妾、靜が爲には現

在兄、親磯の前司に勘當受けし藤彌太と申す者、是から跡は追付いて、道次申しましたよ。一足も先へお出でく」「扱は靜の兄御よの、靜どころぢやござりませぬ、急にく」と主従三人、都の方へ落しやる。平時景高取つて返し、「ヤア下主め、ようもく邪魔ひろいで、三人共に逃したな。代に己が首こそ落す、観念せよ」と一文字に切つて掛る。「シヤ、まつかせ、心得し」と、枋で丁ど受留むる、擬勢ばかりに梶原が、刀を其儘豆腐屋が、枋も動かす暫しが程、相手と相手が顔見合せ、前後を見合せ兩人が、耳と耳とに互の口、何やら囁きうなづき合ひ、「出来たく、此上仕おほすれば、コリヤ藤彌太、約束の通り大名ぢやぞ。都には身が家來、番場の忠太を残し置く、言ひ合せて首尾能くせよ」「ハ、ア天晴梶原様、斯うした仕組で付込むからは、義經の首は我手の内、都の首尾を氣遣あられな」「オ、さうぢやく、此上ながら、人に共謀ぢやくと悟られな」心得たりと又立向ひ、二打三打義經を、騙かる爲の仕組の切合、遠い術を藤彌太に、追はれて態と逃けて行く、梶原平時が恐ろしき、工の程こそ三重。唄扱も泰平長久の、弓も袋に納まれば、矢竹心の武士の、敵に後を見せいで、戀に腰をぬかした。名におふ靜が一奏、祕曲の底を堀川の、御所は酒宴の表座敷、いつにすぐれて賑はへり。御酒の機嫌もよしつね公、靜が膝に寄添ひ給ひ、「何時聞いても美しい、器量につると琴の音色、取分

け今日より義経が、北の方に直すれば、琴の調子も一際勝れ、我妻琴の位の高さ、母を呼寄せ悦ばせいと付けしが、未だ来ぬか、早う〜」あい〜と重ねて急ぐ召使、しき浪よする磯の前司、「只今は〜」と立出づる、京に名うての扇の指南、夫に離れて鬘もなき、ひつこき髪二つ折、色はなけれど香は残る、昔を思ひやり梅の、花の姿のあたり物、惜しや老木とひねぬらん。「母様お上りなされたか、我君のお待ちかね」と、水入らずの親子の取次、「磯の前司参上」と、手をつけば義経公、「ア、堅いは〜女の三つ指、物にたとへて見る時は、延紙に書いたる一筆啓上、堅いも理、神代以来承らぬ、女の名に磯の前司、其かたみを取置いて、向後は義経が姑御寮、斯うばかりでは合點がいくまい、お知りやる通り、頼朝の咎めによつて、あつたら花の京の君、散された閨の淋しさ、静を今より北の方、本妻とさだめねば、鎌倉殿の疑はれぬと、家老どもが勸によつて、今日より静は奥様、此目出度さを言聞かせ、老の身の悦に、重ね〜の悦を」静にはなせと有りければ、「申し母様、自が身の上は、冥加に餘る君のお情、まだ此上のお情は、お前の勘當遊した、兄磯の藤彌太様、縁といはうか、不思議といはうか、京の君のお袋様、御参宮の下向道、梶原が見咎めて、危き所を身にかへ、比類もなき大手柄、おけがもさせずお供して、此館へお歸りなされ、顔見た時の悔り嬉しさ、

思ひがけなき對面も、兄弟の縁の深さ」と、聞くに驚く母の前司、「フウ何といやる、兄の藤彌太が此御所へ来て居るとや」「アイ戻らしやつたは一昨日、此度の働も、底の心は勘當が赦されたさ、我君も感じ給ひ、親子の中を直せと有つて、刀まで下さりました」「なんぢや、刀まで賜はつた、是は〜冥加ない。して其兄は何處に居るぞ」「サア兄様は刀の冥加、武士に歸つた身の悦、神詣して来うと、今はお留守、追付け下向なされう程に、勘當赦してしんせて」と、静が願ひに義経も、「赦してやれ」と御挨拶。「ハア恐有りや、我々しきの忪が勘當、あつと申す筈なれど、其處を得言はぬ此母が、磯の前司と申す名は、死別れし夫の本名、連合も古へは武士の數にもいりし人、彼の兄が悪黨にて、武士を忘れし賭博好き、世間を嘘で言ひ掠める、其おどもりが親にもかより、浪人さした不孝者、かたはな子は猶可愛と、親の貧苦は厭ひもせず、七年前の臨終にも、念佛は申さず、此のらめは何處に居る、根性を直しなば、爺が勘當悔しかると、思ひ死がいとしさに、ハテ案じさつしやるな、連合の死後に此母が、磯の前司と名を呼べば、夫婦此世に居る同然、心さへ直つたら、二親一所に赦すも同然、オ、さうぢや嬉しうおぢやると、夫れで浮世の思をはらし、迷はぬ正念大往生、連合に約束の、詞も反古にならぬから、女にあらぬ男の名、磯の前司と世にうたはれ、今様指南のいとなみに、静は

育てあけたれども、兄が性根はまだ直らぬか、詫言にはなぜ来ぬか、待ちに待つた母なれど、立歸つて見る時は、詫の仕様が氣にいらぬ。静何故というて見や、我君のお由縁へ御奉公申せしも、和女や母へ繋がる縁、何かさし置き先母が方へ来て、今度の様子は斯うくと、言うたからおれが阿らうか、待つ所へは来もせいで、お館へ来て手柄顔、殊に前司が来るを知つて、爰に居ぬは出違うたか。なんほ父親の遺言でも、性根を見ねば赦されぬ。斯う急入れるも其方が大事、又彼奴が無法出さば、兄にかよつて妹まで、君の愛想も盡きやうかと、彼方此方を思ひ子の、性根をしかと見るまでは、お返事暫く御容赦」と、女ながらも後先思ひ、道理を立てよ申せしは、磯の前司と男名を、よばるゝ器量と知られたり。「ホ、ウ母が詞尤々、此義經が謂はれざる挨拶より、落ちぶれたる昔の咄、座もめいつて氣も浮かぬ。今いふ通り靜は本妻、姑の磯の前司、重ねて舞も望まれまい。何と此座をわつさり」と、其儘一さし扇の手、所望々々と有りければ、「ア、つがもない此年寄、舞うたとて諒うたとて、何がわつさり致しませう。是非御所望なら装束して、衣裳で化かす老の舞、此處ではお赦し下され」と、辭退も聞かず、「いややく、装束の舞は奥で見ると、年寄ればとて捨てられぬ、伊勢物語の業平は、九十九に成る婆とさへ、寝られた例も有れば有る、平にくのお詞に、靜もそばから、「これ母様、御辭

退は却つて慮外、さあくとせり立てられ、「是非もない、そんなら舞ひましよう、色も香もない此母が、扇取る手もしわだらけ」と、突と立つて押開き、唄北嵯峨の踊は、葛籠帽子をしやんと著て、踊る振が面白い、吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、戀しき人は見たい物ぢや、所々お参りやつて、とう下向めされ、とがをばいぢやが。「ホ、、、オ、恥かしやお笑ひ種、此舞直しはあれにて」と、微笑み行けば義經も、打ちつれ奥に入給ふ。跡に靜は兄弟思ひ、「母様お出ではしれて有るに、此兄様なせ遅い」と、氣を揉み焦る後より、「北の方様靜様、我君の召します」と、腰元姿見すほらしく、立出で給ふ京の君、靜ははつと恐れ入り、涙と共に御手を取り、「定つた御本妻、京の君様ともあらう身が、鎌倉の聞えを憚り、信夫が名をかりそめに、腰元姿の勿體なさ。お身の爲とは言ひながら、賤しい靜が上に立ち、信夫何せい斯うせいと、人目をつくるふ主顔も、只ならぬお身の上、お腹にござる兒様を、産むまでの辛抱と、堪忍して下さりませ」「なう斷に及ぶ事かいの、辨慶の心つれなくば、今は世になき我命、誠をいほど尼法師とも様をかへ、先立ちやつた信夫の跡を弔ふが道なれども、輪廻穢い女の心、夫までは得思ひ諦めぬ。斯うして殿のお傍に置いて下さるが、皆の衆の情忘れはせぬ。構へてく、遠慮なしに押しこなしして、信夫々と頼むぞや。かく言ふ内も人目有り、北

の方様いざ此方へ」と、座をたち給へば抱きとめ、「其お心根が猶おいとしい、上々様に苦はない物と思ひしに、こんな災難も有る物か。人の名も多いに、信夫とは誰が付けて、今では北の方様の、お身を忍ぶ、世を忍ぶ、いまくしい名で有るはい」と、返らぬ事をかきどく。遣戸口に咳拂、兄藤彌太が立歸れば、静は色目を覺られじと、「コリヤ信夫、兄様の今お歸りと、母様へお知らせ申せ」アイといらへて立給ふを、藤「ア、これくくく、先待つた信夫殿、母人の詫言は早うても遅うても、いや應言はさぬ義經公の取持、理窟くさい母人も、今度の鼻が手柄を聞いて、四も五もいはず合點で有らう」「イ、エお前や私が思ふ様に合點なりやよけれど、物事に念入る母様、假へ大將のお詞がかとらうが、どんな手柄をなされうが、夫れには乗らぬ日比の氣質、ぬらりくらりの間に合者、心の直つたを、とつくりと見とどけ、其上の事とおつしやつた」「ハテ小むづかしい、心の直る直らぬは、嗅いで知れるか、見て知れるか、其固意地に懲りはてよ、今朝からの神參、上加茂下加茂祇園の社、母の固意地止め給へと、祈る程にける程に、日脚も傾く腹も傾く、幸の二軒茶屋、立寄る鼻ももと豆腐屋、田樂串から出世した、二本指の身祝酒、俄武士の尾も見せず、微酔機嫌で立出づれば、おいくと跡から呼ぶ、歸つて見れば面目なや、指付けぬ悲しさ、とんと刀を忘れて置いた。何もかも殿が下され、此様

な侍になつたれども、なうく同じ指物でも、田樂串とは違うて、刀脇指は指しにくい。是信夫殿、此様に身の恥を打明けて言ふ正直男、恥の次に心の思はく、恥かよさうとかよすまいと、信夫殿のお返事次第、此屋形へ來てちらりと見るより、首だけ惚れて居ます」と、ほうど抱付き振袖の、肌へ手を入れしなだるれば、「こりや兄様てんがうばかり、勿體ない」と引放せば、「いやてんがうぢやない、眞實惚れた、妹のつかふ腰元に、兄の惚れるが勿體ないとは、如何して信夫が勿體ない、勿體ない譯聞かう」と、問詰められて南無三と、驚きながらさらぬ風情、「エ、尖々しい詞咎め、勿體ないというたはな、親の勘當願ふ身が、其訴訟はほつて置いて、脇道の小さいづら、親の冥加に盡きさしやる、勿體ないというたが誤でござんすか。母様は奥の間で、御所望の今様一さし、お装束も出來たやら、笛も鳴る鼓も調べる、お前も餘所から拜見して、舞も濟んだ其上、目出度う親子の御對面、わしも信夫も三絃の役人、心もせければお先へ」と、言紛らして急ぎ行く。藤彌太は兩人が、詞のはしく素振まで、ぐつと吞込む頬魂、鎌倉よりの忍とも、奥にはしら髪之母の舞、聲の細りも今様當流、琴三絃の音も戀に、明寢衣の衣の肌薄し、辛いぞ憂いぞなんとせう。藤「フウ扱は京の君を信夫にして、信夫が首を、けうといく、やつちやしてこい、此通り注進せうか。いやくくく、まだ暮れきらぬに御門の

出入、咎められてはむづかしい、ハア、どうせうな」唄深き思の淵となる。「ホウそれよ、せい
ては事を仕損する、此藤彌太を犬ともしらず、味う参つた判官殿、ヤア奥へ往て勘當の、いや
いや、妹が今の素振、」唄見るに付け聞くに付け、胸にせまりし数々の、袖もかわかぬ沖の
石。歌の唱歌に引換へて、一筆知らせの硯石、床の料紙を幸ひと、蓋押明けてする墨より、歪
む心を試さんと、三絃たづさへ静御前、空酔つくる千鳥足、「唄ゑうたとさく、土手の細通危
ない、合點ぢや、危ない。兄様何を書かんす」と、聲かけられて悔りし、あたふた袖に狀
押し隠し、「其方は三味の役ではないか、爰へ来ては間が缺けう、サア、奥へ」「イヤ大事ご
ざんせぬ、母様の舞も一番濟んだ、我君の御機嫌、酒一つ飲め、も一つ飲めとひら強ひに強ひ
られて、唄酒の上句に亂るよかたを波、彼方へざらり、此方へざらり。彼方よりは此方さん
の、唄ざらり、さらさらさつと、書かしやんした今の文、隠すは曲者、其れ見たい」「いや
其文とは、アノ物よ。隠した譯は彼信夫に、思ひりくべく候」「唄いよし御けんと書いたる
は、ほだしの種か、花薄。ほんに誓文、戀ぢや有るまい、欲と見た」「慾とは妹、何を見た」「ま
だ直らぬ心を見た、人には漏らさぬ兄妹中、サア有様に言はしやんせ」「オ、言へならば言は
う、我も言へ」「わしに言へとは何の事」「ヤアとほけまい、信夫といふは京の君、濡にこ

と寄せ抱付いて、腹帯を髓に見た」「夫れ見付けて如何さしやる」「鎌倉へ注進する」「エイ、フ
ウ扱は勘當の詫言とは」「オ、嘘ぢや、梶原と心を合せ、伊勢路から付込んで、靜が兄が味方
顔、釋迦でも喰はず鹽梅よし、かうした思案はまた田樂、義經の首を串ざし」と、驅出すを引
止め、「エ、曲もない兄様、悪事に與して身が立たうか、恐ろしい工の段々、聞いた者は妹ば
かり、外へは聞えぬ奥の囃、鼓や歌にまぎるよも、お前の仕合、親の慈悲。サア舞の終らぬ内
に悪心を翻し、善心に成つて下され」と、兄を思ひの眞實心、涙は詞に先立てり。「ヤア兄が
出世に不吉のほえ頬、ぞつこんしみ込む此大望、いつかないかな翻さぬ。ばれ出すからは一時
勝負、いで注進」と又かけ出だす、先に靜が立塞り、「やらぬ、何處へもやらぬ」「エ、面
倒な女郎め」と、ずはと抜いて切りかくれば、得たりや紫檀の延棹に、はつしと受け、「妹を殺
さうとは、人でなしの猫の皮、不幸の上塗ばち當り」と、拂ふ刀を又付込み、「此世のいとまを
取らさん」と、太刀筋血筋の遠慮もなく、兄は強力刃物わざ、妹はかわき無刀のあしらひ、
三味と白刃の鏢音筒鳴、いらつ懸聲二上りに、心もめいる三下り、三世の縁の糸筋も、斷れて
ふたとびかへらうび、天柱、糸藏さんぐに、亂れちつて争ひしが、終には三絃切折られ、逃ぐ
る靜を藤彌太が、取つて引敷く膝の下、びつくと働かせず、「サア此兄と一つになるか、否や

といへば突き殺す」と、胸に刀を指付くる。物音奥へ聞えてや、母は装束脱ぐ間もなく、走り出でて抜打に、兄が肩先すつばと切る。うんとツけに反りながら、「死にぞこなひの老耄め」と、親に刃向ふ極悪人、寝ながら静が諸足搔けば、どうど倒れて立上らんと、蠢く藤彌太起しも立てず、胸腹ぐつとさし通す、老女の手なみ早業に、手足を張つて苦しみしは、心地よくこそ見えにけれ。母が心ははり弓の、藤彌太が髻片手に攔み、ぐつと引上げ面打守り、「コリヤ此刀を抜けば命がない、息の有る中言ふ事有り、眼が未だくらすまば、此親が扮装を見よ。烏帽子水干男の装束、母と思ふな父親の磯の前司、エ、汝淺ましい、本心に立歸らば、爺が勘當悔みをろと、母に前司が名を譲り、待ちに待つた甲斐もなく、悪に悪を積み重ね、現世後生を迷はす故、磯の前司が蘇生して、手にかけてたを覺えしか」と、烏帽子装束かなぐり、藤彌太に碓と打付けて、「是までは父の役、前司といふ名を力にて、思ひ切りは切つたれども、母が身にもなつて見よ、現在我子を手にかける、母も因果己も因果、憎けれど佛に成りをれ」と、わつと叫入るを見て、静も共に泣きくづをれ、「言うて返らぬ此有様、せめては最期に心を直し、親子兄弟睦じい、詞をかはして死んでいの」と、取付き歎く其聲の、藤彌太が耳にや入りたりけん、むつくと起きて眼をひらき、「ハッア誤つたく、親を親とも思はぬ我を、親は我子と思召

し、父の名を母に譲り、勘當を赦さんとの、御恩を無下にするのみか、天の冥罰二親の、御手にかよる不孝者、元此の館へ入込みしは、梶原と心を合せ、京の君の實否を糺し、義經公を料にと取つて陥さん爲、二つには番場忠太、京都に残し置く間、牒し合せて夜討の手引、大將の首とらば、梶原が取持にて、大名に仕てやらうと、欲心に親の慈悲を忘れ、御手にかよりし今此時、一生の非を改め、善心になつたれば、最期にせめて寸志の忠義、是れ静、今宵鎌倉武士どもが、夜討にせんとの仕度有り、必ず御油断なさるとなと、義經公へ申上ぎや。言ひ置く事も是まで」と、貫く刀に手をかけて、抜けば絶え行く息の往來、生死の道ぞ定めなき。「エ、仕成したり残念や、其根性をまあ三寸、早う直してなせくれなんだ。辨慶殿の娘御は、女なれども、父の手にかよつて忠義の死、我も母が手にかよつて、死ぬるに二つはなけれども、根性の直り様が遅さに、犬猫の死んだ様に、此死にさまは何事」と、空しき死骸に取付いて、老の繰言親と子の、別はつきぬ歎なり。静は涙のひまよりも、「いうて返らぬ御悔、鎌倉勢寄すると有れば、歎きは無用。是れ母様、もう何時でござんせう、今宵も夜半、あの太鼓は、時うつ數とも思はれぬ、ほんにせはしい鐘太鼓、如何やら世上も物騒がしい、必定夜討に疑ない。此次の間に釣つて有る、鐘をならせば御家來衆が、駈け付ける豫ての相圖」「滅多無性に撞鐘は、此母が心得し」と、走り行く

より相圖の鐘、かうくとこそ三重響きけれ。静小袂をかい褰け、凜々しけに聲を上げ、「夜討が寄せて候ふぞ、起合ひ給へ」と呼ばれば、奥口取々女中のさわぎ、「何ほ起しましても酒の酔、殿様のお目が覚めぬ」「覚めいで是かよい物か、わしに任しや」と立掛り、御具足箱の蓋押明け、鎧取出し重たけに、提けるやら曳きするやら、御寢所の障子押明けさせ、お枕元へ投げやれば、天性其器備つて、武勇にさとき御大將、御鎧の金物の、からめく音に忽然と、御目も酒の酔もさめ、むつくと起き、鎧引さけ端近く立出で給ひ、「如何にく」と宣へば、有りし次第をこまんと、申す内から手ツとり早く、鎧直垂小手脚當、金作の御佩刀、弓矢甲の次第よく、取つてあてがふ機轉の静、「天晴御身は弓取の、持つべき妻よ」と御戯れ、さわやかに出立ち給ひ、「誰々も休息せよと私宅に歸せば、宿直の武士も有合ふまじ。假し義經が手をおろさば、何萬騎有りとも皆殺し、馬引け」と呼はつて、縁の上に突立ち給へば、静長刀かiconで、お側をはなれず引添ふ所へ、時も移さず夜討の大將法師武者、表門を込入つて、廣庭に駒駈けする、「義經の首給はらんと、土佐坊昌俊向うたり。最早遁れぬ、御腹」と、聲々に罵るにぞ、「ヤア義經を討たんとは、しをらしき土佐が夜討よな。相手には不足なれど、此世の暇とらせん」と、太刀抜きをばめ廣縁より、ひらりと飛鳥の早業さそく、静長刀かひぐしく、

切りはらひ薙ぎ廻る、勢に避易して、寄手もたやすく進み得ず、しばし支へて居る所へ、武藏坊を始として、源八兵衛、伊勢、駿河、追々につけ来り、御大將に引添ひしは、天帝修羅の戦に、須彌の四州の四天王、帝釋天を守護せしも、是には過ぎじと謂ひつべし。寄手は臆せぬ土佐坊昌俊、采配振立て諸軍の下知、辨慶いらつて進み出で、「坊主の相手は坊主が好い、引くな昌俊、逃ぐるな土佐」と、聲をかけて飛懸れば、擬勢にも似ぬ土佐坊昌俊、逸足出して逃行くを、何處までもと追うて行く。源八駿河も拔連れ、残る軍勢一人も、餘さじ物と三重切立つれば、さしもの廣き堀川御所、塵灰もなく逃散つて、御所もひとつそとしづまつたり。かよる所へ御門の脇より、武者一人寄来り、「土佐坊昌俊是に有り」と、弓矢たづさへ突立つたり。伊勢の三郎とつくと見、「辨慶にほつかけれ、跡も見す逃去りし、其昌俊とは扮装の、そくばくかはりし鎧直垂、但し鎌倉殿の御内には、土佐坊二人有るやらん、實否を申せ」と詰掛くる。「オ、不審尤なり。先達て我名をかり、寄せ来りし土佐坊は、梶原が郎黨番場の忠太、只今向ひし某こそ、左馬頭義朝公より鎌倉殿へ二代の忠臣、澁谷土佐坊昌俊なり」と、直平頭巾脱捨つれば、けにも疑ふ所なし。伊勢の三郎ゑせ笑ひ、「いかめしき忠臣呼はり、いつぞや日の岡にて出合ひし時、退引ならぬ親の敵、討つ場を討たぬは判官殿、お爲くを誠と思ひ、義

を知る武士と思ひしに、偽をもつて命を助かり、今此所へ寄せ来るは、取り所もなき表裏者、刀汚しと思へども、義盛が親の敵、一分試にためしてくれん。いざ来い、勝負」と身繕ふ。「オウ義盛が疑尤千萬、それにこそ仔細有り。先此一通、大將の御覽に入れてくれられよ」と、鎧の引合より取出し、差し出すを取次いで、義經に奉れば、いぶかしながら押開き、見れば牛王に血判せし、野心なき起請文、大將猶も不審はれず、「イヤ昌俊、此起請の文言は、義經に弓引き敵たはど、日本大小の神祇の御罰を請はんと書きながら、今宵夜討に寄せたると、起請とは相違せり、心底如何に」と仰せける。「さん候ふ、鎌倉殿、梶原父子が申すに任せ、彼奴を君の討手と有る、元來とがなき義經公、梶原ばかり上しては、御大事と思ひしゆゑ、某遮つて望みしは、討手に言よせ罷上り、御兄弟の御中、日月の如くせんものと、思ふ心を梶原に見すかされ、其場の争ひ武士の意地、義經の首取つて罷歸るか、さなくば昌俊が骸を堀川の土に埋むか、二つに一つは違へじと、一通の神文、鎌倉にて書きし故、頼朝卿は申すに及ばず、梶原まで疑晴らし、肌ゆるさすより工を聞き、かれが盗む平家の廻文、先へ廻つて奪ひ取り、義盛へ渡せしは、君に難儀をかけまい爲、我は澁谷金丸とて、義朝公より譜代の家來、頼朝卿も判官殿も、頭の殿の御形見、大切に思ひ奉れば、何れに最貞依怙もなし。鎌倉殿へも起請

文、判官殿へも起請文、二通の起請を反古にせじと、夜討に寄せたる昌俊が、心を見する此簾」と、重簾と共に投げ出すを、伊勢三郎押取つて、見れば弓には弦もなく、矢尻を抜いたる簾の矢殻、けに敵對はぬ證據ぞと、大將を始め義盛も、心を深く感じ入る。昌俊重ねて、「是伊勢の三郎、日の岡にての約束違へず親の敵、土佐坊昌俊討つて本望とけられよ」と、襟押しくつろけ待ちかくれど、義盛はなかくに、昌俊が忠義を感じ、討たんす氣色はなかりける。義經深く感心有り、「かくまで我に忠義の土佐坊、伊勢が討たぬも理なり。此上は存へて義經に仕へよ」と、仰せも果てぬに呵々と打ち笑ひ、「昌俊が主君は鎌倉殿、討手に向ひし判官殿、刃向はざるは義者の道、奉公せよとは愚の御説、昌俊が此體、堀川の土とならずんば、鎌倉殿への誓紙は反古、生きては武士の名の穢、此御所の庭を借つて、義盛の手に掛れば、不忠と呼ぶるゝ事もなく、二枚の起請も武士も立つ。さりながら判官殿、我を我と思召し、存へと有るお詞は、生々世々に忘れまじ。心にかよるは御兄弟、御中和睦を此世にて、見奉らぬ残念々々、此上ながら御中よく、未來の御父義朝公、我にも見せて給はれ」と、目にては泣かぬ武士の、詞が直に涙なり。大將御目うるませ給ひ、「今の世の人心、士農工商に限らず、誠に立てよ誠に書く、誓言誓言皆反くに、汝は夫に引きかへて、偽に誓紙を書き、誠に命を捨つる事、亡か

らん跡まで、汝が譽を残す爲、祇園のお旅に隠なき、官者の宮に相殿せさせ、誓文の神に崇むべし」と、御感の詞末の世に、十月二十日の誓文祓、此昌俊を祭るとかや。「ハ、ハ、ハ、恐れ有りや有りがたし、人数ならぬ昌俊、命一つ捨てずんば、古今無雙の御大將の、かよる情を聞くべきか、未來の譽此上なし。サア義盛、首取つて父に手向け、年來の本望をとけられよ」と、すつとよつてどつかと坐す。義盛も此上は、辭退申すに及ばずと、太刀抜き放し後に廻り、「伊勢の左衛門俊盛が一子、同名三郎義盛、親の敵只今討つ。昌俊殿御免有れ、弓矢擁護の八千矛の神、許させ給へ」と振り上げれば、首は敢へなくをちかたに、重ねてつくる鬨の聲、敵かと思ればさにあらで、源八兵衛、騎河の次郎、鎌倉勢を追拂ひ、勝鬨あけて立歸り、今夜夜討の大將を、討漏しては候へども、武藏が追掛け候へば、追付け召連れ参るべし」と、申上ぐれば御大將、「ヤア今夜は鷄望喜速の日、戦を急ぐべからず。夜は何時ぞ明方近し、一番鷄の鳴くを相圖に軍を出し、逃け潜む奴原を、片端より切盡せ、是れ義經が軍慮の大事、旁其目心得よ」と、御下知智謀は吳子孫子、張良陳平韓信に、諸葛が術を暗んじ給ひ、しかも劍術早業は、雲にも翔り水にも入る、龍に翅や虎の巻、七書を胸に疊みこむ、御大將の御勢、恐れぬ者こそ三重なかりけり。

第五

明渡る、野邊も山路も照る空に、敵の心はくらま道、夜とも晝とも辨へず、逃ぐるを追掛けほつ詰めて、土佐が乗つたる駿足逸物、おろしも立てず飛乗つて、相合馬の二人乗、居喰は武藏坊主の好物、尻馬に打跨り、馬歴神の暴れたる勢、鞭振り上げて丁くく、人と馬とを砧の拍子、しつていからころさつくさ、はいく、沛艾打立て追立て、辻も小路も飛越えはねこそ、室町通横切りに、堀川御所の門前に、乗留めて大音上げ、「土佐坊昌俊生捕つて参つたり」と、呼はる聲に義經公、源八兵衛伊勢駿河、一様に躍出で、「コレ、武藏、そりや違うた、土佐坊は義盛が親の敵、夜前手にかけて本意をとけた、そいつは贗者番場忠太」武「ヤア道理で滅多に面を隠す」と頭巾を取れば、武「ハア番場の忠太、昌俊を出しにつかふ土佐の贗ふし、此生ふし三人中へ振舞ふぞ」と、馬上にぐつとさし上げて、「受取れやツ」と投付ければ、腰も折れぶし足立たず、蠢きながら手を合せ、「土佐に似せたも梶原の皆指圖、忠太が命助けて」と、吠えぬばかりの見ぐるしさ。武藏坊馬乗放し、忠太が背骨をしつかと踏まへ、「助けるは坊主の役、己に似合うた戒名付け、引導渡して得させん」と、三尺五寸をしやにかまへ、「汝元來梶

原が家来ながら、昌俊と嘘をつき、自業自得果、終には轉りと素首を落され畢んぬ。ア、悲し
 きかなや、今日只今昌俊が名を藉つて殺さるよは汝が損、其損を名に取つて、正尊と付けて
 こます、喝」と言うて打つ太刀に、首は飛んでぞ死してける。扱こそ賢と正眞の、土佐坊昌俊
 土佐坊正尊、二人の土佐が名の紛れ、義經公に敵たひしは、此正尊が事なりけり。判官御悦喜
 まし／＼て、「家来といへどもさす敵なれば、梶原を討つたも同然、勇めや／＼」と宣ふ所へ、
 女中の預、黒井の軍治罷出で、先達て靜御前に仰付けられし今様の女舞、早御舞臺も成就し、
 役人残らず相詰め候。直に御覽有るべうもや」と申上ぐれば、判官彌御機嫌能く、「老中が今
 度の勤功、勞をも晴す爲、早始めよ」と、御説も君が御代長き、末廣扇今様舞臺、賑ふ御所こそ三重。

花扇邯鄲枕

謠 浮世の戀に迷ひ來て、／＼、思をいつか晴さん。「是は色里のかたはらに住む者なり、我好
 色に身をやつし、太夫、天神、あるひは夜發の假寐にも、露の情を受けしより、露の情の文字
 を直に、名をも露情大盡と、もてはやされしも今ははや、親の勘氣に肌寒き、紙子の皴のよる
 となく、ひるともわかす通ひしに、いまだ色道の悟を開かず、誠や在原の業平を好色の神にい

はひこめし、岩本の社へ歩を運び、諸分手管の道を辨へ、ついでなれば島原の、昇夫が方へ立
 寄らんと存じ、謠 只今彼里へと急ぎ候」通ひなれし、道は昔にかはらねど、變る姿と口の端
 に、いゝ編笠の一文、西にかたむく日影さへ、しゆじやかの野邊に照添ひて、謠 行けば程な
 く出口なる、こんたんの宿に著きにけり／＼。「ハア、昔にかはらす三枚肩でおすは／＼。コ
 リヤたまらぬ、ア、浦山しの廓通ひ」と、人目忍ぶの軒の下、笠かたむくる暖簾のかけ、主の
 昇夫内より出で、「ア、是々、謠なら聞きたうない、通りやく／＼」「いや苦しうもないおれぢや」
 「どなたぞい」と笠を覗いて、「エ、イお前は、扱てもお前は露情様か、是はしたり」「なんと
 久しやく、命あればぢや」「先御息災」「そなたも無事で重疊々々」「扱此お姿は」「はて愚智
 な事を問ふ、いはすと姿で推量しや。とかく傾城買と灰吹は、青い中に賞翫なされ、粹に成る
 と追出さるよが一時、てつきりと廓へ行かば、色の褪めた灰吹男と、唾吐きがなするであら
 う。そちは辛い顔もせず、はつばすつば、忘れぬ／＼」「扱は左様か、ハテお笑止や、それは
 氣の毒せんばいりて出來合を上らぬか、エ、折悪い御臺の留主」と、獨打つたり舞ふを見て、
 「イヤ／＼、只今は所望にない、心づかひ無用々々」「然らば一種拵へて、久しぶりのお盃、どり
 やお伽上げませう」と、押入より枕取出せば、「コリヤ珍しい色めいた文枕、いはれが聞きた

い「されば其張枕は、此里の妓様方、紋日の催促身請の相談、付文投文、或は付合ひ間夫狂ひ、憎いかはい嬉し悲しの、種々無量の文どもを一つに集めて、鼻が仕事に魂膽の張枕、是をなされてまどろみ給ひ、來方行末の悟を御開き候へ。我等は其間、酒の爛して参らん」と、布團引被せ入りにける。「エ、きさく者ぢや、是非に紙花と出たい所、今はやうく鼻紙にも」紙子の袖を枕にあて、けにや廬生が見し榮華の夢は五十年、我も此一睡に、昔の夢を見るやと、魂膽の枕に臥しにけり、く。明廓通は皆駕籠で押す、おれも通へど駕籠昇いておす、押手勝手も紛ひなき、昇夫が門に駕籠かきする、爰ぢやくと内に入る。「いかに露情に申すべき事の候」「そも如何なる者ぞ」「いや私でござります」「手代の彌六か、こは何故」「とは御吉左右御勘當のお詫かなひ、お迎に参りて候」「來たか、てんとびやくらい嬉しやく、イマまた己が親父程有つて、餘程にもてるく。扱思ひがけもない、どうして急に御免された」「是非をばいかではかるべし、御身勘氣を赦さるべき、其瑞相こそましますらめ。早々駕籠にめされ候へ」「おつと心得」のり移り、「宿へ歸らば來る事ならぬ廓の見納、是れより直におせくく」と、簾上ぐれば紙子の袖も、故郷へ歸る錦の袂、昔の姿にたがやさん、折に幸ひ三絃の、ねじめにつれてもてるかく。いき杖の音二上に、乗せて合せてもてるはく、駕籠ももてますはいくく、

えいさくくえいさつさ、榮華も夢とは島原の、揚屋をさしてぞ三重うかれ來る、今此里に川竹の、身をば流に島原の、ヨイヨイサヨ、出口の柳ふりわけて、戀と情のヨイサヨ二思、結ぶ契は仇人へヨ、今の妬は誰ゆゑぞ、サイ、世渡るわざの假枕、勤の身こそたよりのやと、便もとめて又爰の、里に名うての太夫職、ぬき八文字の連道中、今日もかはらぬ花の宿、もんじが許に入來れば、幫間の喜作立出で、「ヨウ見事々々、夏花様、冬菊様、二季相並びしお姿、月花は磯一對の珊瑚の玉、色を競べる二人の君は、露情様のほだしの種、いかな天女もほだし裸で逃けさんしよ、やつちやく」とほめ詞、ふたりもにつと笑顔して、「又わるがうな事ばかり」と、炬燵にとんと腰打ちかけ、庭の紅梅咲分けて、紅白妍を争へり。喜又露情様を争うてか、お二人の顔がわるい「夏はて悪うても如何しても、夏花は先の逢方」冬「先でも萬でも此冬菊は心意氣」夏いや左様はなるまい「冬「たれが」夏わしが」とせりあふ中へ、喜おつと見え、合指合投とたんの割喧嘩はもらひ、爰で我らが智の字を振ひ、お二人様のお文を、是れ此様に」と縁先の、手拭かけにくより付け、「是でお敵の心を知る狐良、露情様の見えるまで、奥で飲まう」とそより立つ。唄 深い浅いは、うへからサマ見えぬヨイナ、底の心は寐にや知れぬ、寐てくしれる、歌ひ打連れ入りにける。座敷には金銀の襖を立て、四方の女郎の貸借に、

出で入る人までも、色どる風の粧は、誠や名に聞きし借銭の都、機嫌上戸の樂も、かくやと思ふばかりの氣色かな。夜晝通ふ露情大盡、色と酒とのもんじが座敷、醉狂閣や阿呆殿の、常附の間に入りける。爰に喜作が才覺にて、心を引き見る二通の文、手拭かけにかけ置いたり。「ア、恐ろしの傾城の心や、おれが心を見ん爲に、正眞の狐良、思ひりくべく候の油揚がぶらく。なんぢや冬菊より、夏花より、又憎うはない物、開いて見よう。いやくこちらを見ばこちらが恨めよ、あちらを見ればこちらが恨みん。所詮此文見ずに歸らう」往のやれ、我住む宿へ歸ろやれ、足中を爪立て、ちよこくちよここと爪立て、「ア、思へば二人の君が心のたけを書きたる文、ア、儘よ、いやく只恐ろしい、ふつつと止めよ、イヤやめまい」と、行きては歸り歸りては、足もしどろに行惱む。喜作いそぐ、「ヤア旦那、白藏主のお身振どうもく、中々良にかよらぬ、お前は狐の骨頂、扱此お小袖はお二人の太夫様から」「皆までいふな、是も露情を引見る爲か、外に心は空蟬の、もぬけのから衣、君が移香誰にか被せん、脱ぎはやらじ」と引寄せ抱寄せ、喜「そこを喜作がおつ取つて、互に悋氣の花指衣、片袖ばかり打ちきせて、きせて雉子の雌さま、片袖は雄さま、比翼の取形所望々々。我らは又下男」と、餌刺箒に路次笠も、待てば甘露の日傘、機轉利かしてさしかくれれば、「コリヤ出かし

た、是で二人が恨も有るまい、太夫とおれが二人前」左六法右小褌、姿もしやんと振分けて。限知られぬ、大法アリヤコリヤ 明思の淵よ、いつそ沈まば此身もともに、六法沈む里はどくく、上の町下の町、中のく中の町を通掛に、なんと太夫、久しやく。お前も御無事で嬉しやく、唄ア、鳥もなげ、鐘もなれく。大法二人寐し夜は往なしたうもまだく、ハツア無いがさ。喜よいや、露情様の振分姿たまらぬく。何をかくさう、お前の事で二人の君も修羅のたね、唐土の玄宗皇帝は、雙六の勝負にて、楊貴妃、虞氏君の後定め、例を引いて二人の君に、手鞠つかせて相方定め「よからうく、おれを抱かうと抱くまいと、ほんのふたりが肩次第、精一ぱいにつかせい」あつと障子を押開けば、かねて趣向の夏花、冬菊、色を争ふ眞紅の糸、鞠の心もはずまして、勝たば否應いはさぬと、悋氣妬の千鳥がけ、手玉もゆらにつきそむる。喜旦那は鼓弓、我らが三味も、不調ほうけたたとき次第く」出次第の、音々に合す手鞠歌、唄とんくく、とんと諸國の戀のわけ里、數へ數へりや、武士も道具を伏せ編笠で、張と意氣地の吉原、花の都は、歌で和く敷島原に、勤する身は、誰と伏しみの墨染、煩惱菩提の撞木町より、難波四筋へ通ひ木辻に、禿達から室の早咲それがほんに色ぢや、一ニニ三四、夜露雪の日しもの關路も、ともに此身を、馴染かさねて、中は丸山たど丸かれ、と弾き唄ふ。喜おつ

と手鞠は喜作が預、千年ついても取りはづさぬはお前方のたしなみ、お二人の悋氣あらそひ、拙者がとんと扱うて、互ちがひのさどめ言、かはゆがつたりがられたり、「それは露情が望む所、誓文ぞ、おりや變らぬ」冬ハテ主様さへかはらずば、夏花様「夏冬菊様」二人二人して大切、いとしがらう」と寄り添へば、「目出たいく、是で御中睦まじし。御祝儀に一踊、旦那諸共サアお立ち」と、喜作が文作高々と、唄太鼓三絃の、なりよや見よやな、袖振る姿ふりもよき、四季の榮華の一踊、是を來て見よかしのえ、音頭先揚屋の座敷には、西の三十疊には、黄金のとさん盃に、太夫天神居流れて、園には不老の櫻を咲かせ、春の榮華ぞおもしろや、東の座敷は三十疊に、おねまの屏風ひきならべ、白い肌をあらはして、睦言なんども聞えたり。筒には五色の菊をいけ、秋の景氣に色そへて、廓に花をぞ咲かしける。榮耀にも榮華にも、實に此上や有るべきかと、君と手に手を取りかはし、障子開けばこは如何に、誦畫かと思れば、月又冴けく、春の花さけば紅葉も色濃く、夏かと思へば雪も降りて、四季折々の榮華も夢なれば、今まで騒ぎし女郎、太鼓の聲と聞きしは窓打つ風、揚屋の座敷も皆きえんと失せはてよ、有りつる昇夫が假の宿、魂膽の枕の上に、眠の夢はさめにけり。露情は夢さめて、「ハア、南無三、扱は夢にて有りけるか、能々思へば、手管諸譯の道辨へる此枕、是も偏に岩本の

神の恵」實に面白や魂膽の、く、色の世ぞと悟り得て、望をかなへかへりけり。義經悦喜限なく、「御代を祝する靜が舞、面白しく。是も偏へに京鎌倉、和睦をすべき瑞相」と、悦び御座を立ち給へば、伺候の諸士も壽きて、靜御前の御臺なり、三國一の名將に、隨ひなびく武士も、勇有り智有り仁義有る、三々九郎判官の、御威勢御果報夜に倍し日にまし年にもす、實に動きなき源氏の御代、五穀成就民安全、百億萬歳末かけて、治る國こそ三重ねでたけれ。

御所櫻堀川夜討終

おしゆん 近頃河原達引

上之卷

祇園の段

七重八重、けふ九重に匂ひぬる、花の都の川東、祇園の社年ふりて、和光の影もいちじるく、
 参り下向の人群集、咄し萬歳居合ぬき、えいとうく諸見物、けに繁昌の靈地なり。ものよふ
 の、身はいとどなほ難からめ、瀧口左内と聞えしは、龜山の勘定、役人も心をおくじまの、折目
 たどしき長羽織、それには似ざる相役の、横淵官左衛門、紛ふ方なき悪者づくり、しばしは爰
 に立ちやすらひ、「何と官左衛門殿、我々が國元などは違うて、繁華の地と申す物は、まあ
 やかな事ではござらぬか」「さればく、此度貴殿我等役用にてまかり出で、しばらくの都住
 居、いつ來ても厭ぬ賑はひ、是を思へば田舎にぐづく暮すといふは、申さばめんくの不仕
 合せ、何と左内殿、さは思さぬか」「ア、其お詞御尤にはござれども、譬にも申す通り、花はみ
 吉野人は武士、たとひ田舎にをるとても、心に引けの有るべきや、いざ神前へ」と兩人は、打

ちつれてこそ行きすぎる。人きは目立つ風俗は、祇園の町に名も高き、おしゆんといへる戀知りが、二世の誓を神かけて、願ひは重く足軽く、仲居まじく歩みくる、向ふの方よりすたくと、來かゝる男が目早くも、「テモマア妹、よい所で行き合つたな」「ホ、オ兄様與次郎様、よい所で逢ひました。案じらるゝはかゝ様の御病氣、別にお變りもないかいな。殊に目さへも不自由なお身、嘸お前のお世話でござんせう」「イヤモウ別に變りはないけれども、いつともふらふらと、たゞ引立たぬ母ぢやの病氣、したが物を苦しやるな、追付けさつぱり本復さしやろ。こちもけふは此邊へ用が有つた故、序ながらの祇園まゐり、又是から外へ寄つていぬる所もあれば、此頃ゆるりと逢ひに行きませう、さらば」と小短き、羽織打ちふり別れ行く。氏よりも、育ちにつるゝ人心、男ぶりさへ常ならず、來かゝる井筒屋傳兵衛と、遠目に見ても焦るゝ人、それとおしゆんがさし招く、手に走り付き、「そなたも今日は祇園まゐりと聞きたりしが、よい所へ行くはした。マア氣を急いたは身請の事、互ひに深いといふ事は、人に知られた二人が中、外へ遣つては此傳兵衛が男も立たず、マア當分百兩ばかり手附をやつて、金の鎖で繋いで置く事を、手代の萬八と喋し合せ、大方に手附けの才覺」「サイナ文でもしらす通り、わたしを身請したがる客が有ると、ほんにまう氣の揉める事ばかり、どんな出世の身に

成るとて、おまへに別れ片時も、生きながらへる心はない。いとしやきつう苦が有るか、此まあ色の悪い事はいな、其の苦もみんなわしゆゑぞ、こらへてくだんせこらへて」と、手を取りかはし泣きくどく。折りから後へ瀧口左内、夫れと知らずる咳を、聞いてびつくり立ちのく傳兵衛、「エ、コリヤ左内様、爰へはまあ何時の間に」と、隠れもならぬまじめ顔、左内も片頬に苦笑、「見れば遊所の女中さうなが、密な用でもこゝは往來、人めに掛れば何のかの、社へ參詣有るならば、はやうく」と追立つる、詞に否とも云はれねば、おしゆんは別れ行きすぎる。「ナニ傳兵衛、お身にも兼て存じのとほり、拙者もと關東浪人漂泊の内、僅な好みに御親父喜左衛門殿の世話をもつて今の主取り、龜山へ有り付いて新參奉公、だんく御前の首尾合よく、間もなく勘定頭仰せ付けられ、恩顧譜代のめんくとも、肩を並ぶる身の立身、これといふも龜山へ、代々出入の喜左衛門殿の世話下されしゆゑと、恩を讐には存せぬ此瀧口左内、心にかゝる其方の身持放埒、御國へ出るたび親父の噂、某此度上りしを幸ひに、意見を加へ、心腹を嬌め直さうと、是まで意見したは幾度か。したが若い時は誰しも有るならひ、とはいふもの見た所が、よつほど染み付いた體たらく、得手勝手な義理盡に、無分別など出す時は、第一が親への不幸、世間の人の評判誹、夫れ程の事辨へぬ身でも有るまい。ハテつまらぬ事は

相談もしたがよい。此左内が恩を受けた井筒屋の息子の身の上、聞きすてに致すべきか。とくとく内へお行きやれさ、諸事は晩ほど、早くくと立ち上る。傳兵衛は忝なみだ、「お馴染とて御懇な度々の御意見、用ひませぬ不届をお叱りもなう、事を別けての今のお詞、中々わるうは受けませぬ、有りがたう存じます。殊にあなたが當お役にお成りなされてより、諸色算用廉直にまかりなり、惣掛や仕入れ方、取りわけて親共が悦び、此脇差の小柄までも、殿様より拜領なしたる程の我々が身の首尾合、これと申すも皆あなた様の御高恩御取成し、さらくと徒には思ひませぬ」「ハテ其禮云ふには及ばぬ、身持を改めさへすれば、此左内も嬉しい忝い。ちと又晩など身が旅宿へも来たがよい」と、心つくく瀧口は、宮居をさして別れ行く。あと伏拜み傳兵衛は、涙のうちにもくどくと、「他人の身でさへ目に餘つての意見、親父様の心根をさぞとは知れど、勤の身にておしゆんが貞節、馴染むにつれて可愛さ増し、退くにのかれぬ二人が中、これも因果のひとつか」と、身を悔みたる一人ごと、後の方より官左衛門、しづしづと出で来り、「ヤア傳兵衛待つてゐた」と、聲かけられて泣きがほ隠し、「これはく官左衛門様、よい所へお出でなされました。此間お頼みなされた罽の儀、三百兩に付けて有るゆゑ、いよくお拂ひなされまするならば、おツつけ是へ仲賣を、手代萬八が同道致して參るは

ず。夫れに付きちとお咄しと申すもマア御無心の筋、委細は萬八に」「オ、サ委しく承知いたしてをる、随分三百兩なら拂ひ申さう。それがしも入用の金子なれど、平日懇意の其方の無心、否といふも何とやら氣の毒、當分百兩は用立ち申さう」「夫れは近頃有りがたい仕合、イヤもうあなたもお手づかへなればこそ、大切な道具をお手放しなざるよに、餘儀なき御無心申せしに、御得心有つて用事を足すといふも、偏にお陰」と、禮の八百三百兩の、金ふり擔けいきせきと、中うり勘藏同道して、手代萬八、「ヤアよい所に若旦那、幸ひ官左衛門様もお出でなされてぢや、萬八殿を伴うて參りました」「オイノこちも見える時分と最前から待ち心、マアく此處へ」と居並ぶ茶見世、傳兵衛は懷中より、八橋の罽取り出し、「コレ勘藏どの、こちの手代萬八とは馴染さうなが、わしが逢うたは此中初めて、其折もいふ通り、出所の確なは、即ちあなた御所持の罽、今御相對申して、三百兩で手を打つた」「イヤもう家にくそよれ、井筒屋の若旦那が世話ぢやもの、何の粗末の有るものか、サア是れ代金三百兩」と、包渡せば萬八もろとも、金改ためて渡す罽、たがひに引き換へ取りをさめ、「幸ひ去歴々の旦那衆が、乞ひ望まる此罽、買人の有る内急に見せねばならぬ代物、其内お目に」と中うりは、とつかわ急ぎ立ちかへる。官左衛門は二百兩、懷中して立ちあがり、「念のため百兩の預り手形、認めて置きや

れ、身は一先いて来る」と、立ち別れよば此方の道へ、来るはたしか揚屋の六左、「オ、イ〜」と傳兵衛主従、招けば程なく六左ゑもん、「ホ、オ傳兵衛様、このごろ内申します通り、おしゆん様を身請せうと、望みのお客が手附を御渡しなされうと有るゆゑに、則ち其お客が今日は爰へ見えてなれば、今相談に参りがけ、お笑止な事なれど、何をいうても皆金盡」「イヤ是六左、おしゆんと深い中といふは、人に知られた此傳兵衛、外へやつて立つべきか、時宜によつては生きては居ぬ、また死ぬるからは一人は死なぬ」「ホ、ウそれ〜、此萬八が腰押しやないが、身請を取り持つ六左衛門、一番駈にしやつぶりと」「六「ア、氣味たが悪いはいな、首筋元からぞつとするはいな。若ししやつぶりと言はされては、マア好の酒も呑めぬはいな。若し又急にお前の方で」傳「ホ、オ身請せう、おしゆんが身請せう、世話を頼む六左衛門、それ手附金百兩渡す、是で其方らの談合は」「イヤまう何がさて〜、お前が身請なさるれば、おしゆん様もよろこび、私もしやつぶりを脱るゝ、何處も好しぢや」と懐中より、矢立取り出し手附の證文、「まづ此金をちつとも早く親方へ、傳兵衛様、お出を待つ」と、金請取つて六左衛門、活々として引つかへず。跡へ横淵官左衛門、「サア〜證文請取らう、出來て有るか」「ホンニなあ、はつたりと忘れてゐた。殊にこゝには判もなし、手形せうにも矢立の用意は」「ア、これ若且

那、途中でそりや間に合はぬ、はて今六左衛門から請取つた手附證文、手形するまで百兩の質物」「オ、サク、夫で此場を取りはからひ、手形認め、晩になりと引き換へに來たがよい」「然らば左様」と、件の一札手に渡せば、「身は近邊の兩替屋で、金改めて直に旅宿へ、兩人共跡から」と、別れてこそは歸りける。跡見送つて手代萬八、「官左衛門様のお蔭で、どうやらかうやらおしゆん様は繋ぎ留めたで、此萬八までも大安堵、何とお嬉しうござりますか」「イヤもう嬉しうなうて何とせう、是も皆そなたの働」「ハテお主の爲ぢや物、働かいでよござりやしよか。是からまだ跡金の工面じふめん、これも又此萬八が見んごと働き出してお目かけよ」「オオ頼む〜」と悦ぶ折から、息もすたく〜六左衛門、大汗になつて駈けもどり、「ア、御人柄に似合ひませぬ、お顔だけに沙汰はすまいが、かうした金を人に掴まし、手附とは横道な」と、皆まで聞かず手代萬八、「ヤア何とお言やる、おらが旦那、似合はぬの横道のと名を立てて、手附の金に何云分、倉忽な事ほざき出すと、その分には濟まさぬぞよ」「是御手代殿、濟ますの濟まさぬのとは、そりや皆此方から言ふ事、今請取つた手附の金、往にがけに念頃中の兩替屋で改めさせればみな質金」ヤアとびつくり包みをほどき、見れば最前渡した金、「さては中賣勘藏めが、ほつかり一杯喰はしたか、悪い奴」と氣もそどろ、「コレ〜萬八、知りや